

---

# レディと呼ばせて

樹林

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

レディと呼ばせて

### 【Nコード】

N4080C

### 【作者名】

樹林

### 【あらすじ】

親が経営している会社の存続のために、息子である卓巳がお嬢さまの元に世話係として任命された。さて、卓巳はお嬢さまの世話係として暮らしていけるのか！ラブとコメディのお話です

## 登場人物（変更：7/21）

### メインキャラ

西沢 卓巳  
にしざわ たくみ

愛華の元に世話係or執事として雇われた（のかな？）不幸な少年。愛らしい顔つきが特徴で、自分の顔が女の子みたいことから、あまり自分の顔を好んではない。

小堂 愛華  
しょうどう まなか

お嬢さま。ちょっと性格に問題はあるが、それでも割りの良い子だったりする。ちなみに卓巳の事を下僕と言い慕っている。

西森 カナメ  
にしもり

愛華の邸のメイド長。ハーフだが、自称日本人で通している。まだまだ謎の多い人物。

天野 小鳥  
あまの ことり

愛華のクラスメイト。何かと愛華に突っかかってくる。

狩野 明海  
かのう あけみ

卓巳の元彼女。愛華から別れるように言われ、別れるのだが……

東郷 亜里沙  
とうこう ありさ

笑顔がとても似合う可愛い子。アバラ骨折と全身打撲した卓巳が入院した病院で出会う。それ以外はまだまだ謎の少女。

## サブキャラ&脇役

朝からティーを楽しむ生徒A・B・C 『5パシリ』

ちよっこり登場した名のない生徒A・B・Cプラスアルファの執事3人。他の生徒が登校しようが下校しようが常にティーを楽しむ生徒、もとい暇人。ちなみに話の内容は常に自慢話。これぞ私の生きる道、と言っているかのように自慢を自慢で返し、さらには「凄い」とは口が裂けても言わない3人組。

本庄 梨乃 ほんしょう りの 『7パシリ』12パシリ』

明海の友達。陽気な性格だが、時と場合によりかなり良い人に変身！ ちなみに珍しいジュースを飲むのが趣味だったりする。けど今までにアタリといえるジュースに出会えたのは五本。出会える確立ひくっ！

高松 良助 たかまつ りょうすけ 『8パシリ』11パシリ』

以前卓巳が通っていた学校の友達。卓巳同様成績が悪く、下から数えて二番目のブービーだったり。かといって卓巳と数点しか違わないため、実際は同レベルだったりする。ちよつとがっかりな一面やら、ちよつとこれは……みたいな一面を数多く持っている残念な男の子。

ゴーヤ100%ジュース 『8パシリ』

梨乃が買ったジュースの一つ。原材料の欄を見ればあらビックリ、ゴーヤのみ！ 苦くて、後味悪くて、咳き込むジュース。ちなみに眠気を覚ましたい時はコーヒーの3倍は威力を発揮する。さらには缶に様々な俳句がプリントされている。ちなみにゴーヤの素晴らし

さを表した俳句のみだけ採用される。これぞ権力の力！

ドキドキ、ワクワク。これを食べれば記憶力UP、バージョン2・5！ 食堂の小母ちゃん一押し！！ 『9パシリ』

以前卓巳が通っていた食堂のメニューの一つ。食べたくない食べ物、見た目最悪の食べ物、トラウマになる食べ物の三冠王を見事達成した代物。ちなみにこれを食べれば頭脳は高まって、それと同時に何かを失うこと間違いなし！ ちなみにこれまでの犠牲者は8人。

大男A・B 『13パシリ』

卓巳が入院している病室のドアの前に立っていた二人組み。なにかとハモル。もう気持ち悪いぐらいハモル。そのせいか双子と勘違いされたことも今までにしばしば。たぶんきつと今後一切登場しない人物ランキングどうどの1位！

朝倉あさくら 空くう 『16パシリ』

小堂家でメイドとして働いている子。主な仕事は中庭をプチ庭園にすること。それ以外はメイドらしい仕事はさっぱりしていない。ちなみに趣味は花いじり。特技は花言葉を直ぐに言えること。

## 1 パシリ 私の世話係に任命します

突然ですが、感情に流されて一時的に大きな決断をする事はよくない事だと思います。もちろんその中には当たりもあり、当たりがあるならハズレもある。俺の場合では一面は超大当たりで、一面は超特大級の大ハズレなのです。

そう西沢卓巳は思っていた。

卓巳はカッコイイと言われるより可愛い、そう比喻された方がしっくりする顔立ちで髪の色素が薄いのか少し茶色をしたブラウンヘア。大きな眼が特徴で、それに合った長いまつ毛、そして太陽の光を浴びないのか白くスベスベした肌。全てが男性と言うよりかは女性と感じさせていた。

卓巳は高校二年生の男子生徒だった。『だった』と言うのは、つい十分ほど前に高校を中退させられてしまったのだ。

そして卓巳は高校を無理やり辞めさせた張本人である小堂愛華を睨む。だが、卓巳が睨んだところで恐いというよりは、どちらかといえば可愛いと表現したほうが適切な訳で愛華は笑みをさせて卓巳を見ていた。

「それで庶民は晩ご飯なにが食べたい？ ああ、やっぱり庶民にはカップラーメンとか言うやつがお似合いね。それなら至急手配させましょう」

卓巳に聞いたはずなのに、愛華は一人で勝手に解釈して勝手に決めた。

そんな愛華に卓巳は何も言えず、ただただ広い部屋にある一つだけ場違いな小汚い椅子に座って愛華を見ていた。

広い部屋にはシャンデリアから綺麗に彫刻された机やタンス。全てがお金持ちと言われているような部屋だ。もちろん愛華が卓巳に「庶民」と言っているからして、この部屋は愛華の部屋だ。

そして卓巳は大きなため息と一緒に昨日の出来事を思い出した。

\*

\*

学生である卓巳は学校に行き、そして何もイベントもないまま学校を終えて卓巳は一人で帰途についていた。

卓巳の家から学校まではさほど距離がなく、そのため歩いて登下校している。

ものの五分ほど歩いたところで卓巳は家が見える位置までつく。

だが、卓巳の家の前には見知らぬ車が一台停まっていた。一般家庭が集まる住宅街では決して似合わないリムジンが、だ。

卓巳は不信に思いながらも、家の中に入らない訳にもいかないため玄関のドアを開けて中に入る。

その時に不審を覚えて玄関のドアを開けなければ、違った未来だったかもしれない。だが、ドアを開けた以上中に必需的に入らざるを得ない。

「ただいまあゝ」

そう言いながら玄関に置かれている靴を見る。玄関にあるのは父さんと母さんの靴、そして見知らぬ女性用の靴が一つ置かれていた。卓巳が靴を脱ぎ、自分の部屋に行こうとした時、突然居間に通じるドアが思いっきり開かれた。その突然さに卓巳はビクツと体を振るわせた。

居間から出てきたのは卓巳の父親である浩史だった。

浩史は何も卓巳に告げる事無く、腕を引いて居間まで連れて行く。

「ちょ、ちよつと何だよ!？」

卓巳の反抗する声もむなしく、やはり浩史は何も言わずに居間に置かれているソファのところまで卓巳を連れてった。

そこでようやく卓巳は向かいに座っているお客さんの存在に気づいた。

長い髪は自然に垂らされて、大きくアーモンドに似た目、整った鼻、リップをつけているのか綺麗な色をした唇、雪のように真っ白

な肌。その全てが卓巳の知るどの女性よりも美しい人が目の前にいた。

「貴方が卓巳くんかしら？」

ニコリと優しい笑みを見せて、その人は言った。

卓巳はその笑顔にドキツと胸が高鳴った。

「父さん、この人は？」

「こら！ 質問に答えんか！ すいません、卓巳はあまり行儀という言葉を知らないもので」

そう言つて浩史はペコペコと頭を下げる。ここところは流石営業マンと言えるのだろつか、綺麗な頭の下げ方だ。

「いえ、私は別に気にはしていませんよ」

「ありがとうございます。卓巳、この方は父さんの会社の取引相手である小堂財閥の一人娘の愛華さんだ」

そして愛華は小さく頭を下げる。卓巳も愛華に小さくお辞儀を返した。

「へへ、そっか」

卓巳はそう言いながらももう一度頭を下げて、座っていたソファから立ち上がる。

「どうしたんだ？」

「いや、こんなところにおいても場違いじゃない。だから部屋に行くかと」

浩史はさっきまで愛華と話していた以上卓巳に部屋に帰られては都合が悪いため、卓巳の肩を掴んでソファに座りなおさせる。

「何だよ？」

「いいから座りなさい。今日からお前は愛華さんの世話をするのだからな」

卓巳はギョツと浩史を見る。

「い、今なんて言つた？」

「だからな、今日からお前は愛華さんの世話をするのだ。これは命令だから拒否できんぞ」



「はっ？ ついに父さんも呆けてしまったか……いや、人間って  
もろいものだな」

卓巳は遠い目をしながら居間から見える庭を見る。

「父さんはまだ呆けてないぞ」

「百歩譲って呆けてないのは認めよう。だが、どうして俺が世話な  
んてしなきゃいけない？」

「父さんの会社が潰れてもいいのか？ お前を今まで誰が育てたと  
思っている？ これまでの恩を仇で返す気か？」

この時の浩史は慌てていて、なんとしても卓巳を愛華の世話係に  
させたいようだった。

「えっ？ なにか？ 父さんは会社の存続と俺を売り飛ばすのに会  
社を取ったのか？」

「人聞きの悪いことを言うな。頼むから父さん達を路頭に迷わせな  
いでくれ」

浩史は卓巳に頭を下げた。

そんな父の姿を卓巳は見たくはなかった。それが如何なる理由で  
あろうとも。

「……分かったよ。だから父さんも頭を上げてくれ」

卓巳は渋々答えた。

「た、卓巳。父さんは嬉しいぞ」

浩史は嬉しさのあまり卓巳に抱きついた。

もちろん年頃の卓巳にとって父親にこんな事をされるのは嫌なも  
のだ。だから思いつきり腕を使って剥がれさせる。

「お話がお決まりになったようなので、こちらに卓巳くんのサイン  
を頂けるかしら？」

机に置かれているのは一枚の紙。そこには卓巳が愛華の世話係に  
なるのを了解した証を残すために色々と書かれている紙だ。

卓巳はサラサラと『西沢 卓巳』と書く。

「これでいいのか？」

「ええ、これでいいですよ。それでは荷物などはいらないので今す

ぐ私の邸に行きますが、異論はないですね？」  
「……ああ」

\*

\*

そして今に至る。

さっきまでの愛華は猫を被っていて、愛華の邸に帰った途端に素の愛華に戻った。そんな愛華を卓巳は目を見開いて見ていたが、直にこれからの事を考えて落ち込んでいた。

「それで、愛華さんは俺をどうしたいわけ？」

まだ愛華と会って差ほど時間は経ってはいない。だけど、卓巳は幾度となく同じ質問をした。それは返ってくる返事がいまいちなせいである。

「あら？ 私の事は愛華様がご主人様って言うようにさっき言わなかったかしら？ 同じ部屋にいるだけでも罪深いことなのに、私の事を『さん』付けで呼ぶなんて問題外ですわ」

「……愛華様は俺をどうしたいわけ？」

「さっきから同じ質問ばかりね？ 貴方はその言葉しか知らないの？」

「愛華様がいまいな返事しかしてないから……」

「ですから、私の身の回りの世話を誰かにしてほしかった。ただそれだけです。おわかりになりました？」

卓巳にとって、こんな猫を被った人がそれだけの理由だけではなように思えて仕方がなかった。だからこそ本心を聞きたかったのだ。

「……そうだったな」

もう愛華から本心を聞き出すことを諦めた卓巳は、大きなため息をついて足元に視線を送った。

「あら？ 何か悩みでもあるの？」

「そうだな、強いて言うならば愛華様に悩みがありますね」

「どういう意味ですか？」

ピクリと愛華の眉がっりあがる。

「この際ですから言うけど、愛華様の猫を被った性格をどうにかしてほしい。そうすれば俺は他にも何も言わないし、何も望まん」

「ふふふ、貴方は今禁句を言いましたね？ 今すぐ私の前に膝をつき、謝罪の文と一緒に土下座しなさい」

フカフカで柔らかそうな椅子に座っている愛華は立ち上がり、卓巳を見下すように冷たい視線で見下す。

「絶対に嫌だ！ 愛華様は可愛いのに、そんな猫かぶりの性格をどうにかしないと駄目だ！」

卓巳はこの時むきになり言っていたため、愛華の頬がほんのり赤く染まった事に気づくことはなかった。もちろん愛華も卓巳に色々と言う。

そして卓巳はこれからの生活の事を不安に思いながらも、愛華とギヤーギヤーと騒いでいた。

## 2 パシリ 何の解決にもならないやり取り

卓巳と愛華が騒ぎに騒ぎ二人とも疲れたのか、卓巳は部屋に場違いな小汚い椅子に座り、愛華は無駄にゴージャスなフカフカそうな椅子に座っている。

「今回の事は水に流して差し上げますから、今後は今回の事がないようにしなさい」

愛華は少し息を切らしながら卓巳に告げる。

「ああ……それより飯はどうなった？」

卓巳は壁にかけてある時計を見ながら言う。

時間は七時を過ぎ、卓巳のお腹からは「グ〜」と、胃が食べ物を要求する音が出ていた。

「そうね、私もお腹がすいたから晩ご飯にしましょう」

愛華はそう言って、近くに置かれた鈴を鳴らす。

「愛華様、お呼びでしょうか？」

ガチャリと音がしたと思えば、メイド長である西森カナメが卓巳の隣に立っていた。

カナメは二十代前半で、落ち着いた大人の女性をと感じさせる美しい女性だ。短くカットされた髪は漆黒の色だが、瞳の色は灰色をしている。本人曰くカラーコンタクトと言っているが、実際はハーフということはメイドを含め、邸にいる人全てが知っている。

卓巳は突然カナメが隣に立っていたため、ギョツと驚いた風にカナメを見る。

「食事のご用意はお済みになっていますか？」

「はい、こちらにお運びしますか？ それとも食堂の方まで足を運びますか？」

「そうね……、部屋まで運んできてもらっていい？」

「かしこまりました」

カナメは一礼をして愛華に背を向ける。

「食事がおすみになりましたら、私の元まできてください」

そのほんの一瞬の間に、カナメは卓巳に告げた。

そしてスタスタと何事もなかったように部屋から出て行った。

「なあ、あの何者？」

「カナメはメイド長よ。庶民とは比べ物にならないくらい凄い人よ。まあ、カナメはあまり人と係わるのが苦手なのよ。人には向き不向きがあるから、何でもできるカナメの唯一の欠点なのよね」

ふうくと、ため息をついて愛華は言った。

（人と係わるのが苦手なのに、どうして始めて会う俺に話そうとしたんだ？ ……ま、まさか！ さっきのやり取りを聞いたか見て、ちよつと面かせやあゝ見たいな不良に絡まれました。そんな展開に発展するのか！？ いやいやあゝ、第一印象からそんな展開にはならんでしよう。……いや、このお譲の事もあるから第一印象で人を見るのは非常に危険だ。人を疑うことは良い事じゃないが、用心にこしたことはないからな）

卓巳がまだ良く知らないメイド長であるカナメを勝手に危険扱いにし、何か良い対策がないか考え込んだ。

そう言っても、そう簡単に案が出るはずもない。そうこうしている間にノックと共にカナメが晚ご飯を運んできた。

カナメは一礼をして部屋に置かれている足つきの丸テーブルの上に料理を置いていく。さっきまで愛華は卓巳にカップラーメンを食べさせるつもりだったが、言い争いですっかりカナメに言うのを忘れていた。そのため愛華は苦い顔で二人分ある料理を見つめた。

「ねえ、カナメ？」

「はい、どうかなされましたか？」

「明日からは庶民の食事はカップラーメンでいいわ。私と同じのを食べていると思うと虫唾が走るのよ」

「かしこまりました」

「ちよ、ちよつと待て！」

卓巳は慌てて叫ぶ。さすがの卓巳でも三食カップラーメンだと味

に飽きる以前に体に悪いし、なによりカップラーメンだと一週間後には食欲をなくしてやつれるのが目に見えていた。

「なによ？ 庶民の分際で私に意見でもしようと思っっているの？ それなら残念、私の決定は絶対よ」

「頼むから毎日カップラーメンは止めてくれ。絶対に死ぬから」

「そうね、それなら三日一回はカップヤキソバにしてあげましょう」  
「……なんの解決にもなってない」

卓巳は愛華に何を言っても通じることがないと悟り、ただポツリと呟いた。

「お嬢様？ それでは西沢様があまりにもお可哀想です。ですから三食を味噌、豚骨、塩と分けてみてはどうでしょう？」

カナメは表情を変えずに言った。ただカナメにとってはナイスフォローと言わんばかりに、握りこぶしを作っていた。もちろん卓巳からすればありがた迷惑と思われるのは本人のカナメには気づくことはなかった。

（あれ？ このメイド長天然なのか？ ってか、このメイド長は俺に三食同じ味で食わすつもりだったのか？ それこそ無謀だろう……）

言葉に出せない以上卓巳は心の中で大きなため息と共に、そんな事を思っていた。

「カナメは優しすぎよ。庶民を甘やかせば、きっと調子に乗るに決まっているわ。もっと厳しく当たらなくってどうするの？」

（いや、全く甘やかしてないだろう……。それどころか何も変わってないように思えるのは庶民だからか？）

まだ卓巳と愛華は会って、差ほど時間は経ってはいない。だが、卓巳はここで反論すればきつと良からぬ方向へ行きそうだと感じていた。だから心の中で呟く以外選択権はなかった。

「……かしこまりました。それでは、西沢様には三食豚骨味で我慢していただきます」

チラリと卓巳の方を見ながらカナメは言う。

「そうしてちょうだい」

そしてカナメは一礼をして部屋から出て行つた。

残された卓巳は愛華を見る。愛華は満足げな顔で、椅子に座り卓巳が同じように椅子に座るのを待っていた。やはりお嬢様だけあり、庶民と言っている卓巳を取り残して先に食事を取らず、最低限のマナーは持っていた。

卓巳は小汚い椅子から立ち、愛華が座っている同じ椅子に座りなおす。

テーブルの上に置かれた食事は庶民である卓巳には想像を絶するほどの料理の数々が置かれていた。

イセエビを初めとするアワビやウニなどの海を代表するものから、三大珍味のトリュフやフォアグラなどの珍味を豪快に使われていた。もちろんそういった類の食べ物をあまり食さない卓巳にとっては、どれから手をつけていいか悩みどころでもあった。

「あら？　手が進んでいないようだけど口に合わなかった？」

「あつ、いや、そういう訳じゃない。ただ、こんな美味しそうなのを毎日食べている愛華様が凄いなと思って」

「それは褒めているつもりかしら？」

「いや、そうじゃなくって……なんて言うのかな？　愛華様が本当にお金持ちのお嬢様なんだなって、そう感じたんだよ。俺はお金持ちのお嬢様がどんな生活しているかなんて全然想像もつかない、だけれどさ、庶民の俺とは住んでいる世界が違うんだなってこの短い時間の間に感じたんだよ」

「そうね、お金持ちの良さが庶民には分かり、庶民にはお金持ちの良さが分かるってことよ」

卓巳はその時の愛華が、今まで見てきた表情より柔らかい笑顔をしていた事に気づいた。

「愛華様を感じる庶民の良さはなんですか？」

「自由で暖かな家庭が築けるところかしら。お金を持っていても良いことなんて高が知れているわ。それどころか悪い点の方がたくさ

んあるのよ？ 親の顔を立てるために成績は常にトップを維持しなければいけない、親の開いたパーティーには絶対出席しなければいけない、そして忙しい親と係わる時間なんて無に等しいわ」

愛華は悲しそうな顔で卓巳に告げた。

そんな愛華を見ていた卓巳は何も言葉が出てこなかった。

「さっ、ご飯が冷めないうちに頂きましよう」

卓巳が何も言えないまま、愛華は黙々と食べていた。

そして愛華は晩ご飯が食べ終えるまで一言も喋ることはなかった。ただただ流れるのは気まずい空気と、フォークと皿が当たる音だけだった。



### 3 パシリ メイド長とはメイドの一番偉い人

堅苦しく、さらに重い空気の食事に終止符を打ち、卓巳は何かをする訳でもなく草臥れた椅子に座ってじっと天上を見ている。

愛華は愛華で、食事が終わるや否や「お風呂に入ってくる」と、それだけを告げて部屋から出て行ったのだ。だから一人残された卓巳は主人の帰りを待っている犬のように、ただただ椅子に座るだけだった。それでも当然の本人は愛華を主人と思ってないのが現状だったりする。

コンコン。そう、静かで無駄に広い部屋にそんなノック音が鳴り響く。決して弱くない音で、それでも決して大きくない音で、だ。これほど綺麗にノックをできる技量の持ち主は、この邸でも一握りのメイドしかいない。

卓巳は重たい体を椅子から起こし、ドアを開ける。

そこには完全無欠なのだけど、どこか普通の人とは外れたメイド長が立っていた。

カナメは何も言わずにスタスタと部屋に入り、何も言わずにさっきまで卓巳が座っていた椅子に腰を下ろした。

少し戸惑いを隠せない卓巳とは正反対に、カナメはきりつと凛々しい顔つきだった。あたかもそれが普通のように、あたかもそれが重要な事のように。

「えっと……、どうしたんですか？」

少しの間を空けて、恐る恐る卓巳は棒立ちのままカナメの方を向いて言う。

「食事が終わり次第私の元にくるように言っただけではありませんか？ですが、一向にくる気配がなかったので私の方からきました」

卓巳はカナメとの約束をすっぱかすような形になっていたが、それでもカナメの顔からは不機嫌そうな表情はない。そして卓巳は「あゝ」と言い、すっかり忘れていたのだった。

「それで俺に何の用なんですか？」

「そうですね、簡単に申し上げますとお嬢さまとは仲良くしていただきたいのです。もちろん西沢さんがお嬢さまのお世話係になった経緯は承知しております。ですが、できることならお嬢さまを怨まないで下さい」

すつと綺麗に椅子から立ち上がり、卓巳に振り向いて頭を下げた。卓巳は卓巳で、あまり人から感謝されるのが得意じゃなく、そんな力ナメを見ていたらむず痒く感じていた。

「別に怨んだりしませんよ。ただですね、もう少しだけ性格をどうかしてほしいですね。愛華はずっとあんな性格をしていたんですか？」

本人の前じゃないため、卓巳は愛華の事を呼び捨てで呼んでいた。もちろん本人の前では何を言われるか分かったものじゃないから、愛華がいない今限定なのだけれど。

「いえ、お嬢さまが小さい頃はもう可愛らしい性格をしていました」それは卓巳にとって興味深い事実だった。

「どんな性格だったんですか？」

「そうですね、奥様は忙しい身でしたので、代わりに私の後を子猫みたいにくつついてきました。もちろんそれだけではなく、一生懸命に私の手伝いもしてくれましたね。その姿が愛らしく、時々ギョツとしたい衝動に陥ったほどです」

どこか懐かしそうに力ナメは言う。

卓巳は力ナメの言った事が信じられず、不思議そうな顔をして力ナメを見ていた。それは言うまでもなく、今の愛華からは想像も出ない事実だったからだ。

「……それは本当に愛華なのか？」

「ええもちろんです。今のお嬢さまも以前と変わりなく愛らしい性格をしていると思いますが、西沢さんはお嬢さまの何処が不満なのですか？」

「強いて言うなら自分自身が特別な人のように感じているところで

すね。逆に聞きますが、カナメさんは愛華の何処が愛らしい性格だと思うんですか？」

卓巳にとって自分の事を「さま」や「ご主人さま」と呼ぶように言うのは少々苦手な部類に入る性格だった。どちらかと言えば、卓巳にとつて異性に求める性格は大人しい子なので、顔が良くても騒がしい愛華は今のところ恋愛対象に入ることはまずない。

「それは愚問です。西沢さんには辛く当たっていますが、お嬢さまは根から優しいお方です。その事を気づかない西沢さんに非があると言つものです」

（いやいや、気づくはずがないから。そもそも今日始めて会つた人の根なんて分かるはずがない）

卓巳はそんな事を思っていた。だけど卓巳の思つた事も一理ある。いや、一理どころじゃない。完全に卓巳の思う通りだ。

どれほど優秀で、どれほど鋭い人でも会つて数時間で心の内側を分かる人なんていないだろう。もしいたとするならば、それはそれで確証の無い確信と言つものだ。

「……そうですか。俺にはまだ愛華の良い面が分かりません。ですが、カナメさんがそこまで愛華を信頼しているのなら俺も少なからず愛華の良い面を探してみます」

どれだけの時間が掛かるか分からないけれど、そう付け足すように心の中で呟く。

「そうしていただけると嬉しいです。それではそろそろお嬢さまがお戻りになると思いますので、私は仕事に戻ります」

そしてスタスタとドアの方に歩いていく。それから何事も無かつたかのように部屋から出て行くカナメの後ろ姿を見て卓巳は手を伸ばした。

「どうかなされましたか？」

ギュッと腕を握っている卓巳を見つめながら言う。それでも顔の表情は変わることはなかった。

「……いえ、なんでもありません。仕事頑張ってください」

卓巳は特にカナメに言いたい事があつた訳ではない。なんとなく卓巳にはカナメが寂しそうに思え、そう思ったら自然に体が動いたのだ。

そんな事を言えるはずもなく、卓巳は誤魔化するようにそう言う。

「西沢さんもお嬢さまのお世話を頑張ってください」

カナメはするりと力の入っていない卓巳の手を気にせず、それだけを言つて部屋から出てつた。取り残された卓巳は少しの間呆然と立ちすくんでいた。

カナメの言つた通り直に愛華が部屋に戻つてきた。

部屋に戻るなり、不機嫌ですと言っているかのような顔で愛華は卓巳を睨んだ。もちろん理由が分からない卓巳にとっては不思議でたまらないのは言うまでも無い。

「どうしてお前はそんなに不機嫌そうに俺を睨む？」

卓巳の質問に愛華は無言でさつき以上に睨みつけた。やはり理由もなく愛華が怒ると思えず、プレッシャーを感じながらも卓巳は考えた。

それでも理由が思い浮かばず、首を傾げて愛華を見る。

「……お前と言つたのはあえて伏せときます。ですが、庶民の分際で私を呼び捨てで呼ぶとは何事ですか？」

ようやく愛華が口を開いたと思えば、そんな事を言い出した。だけど卓巳は愛華の前で呼び捨てにして呼んだ記憶が全くなかった。それどころかいったい何を言っているのか卓巳には理解できなかった。

が、少しか考えると一つの事が頭をよぎつた。

愛華はカナメとのやり取りを盗聴していたのだろうか、と。

「……愛華さまは俺とカナメさんの話を盗聴でもしていたのか？」

「さあ、どうでしょう？　ですが、庶民の分際でご主人さまを呼び捨てで呼ぶなんて言語道断です！　それどころか私の事を侮辱するような事を言うなんて問題外ですわ！」

どんな手段を使って話を聞いていたのかは分からないが、卓巳はそんな愛華を見て大きくため息をついた。

（さっき力ナメさんに言った事は前言撤回だな。こいつに良い面なんて見つかりっこない）

そんな事を人知れず思っていた。もちろんそんな事を本人である愛華に言えば、今後の生活が堅苦しく、それでもって辛いことになると悟り何も言わずに卓巳は愛華の怒りを見つめていた。

ちなみに愛華の機嫌が直ったのは小一時間ほどしてからだった。

そして卓巳が風呂に入り、部屋に戻って来た頃には愛華は眠りについていて、何処で眠ればいいのか分からない卓巳は部屋の端で丸まって寝ていた。

#### 4 パシリ お嬢さま学校

卓巳はもう学校とは一生縁の無い居場所だと思っていた。

いや、もう学校という単語が出てくるとは思ってもいなかった。

それでも卓巳は学校の前に立っている。別に女子高校生が目当てで立っているのではない。口をだらしく開けて、呆然と視線を上に向けて立っているだけだ。その姿を例えるならば、都会を始めてみた田舎の人。そう例えるのが一番しっくりするのかもしれない。

が、卓巳にとって都会とは別に珍しいものではない。なぜなら生まれも育ちも都会だからだ。ならどうして、そんな田舎人と例えるような姿をしているのだろうか？ その答えは簡単だった。

都会全てを珍しく見るのではなく、

都会のほんの一部で、なおかつ今までに見たことの無い学校を珍しく見ていたからだ。

時は変わり、今朝の事である。

卓巳が愛華の世話係、いや、執事とでも言つところ。そんな職に就くことになった初めての朝。

（あれ？ ここは……どこだ？）

寝ぼけながら卓巳はそんな事を思つて目を覚ました。

床で寝ていたため、卓巳の体はすっかり固くなり、目覚めの良い朝とは相当かけ離れていた。

少し考えたところで、ようやく卓巳は今の状況と、自分の置かれている立場を認識する。立場からすれば、この邸にいるどの人より下の立場である。

ゆつくりと立ち上がり卓巳は思いつきり伸びをする。

小さく「よしっ」と呟き、ベッドでいまだ寝ている愛華を見る。

愛華はまだ夢の中の住人で、小さく細い寝息が聞こえる。そんな愛華を見ていた卓巳は呆然と立ち、人の気持ちも知らないで気楽な

ものだと感じていた。

別に卓巳の気持ちは思っているより気楽なもので、正直なところどうでもよかったりする。そんな事はともあれ、今日は平日で時計の針は既に七時に差しかかろうとしていた。

卓巳にとって七時に起きるのは普通で、学校を辞めさせられた今になってはもつとゆっくり起きればいいのだが、体は七時に起きるようにインプットされている。長い事同じ時間に起きていた事から七時に起きるのは必然なのだろう。

それはさて置き、男である卓巳にとって朝は別に忙しいものではない。顔を洗い、朝食を取る。それだけの行動しかとらない。だが、女性は男性とは色々な面から違う。薄く化粧をしたり、シャワーを浴びたりと人によっては異なるが、それでも女性の朝は戦場のように忙しいものだと思っている。

卓巳はゆっくりと愛華に近づき、そつとベッドで寝ている愛華の肩に手を伸ばす。

が、その行動は直に阻止された。

卓巳の腕を掴み、その力強さから押すことも引くことも拒まれてしまった。ビツクリしながらも卓巳は誰だと思いつながら腕が伸びているほうを見る。

完全無欠、ポーカーフフェイス、メイドの中のメイド、

西森カナメ、

が、立っていた。

卓巳から見てカナメの腕は決して太いとは思えない、むしろ街中を歩いている少女の用に細い腕をしていた。そんなカナメがここまですり強いとは思ってなかった卓巳は少し驚く。

「お、おはようございます」

このシュチュエーションが取り敢えず苦しく思えた卓巳は朝の挨拶をする。

「おはようございます。それで、西沢さんはお嬢さまに何をしようと思っっているのでしょうか？ 返事次第では容赦しませんよ？」

顔の表情は変わってないものの、背中の方からどす黒いオーラの  
ようなものを卓巳は感じ取った。

「普通に起こそうと思っただけですよ、はい。ほら、今日は平日で  
学校がある日でしょ？ それなら起こしてあげないと朝ごはんを食  
べる時間がないと思って……」

「そうですか、てつきり発情期の犬の如くお嬢さまに襲い掛かるの  
かと思っていました」

仮に卓巳がそうしようと思っていたところで、そんな事をカナメ  
に言えるはずがない。もし言ってしまったら窓から投げられて、メ  
イド達に冥土に送らされるところだっただろう。

「それよりいつの間に部屋に入ってきたのですか？ さっきまでは  
俺以外誰もいなかったと思うのですが……」

「それにつきましてはそこからです」

天上を指差すカナメ。

カナメの真上、天上には人が通れそうな穴がある。いや、穴と言  
うより人工的に開けられた通り道とでも言うておこう。

（メイドと言うより、ここまでくると忍者だな）

天上に開けられている通り道を見たときにそう頭によぎる。

「……そう、ですか。それはそうと、愛華様を起こさなくてもいい  
のですか？」

「ああ、そうでしたね。そろそろ起きてもらわないと学校に遅刻し  
てしまいます」

カナメはそう言い、卓巳から手を離して体全体を愛華に向ける。

「お嬢さま、そろそろ起床の時間です」

無理やり起こすわけではなく、綺麗な声が部屋を響き渡る。それ  
でも決して大きな声ではない、むしろこれだけのボリュームで本当  
に起きるのかと思うぐらい起こすには小さな声だった。

愛華は「うーん」と唸り声を上げ、ゆっくりと目を開ける。

卓巳はそんな愛華を見ながら、少なからず「あと五分だけ」みた  
いな事を言ってくれることを期待していた。ただどさずがお嬢さま



と言ったところだろう。優雅にベッドから体を起こした。

「おはようカナメ、下僕」

「おはようございますお嬢さま」

「……」

卓巳は素直に朝の挨拶をできなかった。いや、できるはずも無い。なぜか「下僕」に格下げされているからだ。このままだといずれは「犬」にまで落ちそうだと卓巳は悟った。

「あら、主がおはようと言っているのに下僕の貴方が挨拶を返そうとはしないのですか？」

不機嫌そうに愛華が言う。

「……おはようございます、愛華様」

渋々卓巳は言う。

「うん、おはよう。それより朝食の準備は整っていますか？」

「はい。朝食はこちらにお持ちすればよろしいでしょうか？」

「そうね……、そうしてちょうだい」

カナメは一礼をして消えた。消えたというのはドアから出て行くのではなく、天井に開いている通り道にジャンプで戻っていったからだ。

「そうそう下僕には昨日言わなかったけど、今日から貴方も私が通っている学校についてきなさい」

「えっ、それって転校って事か？」

「違うわ。強いて言うならば私の身の回りの世話をするため、そう言っところかしら」

卓巳にとつての学校は勉強を習うところで、決して身の回りの世話をするために学校に行くのではない。だからお嬢さまが通う学校が次元の違うところだと感心しつつ、少しだけメンドクサイ学校だと思った。

「それだと愛華様が授業中はどうしていいばいい？」

「それについて私の隣で控えていればいいのよ」

「そしたら他の生徒に迷惑かけないか？」

「誰も立っているとは言っていないでしょう？ 私が座っている席の隣に座っていればいいのよ。私も鬼じゃないわ。ずっと立てなんて言わないわよ」

卓巳は愛華の優しさに少しだけ感動した。

時は戻り、現在である。

高級車で学校まできて、自慢そうな顔で呆然と立っている卓巳を愛華はニヤニヤと見つめている。

「さあ、授業が始まりますので行きますよ。ちなみにこの学校は女子生徒しかいないので、粗相のないようにしてくださいね」

「……ああ」

そして二人並んで未知の学校に卓巳は足を踏み入れる。

ちなみに卓巳の服装はカジュアルではなく、スーツだった。執事なのはどうしてスーツなのか、それは卓巳も感じていた。だけど学校の方針だから仕方のない事だったのだ。

## 5 パシリ 普通でない学校

学校とは何をしに行くものなのだろうか？

勉強？ 恋愛？ 将来の通り道？ なんだろうと大いに結構。だが、愛華が通っている私立白怜女子高等学校の生徒は、ほんぼんに普通の学生とは何か違った。

卓巳にとっての学校とは百歩譲って勉強を学ぶものだと思っていた。が、私立白怜女子高等学校の生徒は暇つぶしに学校にきているのだ。財あるものは暇をもてあますと言うが、これほどしくりくる光景を見た卓巳は初めてだった。

無駄に広い敷地のあちこちにお茶を楽しむ場所が設けられている。それだけならまだしも、その場所を利用して生徒が目に入ったオープンカフェのような場所に数人の生徒が談話を楽しみ、その後ろには執事と思わせる人が数人待機している。時々執事がお茶を入れている姿は、本場の執事と勘違いさせるほど全てにおいてマッチしていた。

「なあ、いつも朝っぱらからこんなことしているのか？」

談話を楽しんでいる生徒を遠めで見つめながら卓巳は言う。

「そうね、朝だからこんなものだけど昼時になるともつと凄いわよ」

「ふーん、まっ、別に俺には関係のない事だけだな」

大きな欠伸をしながら卓巳は言う。

「そうでもないわよ？ 卓巳さんも執事の端くれなら、そういった機会もあります。邸に帰ったら早速力ナメにでも聞いておくと良いでしょう」

卓巳は欠伸以上にあぐりとだらしなく口を開いて愛華を見た。

別に卓巳自信が執事の仕事をするのに驚いているのではない、愛華が言った「卓巳さん」という発言が卓巳を驚かせていたのだ。

「……あつれ？ 俺の耳も寿命かな？」

トントンと卓巳は耳を叩く。

「何をしているの？」

卓巳の仕草が理解できない愛華は少し首を傾げ卓巳を凝視した。

「さっきの言葉もう一回言ってくれないか？」

「ですから、卓巳さんも執事の端くれなら、そういった機会もあります。邸に帰ったら早速力ナメにでも聞いておくと良いでしょう。

そう言ったのです」

「くわつぱあー！」

卓巳は驚きと不意打ちに奇妙な奇声を発した。そんな卓巳に奇声は何事かと愛華は大きな目をパチパチとして卓巳を不思議そうな顔で覗き込んだ。

「い、いったいどうしたのよ？」

「ごめん。ついつい現実には背を向けてしまった。まさか愛華様が俺の事を卓巳さんなんて言うから一瞬我を忘れてしまった。いやあ、ようやく名前で呼んでくれて俺は嬉しいよ」

感動のあまり薄っすらと涙を溜めて愛華の肩に手を乗せて卓巳は言った。

愛華は今まで卓巳の事を「庶民」か「下僕」としか呼んでいない。そのせいか卓巳は愛華に呼ばれることを少しだけ拒んでいた。誰だつて自分の事を「庶民」やら「下僕」なんて呼ばれたくないし、なにより腹が立つ。

「……は？ なに言っているの？ そんなの学校だけに決まっているじゃない。家に帰ったらまた普通どおり呼ぶわ」

「と、いいますと、愛華様は学校では優等生を演じきると？」

「そうなるわね。お嬢さまっていうのは何かとお喋りの面があるからね、素の私なんて見たらあつという間に広まってしまいます」

「そ、そうですか……」

愛華が猫をかぶっている事については卓巳も知っている。が、ここまであからさまに世間の目を気にする計算高い愛華を卓巳は少しだけ羨ましくもあり、そして面倒にも思えた。

卓巳はあまり計算して今後の事を考える事はない。それはとっさ

に何歩先の考えが出来ないからである。そのためか、今までに将棋やチェスなどのボードゲームで勝った覚えがなかった。それほど計算というものが生活からかけ離れた場所にあった。だからこそ愛華を羨ましく思えて仕方なかったのだ。

無駄に長く、それでもつて無駄なところにお金を掛けている校門から校舎まで続く道のりをのんびりと歩いた。時々始めてみるオブジェらしいものやら、形や時代が違う校舎があり、その都度卓巳は色々な表情をみせた。

長い、長い、道を何分も歩き、ようやく校舎に着いた頃には卓巳は肩で息をしていた。卓巳はそれほど体力がなく、小学校の頃にあったマラソン大会も良い成績は今までにない。それでも運動神経は悪いほうじゃない、だが、それでも最初だけで最後の方はばててしまふのだ。

「だらしないわね。今日から体力をつけなさい」

「無理。自慢じゃないが、俺は体力だけはないのが取り柄だからな」

「そんなの自慢にもならないわ。全く……」

愛華は呆れたように肩をすくめた。

「まあ、いいわ。それより早く教室に行きましょう？ 遅刻だけはしたくないの」

そしてスタスタと愛華は校舎の中に入って行った。その後を追うように卓巳も校舎の中に入る。

校舎は外見よりもっと凄かった。それは卓巳が校舎に入って初めて思った事だった。

廊下なのに天上にはシャンデリア、壁には色々な絵画や壺、そして壁にも彫刻が彫られていて何処を見ても卓巳にとっては凄いことだった。

「うわあゝ」

卓巳は自然に声が漏れた。

「そんなに驚く事でもないでしょ？ このぐらいなら私の家の方が

よつぽど凄いわよ?」

「いや、学校がここまで凄いななんて予想外だったから、つい」

「そうなの。まっ、これから慣れればいいわ」

「ああ、そうするよ」

それから教室に向かうのに廊下を歩いていると、愛華はすれ違う生徒から挨拶されていた。しかもすれ違う全ての生徒が、だ。愛華が人気者なんか、それとも学校の常識なのかは定かではないが、それでも卓巳にとっては凄い光景だった。しかも卓巳はどこか興味深く見られたのだ。

ようやく教室につき、何事もないように愛華は先に教室の中に入っていく。

卓巳はどうにも始めての学校で、しかも転校生扱いされないため何処か居心地が悪く思えて教室の前で立ち止まる。

「何しているの? 早く教室に入りなさい」

「いや、そう言われても……」

「何を考えているなんて分からないわ。けどね、入らなかったら不審者で警備員に連れていかれるわよ? それでもいいなら好きなようにしなさい」

「それは勘弁だ」

卓巳は大きく深呼吸をしてから愛華に続いて教室に入る。

教室はざわついていたものの、知らない顔である卓巳の存在で教室中が静まり返った。卓巳を遠めで見るものもいれば、ヒソヒソと卓巳について話し合っている生徒がいた。もちろん卓巳はそんな事に慣れていない訳が無く、余計にいつらく思えて仕方が無かった。

愛華は笑顔で教室の生徒に挨拶をして自分の机に座る。

机は二人が使えるタイプで、卓巳もまた愛華の隣に座る。手に持っていた愛華のバックを机の端にあるフックにかけ、何処を見るわけでもなく真っ直ぐ視線を送った。

そんな中、卓巳と愛華に忍び寄る一つの陰。ではなく、堂々と愛華の前に立つ一人の少女がいた。

愛華同様に美しい顔立ちだったが、彼女の顔で全て台無しにしていた。

「あら？ 天野さんではありませんか？ そんなに怖い顔をしているとシワが増えますよ？」

彼女の名前は天野小鳥。長い髪を後頭部で結び、いわゆるポニーテールにして、白い肌と高い鼻、そして大きな瞳が彼女の美をより引きだっている。

「あーら、腹黒女に言われたくはないわ。それより隣の貴方？ 中々可愛らしい顔をしているのね？ こんな腹黒女のところより私の執事にならない？」

「……ちよつと考えさせて下さい」

卓巳にとつてそれは興味がそそる話だった。愛華が嫌と言えば、嫌だが、それでもカナメとの約束もある。それに一応父親の事もあり、卓巳は即答で答えを出すことはできなかった。

「その間と返事はなに！？ 卓巳さんは私の執事です！ 勝手に人の執事を誘惑するのはよしてください！」

「それは違いますよ？ 卓巳は小堂さんの持ち物ではありません。ですから卓巳が私の執事になりたいのなら引き止めるのは変ですよ？」

「そ、それはそうですね……それでもダメです！」

卓巳はどうして自分を引き止めるのか謎だった。特に人に威張れる特技もない、普通の庶民なのに今の愛華は必死に卓巳を渡そうとはしない。その姿がどうにも理解できなかった。

それから授業が始まるまで愛華と小鳥のやり取りが終わる事はなかった。そして卓巳は小鳥に返した返事がどうにも誤ったものだと気づく。それは邸に帰ったらどんなお仕置きが待っているか分からないからだった。

## 5 パシリ 普通でない学校（後書き）

一気に修正しました。

修正といっても本編は変わらず、一話ずつずらして登場人物の欄を設けました。

10月は忙しい月なので、9月中にあと2回ぐらい更新したいと思っています。それでは次回も楽しみにしていただけたら嬉しいです



## 6 パシリ 彼氏彼女の関係

私立白怜女子高等学校の授業内容については一般的の学校と同じレベルで、執事として入学なのか付き添いなのか定かではない卓巳でも理解出来る授業だった。それに付け加え、一応卓巳が通っていた学校は進学学校だ。そのため全て習い終えている範囲だった。

以前習った授業と同じ範囲をもう一度聞くのは退屈なものだと、卓巳は睡魔と闘いながら思った。それでも習ってない授業なら眠くは無いのかと聞かれれば、きつと卓巳は「眠い」と答えるだろう。卓巳は進学学校に行っていたけど、学校の中ではおちこばれと言われていた。担任からもクラスメイトからも、さらには現在進行形で付き合っている彼女からも言われていた。それでも卓巳は勉強が嫌いな訳ではない。ただ人より少し不器用なだけだった。それは勉強だけではなく、恋愛も日頃の行動も、全てにおいて不器用なのだ。

いっそのこと寝てしまおうと卓巳は思ったが、チラリと隣の愛華を見れば真剣に授業を聞いていた。だから卓巳は寝るのを少しだけ迷ってしまった。ここで寝てしまえば愛華にも迷惑がかかるし、なにより小堂家に迷惑がかかると感じたからだ。主人が授業を聞いているのに、それを差し置いて寝る執事。それは執事とはいえない行為だ。本当の執事ならどんなに眠くても、どんなにイライラしていても、どんなに腹が立つても表情に出さず、主人に仕えるものだ。だからこそ卓巳は寝ることを戸惑ってしまったのだ。

「他のやつらはほとんど寝ているのに、愛華様は寝ないのか？」

先生には聞こえないほど小さな声で愛華に言う。

卓巳の言ったとおり、現在授業を聞いている生徒の数は酷いものだ。寝ている生徒が八割で、真面目に授業を聞いているのが一割、そして残りの一割の生徒は漫画を読んだり携帯電話をいじったりしている。世の中にはボイコットという言葉がある。まさに今、そのボイコットが授業と言う名の学問を学ぶ時間に反発するかの如く成

り立っている。

「何を言っているのか私には理解できないわ。授業とは学問や技芸を学ぶ場ですよ？ それなのに寝てどうするのです。皆は皆、私は私です」

「真面目なんだな。どうせ予習とかして授業なんて聞かなくても分かるんだろ？」

昨日の夜に愛華は卓巳に「親の顔を立てるために成績は常にトップを維持しなければいけない」そう言った。その言葉をしっかりと覚えていた卓巳は小さなため息をつきながら言う。

卓巳がため息をついたのには理由があった。一つ目は腹黒で猫かぶりの愛華が学校では一変して優等生を演じていること。二つ目は冗談も通じないキャリアウーマンのような事を言っているからだ。卓巳にとってそういった部類の人は苦手だった。できるなら冗談が通じ、そして固いことを言わない人が卓巳の理想なのだ。そうなれば今の彼女はどうかなのか、そう聞かれれば苦虫でも口に入ったかのような表情をするだろう。卓巳の彼女もまた、愛華のような性格をしている。それでも卓巳は彼女の一途な思いと、何事にも一生懸命な姿が好きだった。それ以外にも彼女を慕うところは沢山ある。それでも卓巳にとってそれが一番の理由だった。

「当たり前じゃない。今のところは半年前に予習したわ。けどね、予習だけじゃダメなの。授業を通して復習するのよ」

「そうか……」

卓巳はそう言いながら愛華から窓の景色に視線を移した。

今日の天気は実に良い天気だ。開いた窓から心地よい風が流れ、どこまでも続く青く澄み渡った広い空、そして他から隔離されているかのような静かな教室。

（俺が学校を辞めようが学校は何も変わってないだろうな）

卓巳は目を細め、そんな事を思っていた。だがそれも事実。卓巳が学校を辞めたのは昨日のことで、卓巳が通っていた学校のクラスメイトは卓巳が学校を辞めた事なんて知らないだろう。仮に知って

いても「辞めるのは時間の問題だったけどな」と、納得するクラスメイトもいただろう。

「憂鬱そうな顔をしているけど、どうかしたの？」

「ちよつと前の学校の事を考えていた……なあ、この学校に公衆電話とかあるか？」

「そんな時代遅れで、無駄な電話なんて無いわ。そんなの当の昔に撤去されたと思っていたけど、街中にはまだあるの？」

愛華は首を傾げ、怪訝な顔で卓巳を見た。「時代遅れ」や「無駄な電話」と言っているが、愛華は今までに公衆電話を実際に見たことはない。見たとしてもテレビ番組ぐらいだった。それどころか生まれも育ちもお嬢さまの愛華は電話を使う機会は無二等しかった。

大抵のことはメイドから聞かされ、携帯電話を持つているものの電話帳には家の番号とカナメの番号しか登録していない。別に友達がないわけではない、クラスメイトを含め学校の生徒は愛華を懂れ存在として見ている。そのためメールアドレスや番号を聞かないのは暗黙のルールとされている。そのため誰も愛華のアドレスや番号を知らないのだ。

「酷い言いようだな。公衆電話を愛する人が聞いたら殴られても文句は言えないぞ？」

「あら？ そんな人がいるなら見てみたいものだわ。それより私の携帯を貸しましょうか？」

「助かる。悪いが授業が終わったら貸してくれ」

「ええ、それで誰に電話をかけるつもり？ お父さまかしら？ けど、卓巳さんのお父さまは大丈夫よ。私は約束を守る主義ですから今頃休憩を削って仕事に励んでいると思うわ」

「いや、父さんには電話はかけない。彼女と少しでも話したいだけだ」

卓巳がそう言った途端、愛華の眉間にシワがよった。

愛華は卓巳が異性の子と付き合っているのは知っていた。卓巳を世話係として迎えようとした時に、カナメに頼んで色々調べさせ

ていたのだ。カナメは卓巳の誕生日や血液型は当たり前、趣味や一日の行動まで調べていた。そうなれば卓巳に彼女がいるのも直に分かっていた。

「……そう、なの。悪いことは言わないわ。今日限りで彼女とは別れなさい」

愛華は眉をしかめ、あからさまにそっぽを向く。もちろん卓巳は愛華にそんな事を言われる筋合いがないため、怪訝そうな顔で愛華を見つめた。

「ちよつと待て、愛華さまには関係ないだろ？」

それでも卓巳は薄々気づいていた。そろそろ潮時なのだと。

卓巳達は付き合い始めた頃は楽しくやっていて、毎日のように連絡を取り合っていた。だが、それは月日経つことに変わり、しまいには相手の関心も次第に薄れていった。本当にこんな結末でいいのか、そう何度も卓巳は思った。それでも行動に出すことは一度もなかった。それは心のどこかで「もう、どうでもいい」と思っ気持ちが芽生えていたのかもしれない。

「卓巳さんの小さな脳で考えてください。仮にここで別れなかった時の事を想定で話します。卓巳さんは私の世話係であり執事でもあります。そこから常に私の身近にいることになります。そうなれば必然的に卓巳さんは彼女と会うことができます。一番辛いのは誰ですか？ 卓巳さんではなく彼女でしょう？ それなら辛い思いをさせる前に別れるのが一番です」

卓巳の気持ちを知らない愛華はそうとしか言えなかった。愛華は卓巳たちの関係が良好だと思い、そう言ったが、実際は良好とは遠いところにあった。だが、それもまた卓巳が思っている事であり、卓巳の彼女はこう思っているのかは分からない。実はツンデレに憧れて卓巳にツンツンしているのかもしれない、もしかしたら忙しいあまり卓巳と係わる時間が以前より無くなったのかもしれない。だからこそ全ては卓巳の脳内で繰り広げられた想像なのだ。

愛華の言ったことはあながちあたっている。だけど一つだけ否定

する点がある。それは卓巳たちの関係が良好なら、別れを切り出すことが一番辛いことなのだ。相手を本当に好んでいるのにも係わらず、その行為が見事に裏切られてしまった。それこそが一番の辛さである。

「……」

卓巳は何も言えなかった。

もう会えないのならいつそのこと別れようかと思ったからだ。

が、実際は卓巳が思っているほど愛華は酷い人間ではない。愛華の側にいるのは変わらない。それでも休みが無いわけではないのだ。

「私の携帯を貸してあげます。彼女と別れるか別れないのかは、卓巳さん次第です。それでも一つだけ言っておきます。もし卓巳さんの彼女が私なら、少しでも早く別れたいと思います」

机の上を滑らせ、愛華は携帯電話を卓巳の前に置く。その時の愛華の表情は何かを成し遂げた誇らしい顔をしていた。

卓巳は携帯電話を手に取り、

「一つだけ聞いていいか？」

「答えられる範囲なら何でも聞いてください」

「感情に流された恋人の結末はどうなると思う？」

「そんなの決まっているわ。バットエンドの道しかないわよ」

「……そうか」

「だけどね、誰かを愛することは素晴らしいことだわ。それがハッピーエンドだろうとバットエンドだろうと一緒。ようは誰かを愛し、愛されることが一番大切なのよ。そしてほどほどに愛する。それが恋愛を長続きさせるのに必要なことよ。一生懸命に愛せば、それだけの代償がどこかで見えてくるものなのよ。相手を慕う気持ちがあるなら、相手にとって一番の幸せを考えなさい。それが男つてものでしょ？」

愛華はそう言ったが、どこか苦い顔をしていた。それは卓巳の幸せを考えてないからである。

「そんなものなのか？」

「そんなものよ。それじゃあ、私からも一つだけ質問させてもらうわ。卓巳さんだけだとズルイでしょ？」

「勝手にしろ」

「ええ、勝手にします。卓巳さんの夢はなんですか？ 別に子供の頃に抱いた夢でも、今現在の夢でもいいです」

「夢ねえ、強いて言うなら誰かを本気で愛したかった。それが彼女のできる前に抱いた夢だ」

卓巳は懐かしそうに目を細めた。かなりキザな夢であつたが、それでも本当に卓巳があつてほしいと願う夢だった。

「その夢は実現できましたか？」

「ああ」

「それなら夢を叶えた責任をもちなさい」

「自分自身に、か？」

「夢を叶える前の自分に、です」

愛華はそれ以降口を開こうとはしなかった。卓巳もまた愛華と同様に何も言わずに、ただ彼女に何を言うか考えていた。

卓巳は愛華の携帯電話を見つめて、深いため息をついた。それは今後の結末が卓巳自身にも分からなかったからだ。

## 6 パシリ 彼氏彼女の関係（後書き）

書置きがあつたのを忘れていました（汗  
ただいま実習真つ最中なので、更新が遅れたことを最初に謝罪しま  
す。

次の更新は何時になるか分かりませんが、楽しみにしていただけ  
ら嬉しいです。

## 7 パシリ 破局と戯言

授業が終わり、卓巳と愛華は屋上にきた。当初は卓巳一人で静かな場所に行こうとしていた。そうなれば無駄に広い学校で迷子になる可能性があるため、愛華も一緒についてきたのだ。

私立白怜女子高等学校は県最大規模の学校なのだ。全校生徒数は一般の学校より劣るが、金にものをいわせ、見るもの全て豪華仕様にしてある。そのため入学して相当たった愛華も行ったことのない場所は多数存在する。

卓巳は屋上のフェンスによしかかり、手馴れた手つきで携帯電話のボタンを押した。電話をかける相手はもちろん卓巳の彼女である狩野明海だ。携帯電話を耳に当て、何度か呼び出し音がなった。そろそろ留守番電話に変わろうとしていた時、ようやく電話が繋がった。

『もしもし?』

明海の声は電話越しからでも分かるほど不審に感じている声だった。

「もしもし、俺だ」

『学校にもこないで何やってるの、卓巳!』

明海は電話の相手が卓巳とわかった途端に、さっきまでの不審に感じていた気持ちが無に変わったのか、卓巳に怒鳴りつける。

明海と愛華は似ていた。顔や体格などの外見ではない、考え方や卓巳にどう接しているのか、そういった中身が似ていたのだ。そうはいっても明美はお嬢さまではないので、愛華のように卓巳を「庶民」とは言わない。ただ、卓巳をどう思っているのか、そこが似ていた。

卓巳は耳から携帯電話を離し、苦虫でも口に入れたかのように携帯電話を見つめる。それから直ぐに再び耳に当て、

「頼むから怒鳴らないでくれ」



『何言っているの！　ただでさえ卓巳は皆から「落ちこぼれ」って言われているのよ！　悔しくないの！？』

「言いたい奴には言わせとけばいい。それにもうそんな事を言わないから気にすることはない」

『どういう意味よ？』

明美は怒鳴らなくなっただけのもの、それ以上に不機嫌な声だった。明美が不機嫌になると顔には出ないものの、声が平常の時と比べ物にならないくらい低くなる。

「昨日で学校を辞めた」

『……』

「あの学校は俺には合わなかった。それに俺ってそれほど頭良くないし、あの学校に入れたもの奇跡みたいなものだったからな」

卓巳は苦笑った。

世の中には奇跡なんて本当は無いのかもしれない。あるのは必然と偶然。そのため偶然を奇跡と例え、偶然を浸っているのだろー。

卓巳もそうだった部類に入り、努力を奇跡と例え、落ちこぼれと言われても否定どころか肯定してきた。人一倍努力をしても全て空回りする卓巳は、そこから努力を奇跡と思い込むようになった。

『……それが学校を辞めた理由だっていうの？』

「いや、もっと違った理由がある」

卓巳は空を見上げた。蒼くどこまでも続く空を、ただただ見つめた。

愛華は卓巳の横顔を見て心が痛んでいた。卓巳本人は別れることに特別何かを思っただけじゃなかった。それでも愛華から見る卓巳の横顔が悲しそうだっただけから。

（不器用な人なんだから……）

そつと愛華はため息をついた。

『どんな理由よ？　もしくはならない理由だったなら殴るから』

ドスの利いた声に卓巳は焦った。「くだらない理由」それは人の価値観で変わるものだ。もう会うこともない、そう思っただけでも卓

巳は焦った。

「……そ、それは」

その後の言葉は授業開始のチャイムではばかれた。卓巳にとっては救いのチャイムとも思えるチャイムだった。

「残念だけど時間切れだわ。また今夜にでも電話をかけなおせばいいから、一言二言いつて早く電話を切りなさい」

『ちよ、ちよと！？ 今の声は誰よ！？』

地獄耳である明海にはしっかりと愛華の声が届いていた。それが話を混乱させ、切るに切れない状態になってしまった。

「こ、声ですか？ はて何のことやら、幻聴でも聞いたんじゃないか？」

戸惑いと焦りから卓巳は明海を電波人間のように言い、その場を誤魔化そうとした。

『はぐらかさないで！ それに声の前に学校のチャイムみたいな音もしたわ。いったい何処にいるのよ。怒らないから正直に言つてよ、卓巳……』

さっきまでの威勢とドスの聞いた声は何処にいったのだろうか。今の明海の声はどこか悲しそうで、どこか辛そうで、今にも声が聞こえなくなりそうだった。

「ごめん、それは言えない。俺は明海を……いや、狩野とはもう会えない。だから俺の事は今日限りで忘れてくれ。そして……さようなら」

卓巳は一方的に電話を切った。明海の返事を聞かないまま、明海の本音を聞かないまま、明海の

声を最後に聞けないまま、明海の誤解を残したまま、明海との時間を、明海との生活を、明海と交わした言葉を、全て忘れてほしいと願うように、一方的に電話を切った。

卓巳がした行為は正しいとは到底言えない。それでも不器用すぎる卓巳にとっては精一杯の別れ話だった。

「気は済みましたか？」

「……いや、むねやけした気分だ」  
パタリと携帯電話を折りたたみながら卓巳は呟いた。

\*

\*

「卓巳の……バカ」

携帯電話から聞こえる「ツーツー」という音を聞きながら明海はそう呟いた。

昨日まで卓巳の姿が見られた廊下に背を預け、明海は今にも泣き出しそうだった。大きな瞳は充血し、体を支えている足にも力が入っていないかった。

フラフラと教室に入り、授業が開始しているにも係わらず未だ先生がこないため少々騒がしかったが、今の明海には気にするどころか、全て耳に入らなかつた。耳元に残る卓巳の声だけが明細に明海の脳を繰り返して流れていた。

明海は自分の席に座り、さっき卓巳が言ったことが頭によぎる。

「狩野とはもう会えない」「今日限りで忘れてくれ」「……さようなら」全てが何度も頭にループして流れた。

「あつちゃん、どつたの？」

明海の席の後ろに座っている本庄梨乃がポンと明海の肩を叩きながら言う。梨乃は明海の気持ちとは正反対に陽気だった。

「あ、あのね、あのね。た、卓巳がね」

辛い時、悲しい時、そういった時を誰かに打ち明けるのは、その時の事を再び思い出してしまうものだ。そのため明海は堪えていた気持ちが溢れ出し、その結果頬に涙がつつた。

「ちよつとどうしたのよ!？」

梨乃の陽気な性格は筋金入りで、ちよつとやそつとの事では動揺を見せない。が、今の梨乃はオロオロとうろたえ共同不審になっていた。それは明海の性格上仕方がなかつた。明海は卓巳を含めて誰にも弱音や弱い部分を見せないようにしていた。プライドが高い訳

ではなく、ただたんに心配をかけたくなかった。それだけだ。

明海の様子と梨乃の態度で、明海の友達が机の周りに集まった。心配する子もいれば、表情では心配を装い内心は興味津々の子もいる。梨乃の場合は前者にあたった。

人とは残酷な生き物だ。自分の事を不幸と思い、自分より不幸な人を見つけた場合は哀れみの眼差しで見つめるか同情する。全ての人がそうではないが、そういった人も中にはいる。

「卓巳がねっ」

「無理に話さなくてもいい。だから涙を拭いて」

明海の言葉を遮り、梨乃は優しい声をかけながら明海をそっと抱き軽く背中をさする。

梨乃は視線で野次馬となっているクラスメイトを散らせ、明海が落ち着け野次馬の目が届かない談話室に向かって歩き出した。

\*

\*

授業は始まっているのだが、愛華の「お腹が空いたわ」という一言から卓巳と愛華は食堂の机に向かい合って座っている。普通の学校なら到底ありえない事だが、お嬢さま学校である私立白怜女子高等学校では日常茶飯事のため、誰も気に留めることはなかった。それは学生を含め先生も、だ。

「邸に帰りましたらもう一度電話をします？」

食べ終わった皿を脇に除けて、愛華は口元を拭きながら言う。

「いや、別にもういい」

「そうですか。さっき卓巳さんは「むねやけした気分だ」って言うていましたね？ それはどういう意味だったんですか？」

卓巳は怪訝そうに愛華を見つめた。

「どうしてそんな事を聞く？」

「気になった。とても言っておきましょう」

それは愛華の本心だった。愛華は卓巳が言った「むねやけした気

分だ」を別れた事を後悔しているのだと感じたからだ。

卓巳は「そうか」と素っ気なく呟いた。

ため息をつき、

「俺は愛華さまに「感情に流された恋人の結末はどうなると思う？」そう聞いて、愛華さまは「バッドエンドの道しかない」と言った。俺と明海が付き合ったのは俺が愛華さまに聞いた通りだ。だから最初は二人で楽しくやっていたけど、それも最初だけ。今に至っては連絡もあまりとらないし、学校でも話さない。形だけの恋人みたいだった。だから最後ぐらいは彼氏らしいところを見せたかったんだ。どんなに些細な事でもいい。何でもいいから見せたかった……」

卓巳はそつと視線を窓の外に移す。綺麗にカットされている木、日本と忘れさせるような噴水、日光を浴びて輝いている机と椅子。どこかを見ているのではなく、ただ見ていた。

愛華は小さく鼻で笑った。その姿は卓巳の言ったことを「くだらない」とでも言っているかのようだった。

「何がおかしい？」

「全てです。どうして形だけの彼女に彼氏らしいところを見せたいのですか？ 意味が分かりません。私からしてみれば、それは戯言です。卓巳さんはそう言っただけの気持ちで誤魔化しているのではありませんか？ 私は卓巳さんに「夢を叶えた責任をとりなさい」そう言いましたよね？ その責任をとりなさい。明海さんが納得するまで責任をとりなさい」

「……」

卓巳は何も言えなかった。愛華の言っている事を否定できなかったからである。

「邸に帰ったら電話しなさい。これは頼みじゃなくて強制です」

「……ああ」

## 7 パシリ 破局と戯言（後書き）

久しぶりの更新です。

次回は今回の続きみたいな感じです。ちょっとシリアスになると思いますが、楽しみにしていただけると嬉しいです。

## 8 パシリ さようならと言わせて

さよなら、サヨナラ、バイバイ、またね。さよならにも色々な意味と、その場に合った使い方ががある。さよならにも複数の意味があり、また明日も会いましょうからもう会うこともない最後の挨拶まで幅広い意味がある。

小堂家の母屋から少し離れた場所にもうけてある愛華専用のプライベート邸の一室。

ありとあらゆるものが無駄に豪華仕様になっている部屋に一つだけ不釣り合いな椅子に卓巳は座っていた。

愛華は風呂を入りにいき、その間に明海に電話をかけるように卓巳に携帯電話を渡した。それは愛華なりの心遣いなのだが、この部屋に限っては愛華の仕込んだ盗聴器などが設置されているため、愛華のプライバシーは守られていても、卓巳のプライバシーというものはみじんもないため心遣いどころではなかったりする。

「うう、俺はいつたいどうしたらいいのだあゝ!?」

明海に電話をかけようとしたが、肝心の内容が思い浮かばないため、卓巳は小汚い椅子に座りながら手足をバタバタ振り回した。その姿はお菓子を買ってくれなかった子どもがスパーで暴れる姿と似ている。

卓巳は数秒そのまま暴れていたが、突然ゼンマイの切れたカラクリ人形のようにぐったりとする。そのまま視線だけを天上に向けた。

「……俺はガキかつ」

そう小さく呟いて目を閉じる。

目を閉じてもしャンデリアの光で明るかった。卓巳は今どうすればいいのか考えていた。この場に居合わせた人がいたなら、きつと寝たのかと勘違いするほど静かに目を閉じていた。

「よしっ!」

数分考えてから掛け声と共に卓巳は椅子から立ち上がり、パチツと頬を両手で思いつき叩く。

卓巳は愛華の携帯電話を見つめ、ギュツと握った後に自分のポケットに乱暴に入れた。それからドアを開けて廊下を早歩きで歩く。

「どちらに行かれるのですか、西沢さん？」

どこからともなくカナメの声が廊下に響く。

卓巳は予想外の声にビックリし、少し体を震わせる。そして足を止めて後ろを振り向く。

「カナメさん……止めにきたのですか？」

「いえ」

「それならどうして？」

卓巳はカナメを怪訝そうに見つめる。

「西沢さんに一言いいたいことがあります」

「俺に、ですか？」

「ええ、恥ずかしながら私は今までに異性の方とお付き合いしたことがありません。私が西沢さんと彼女さんの事を言うのは場違いと承知しています。ですが、私は西沢さんに後悔だけはしてほしくありません。お嬢様に何て言われたのかは分かりませんが、それでも西沢さんしたいようにすればいいと思います。ただそれだけを言っておきたかったです」

カナメは一礼をし、卓巳に背を向けて歩き出した。卓巳はそんなカナメの背中を見つめ、自然に手が伸びた。掴むことも触ることもできない遠い背中が、卓巳にとって誰よりも大きな背中に見えたからだ。

カナメの姿が見えなくなったところで、卓巳は再び歩き出した。

邸を出て、敷地の外に出る門まで数十分かった。そのタイムロスをカバーするかのように、卓巳は走り出した。向かった先は言うまでもなく、明海の家だった。

小堂家と狩野家はわりと遠く、車でも使わないと一時間ほどか



る距離があつた。かといつて卓巳は財布どころかお金すらもっていない。バスも電車もタクシーも使えない今、ただ果てしない距離を走っていた。

卓巳は体力が全くないため倒れるギリギリまで走り、休憩をかねて歩く。それをずっと繰り返していた。

時間は夜遅くなくても辺りは暗く、左右の家からは電気が漏れていた。そして歩道には数人の人が歩いている。卓巳の格好、執事服装が珍しいのか、はたまた変質者のように見えたのか辺りの人は卓巳に集中する。それでも卓巳は気にする事なく走り続けた。

「西沢くん？」

卓巳が小堂家を飛び出して四十分ぐらいたつた頃だろうか、ようやく狩野家につきそうになったそんな時、不意に後ろから声がした。卓巳が振り向けばそこには梨乃が立っていた。手にはコンビニの袋を持っていて、ラフな格好だった。が、卓巳は梨乃の事を知らなかった。卓巳が以前かよっていた学校は進学校だったし、なによりあまり人付き合いが得意とはいえなかったため、自分のクラス以外の生徒は無知だった。

誰だと思い、卓巳は首を傾げる。

「えっ、誰だ？」

頬を流れる汗を手の甲で拭いながら言う。

梨乃は「信じられない」と言っているかのように眉間にシワを寄せ、そのまま卓巳に近づく。

「私の事はこの際どうでもいい。けど明海を泣かせるような奴にはお説教してあげる。だからちょっと私に付き合いなさい」

そう言いながら梨乃は卓巳の胸倉を掴む。そのまま梨乃は自分の顔に引き寄せ、傍から見れば愛し合っているカップルがキスをしているかのように見えた。

「いいわよね？」

至近距離で梨乃はニツコリと笑みを見せる。

卓巳はそんな梨乃の笑みと至近距離が居心地悪く思え、梨乃から

視線を外す。

「急いでいるから離してくれ」

「あら、女の子からデートに誘っているのに断るわけ？ 甲斐性がないわね」

（さつき説教するって言ったじゃないか）

卓巳は心の中でツツコム。

「それ以前にその格好はなに？ ちょっとキメすぎじゃないかな？」  
「ほっとけ」

「そう、まっ、私には関係ないけど。それよりその公園で少し話そう。別にいいよね？」

梨乃は卓巳の返事を聞く前に、卓巳の胸倉を掴んだまま歩き出す。卓巳は思わぬ事態になされるまま強引に引つ張られる。

公園は素っ気なかった。どこが素っ気ないのかと言えば全てが素っ気なかった。以前は今よりましなようだったが、今ではほとんどの遊具が撤去されて、残っているのは滑り台と砂場、そして鉄棒ぐらいだった。

卓巳は梨乃に強引にベンチに座らされ、今は二人並んでベンチに座っている。そんな中、梨乃はおもむろにコンビニの袋から缶ジュースを取り出し、そのまま卓巳に渡した。

「私のおごりだから」

そういつて梨乃は自分の分の缶ジュースを開ける。

卓巳も「ありがとう」と小さく呟いて缶ジュースを開けた。ここまで何も水分を補給しないまま走ったり歩いたりしていたため、この水分補給はありがたかった。そのため卓巳は何のジュースかも確かめないまま口いっぱいにジュースを含む。が、直ぐに口の含んだジュースを吐き出すことになった。それは味に問題があったからだ。いや、問題なら可愛い。大問題だった。

「うわっ、汚いな」

ゴホツゴホツと咳き込む卓巳を尻目に梨乃は言った。

卓巳は涙目になりつつ、何のジュースなのか見た。缶には『ゴー

「ヤ100%」とプリントされ、さらには全く可愛らしくないマスコミトキヤラの生物が憎たらしく笑っていた。

卓巳は梨乃を怪訝そうな顔で見つめ、

「美味しいのか？」

聞く順番が違うが、梨乃が好き好んで飲んでいるのか聞く。

「これはハズレだね」

梨乃は苦笑った。梨乃の趣味は変わった食べ物やジュースがあると試したくなる子で、今までにも色々なものを試してきた。その中でもこのジュースはハズレの部類に入った。それでも梨乃は何も言わずに飲み干してしまった。

「明海から全部聞いたよ。あの子泣いていた」

少しの沈黙の後に、梨乃はそう呟いた。

卓巳は明海の泣き顔どころか、弱音すら吐いた姿を見たことがなかったため、一瞬ベンチから身を乗り出そうとする。が、それも一瞬のこと。直ぐにベンチに座りなおした。

「……そうか」

卓巳は素っ気なく呟く。内心では自分のせいで泣かせてしまったことに罪悪感でいっぱいだった。だけど仕方がなかった。そう心で言い訳をし、興味ないふりを見せていたのだ。

梨乃は眉をしかめ、

「君のせいで明海は泣いたのよ？ 何も感じないわけ？」

「……俺と一緒にいないほうがいいつのためだ」

「それは西沢くんが決めることじゃなくって、明海が決めることよ。それに電話で「俺の事は今日限りで忘れてくれ。そして……さようなら」そう言ったそうね？」

「ああ」

「カッコイイとも思っているの？ それならとんだ思い違いよ。全然カッコイイとも思わない、むしろ最低だね」

「……」

卓巳は何も言えなかった。それよりも梨乃の言ったことが卓巳に

とつて辛く、切ない言葉だった。それは卓巳が一番よく知っている事だったからだ。

「明海と付き合い始めたのはいつ頃から？」

梨乃は何の前ぶれもなくそう言った。

「去年のクリスマス」

「そう、少しその頃の話聞かせてよ」

「あいつから聞いていないのか？」

てつきり聞いているものだと思います、卓巳は怪訝そうな顔をする。

「あいつ、ね。もう明海の話は名前で呼ばないんだ？」

「お前には関係ない」

「そつ、それより話を聞かせてよ」

卓巳は大きく深いため息をつき、

「恥ずかしいから誰にも言うなよ」

## 8 パシリ さようならと言わせて（後書き）

予想以上に早く書き終えることができましたあゝ。

一つだけ報告があります。

これからの話をルート方式にしようと思っています。なので、今回は明海ルートです。

それでは次回も楽しみにしていただけると嬉しいです。

## 9 パシリ 君の名前を教えて

「ぶざまね」

卓巳と明海のファーストコンタクトの時に、明海が卓巳に始めて交わした会話だった。いや、会話とは少し違った。お互いの言葉のキャッチボールができていないため、一方的な言葉だった。

県立正栄高等学校。県に数多くある高校の一つで、主に進学希望者が集まっている。そのため授業内容も難しく、進学率は県でも有数の名門高校だ。

そんな名門校に通っている卓巳はギリギリで入学ができたはいいが、授業に追いつくどころか、日に日にクラスメイトや同学年の生徒と差をつけられていた。それどころか、入学して初めての試験は学年最下位だった。さらにはブービーからの点数は相当離れて、赤点も見ても無残な数まで上り詰めていた。ある意味天下を取ったのだが、これといって自慢するほどの事ではない。良くて笑い話、悪くて痛い目で見られるかのどちらだった。

入学したことが幸か不幸か、卓巳は「おちこぼれ」と言われ続けられていた。もちろん努力もしていた。だが、努力は全て空回りし、成績は伸びるところか落ちる一方だった。そのため何時しか努力をしないようになった。

### 入学して初めての秋。

卓巳は友達の高松良助と共に食堂まで足を運んでいた。

学校の生徒は主に弁当派、購買派、食堂派、そしてコンビ二派の四つの勢力がある。その中でも弁当派と購買派が圧倒的な支持を得ていて、食堂派とコンビ二派は少数民族のごとくひっそりと存在している。それには訳があり、弁当派は弁当を食べながら次の授業の予習ができ、購買にはコンビ二もビックリするほどの品揃えを誇っている。そのため食堂は常にガラガラで何時なくなっても全く不思議

議ではなかった。

卓巳と良助は食券を買うため、あまり列ができていない券売機に並ぶ。

列はそう長くないものの、二人は談話をしながら待っていた。もちろん勉強や学校以外の話で、だ。卓巳も良助もとりわけ頭がいいとは言えない、そのため食事中までそんな話をしたくなかったのだが、そんな二人を良いように思えない人が卓巳たちの後ろにいた。

狩野明海。

明海はいつも弁長を持参していたが、今日は弁当をすっかり忘れてしまったため、食堂まで足を運んでいた。

当初は購買にしようと思っていたのだが、出遅れてしまい好ましいのが残っていなかった。そのため消去法から食堂になってしまった。

いつしか卓巳たちの番になったものの、喋っていたため何にするか全く決めていなかった。

「今日はどうする？」

卓巳は小銭を券売機に入れながら隣に立っている良助に言う。

「一応全ルート制覇したからな……ここは一つ二週目に突入しますか」

「つつても二週目の一発目はやばいぞ？ 食べたくない食べ物、見た目最悪の食べ物、トラウマになる食べ物の三冠王に挑むにはちょっと冒険しすぎじゃないか？」

そう言っ卓巳は券売機のある一部を睨む。

卓巳が睨んだ先、そこには卓巳が以前食べて失神する一歩手前までいってしまった『ドキドキ、ワクワク。これを食べれば記憶力UP、バージョン2・5！ 食堂の小母ちゃん一押し！』と書かれた食べ物だった。ちなみに以前卓巳が食べた時は『バージョン1・5』だった。

「おいおい、二週目をクリアするには多少の犠牲があったほうが燃

えるだろ？」

「……」

犠牲が俺たちじゃないのか。卓巳はそんな事を心の中で呟いた。

卓巳がそんな事を思っているとは知らず、良助は胸の前で握りこぶしを作つて語りだそうとしていた。

「そう、例えるならギャルゲーかエロゲーだ。一周目は何に対してもドキドキするだろ？　だが、二週目に突入したら後の展開が手をとるように分かつてしまう。それなら一周目とは違った選択肢を選んで二度の楽しみを味わう。さらにハッピーエンドじゃなく、バッドエンドコースに突き進むことによって一人のフラグで二度楽しめるじゃないか。バッドエンドによって自分の気持ちが犠牲になるが、ギャルゲーとエロゲーの貴公子と呼ばれた卓巳には俺の言いたい事が分かるだろ？」

「……そうか、俺にはお前のソウルがしかと伝わったぞ。貴公子と呼ばれた男がためらう理由がどこにある！　この食堂と言う名の戦場で革命を起こそうじゃないか、同士よ！」

そして卓巳は良助のこぶしを握る。

が、良助は冷やかな目で卓巳を見つめ、

「えっ、いや、なんて言えばいいのかな……それ以前に変な集団の勧誘はお断りだから、そこのところよろしく」

「えっ？」

卓巳はせっかくノリに合わせたのに、良助はしらけた顔をしていた。さらには卓巳の手を払いのける。ここまでくると恩を仇で返された気分を卓巳は心底味わう。

「……ぷっ、あははははは、腹いて」

呆然と立っている卓巳をよそに、良助は大声を上げて笑い出し、

「いや、さすが卓巳だな。ノルとは思っていたけど、俺の想像をはるかに超えて中々よかったぞ。つか、顔が一番つけた」

良助はお腹を抑えながらも卓巳に親指を立てる。俗にいうグッジョブというやつだ。



卓巳は大きくため息をついて、

「それで、結局二周目に突入す」

「ちよつと！ いい加減にしてくれない!？」

卓巳の言葉を遮り、卓巳たちの後ろに並んでいた明海が声を上げる。もちろん卓巳と良助はビックリした顔で明海を見つめるものの、直ぐに良助は卓巳の襟を掴んで明海の声が届かない場所に移動した。「厄介なやつに出くわしたぞ。卓巳はあいつの事を知っているか？」良助は卓巳の肩に腕を回してコソコソと話す。

卓巳はチラリと明海の方を見て、

「……ああ、この前いきなり「ぶざまね」とか言われた。ってか、あいつって誰だ？」

「世も末だな。知らない人に対して「ぶざまね」はないだろ……あいつは隣のクラスの狩野明海ってやつだ。ちなみに前回のテストで学年一位の才女だ。しかも満点だって噂がある。まあ、噂だけで実際は本当か疑わしいけどな」

「へへ、どうりであんなことを言ってきたのか」

「関心しとる場合じゃないだろ。ここは一つガツンと言い返しとけよ」

「別にいいって。言いたいやつには言わせとけばいい」

「悔しくないのか？」

「悔しくないって言ったら嘘になるかもしれない。けど、無駄な争いは避けたい主義でね」

「卓巳がそう言うなら別にいいか」

「それよりどうしてコソコソと話す必要があるんだ？」

「それは……」

良助は少し口ごもる。そんな良助を卓巳は怪訝そうな顔で見つめた。

「あいつの事が気になっている」

少しの間を空けて良助はボソボソと卓巳に告げた。

卓巳は一瞬驚いたような顔をしたが、直ぐに、

「青春しているな」

「う、うるせー！ 性格は問題あるが、顔がいいから仕方ないだろ！」

恥じらいから良助は顔を真っ赤にして叫んだ。

「そんなに大声出すと聞こえるぞ？」

「い、いいから俺の恋が実るように手伝え！」

良助は卓巳に言いたいことを言って、来た時と同様に襟を引っ張る。

卓巳は大きなため息をつきながらも友達の願いだから仕方がない、そんな事を思いつつなされるがまま襟を引っ張られていた。

卓巳と良助は再び券売機の前に戻り、かなり機嫌が悪い明海に向かい合う。

良助は卓巳のわき腹を肘で付く。言葉では表さないものの、一種の合図で「この機を逃すな」そう合図をした。

卓巳は友人の頼みだから仕方ないと思いながらも乗り気じゃなかった。が、このタイミングで「自分で何とかしろ」とは言えるはずもなく、深いため息をついた。

「えーっと、君の名前を覚えてくれないか？」

とりわけこういった機会が今までに無かったため、卓巳は社交辞令のように取り敢えず名前から聞くことにした。

「黙秘します」

プイツと明海はそっぽを向きながら答えた。

「良助さん、黙秘って何ですか？」

卓巳にとって聞きなれない単語のため、意味が分からず隣の良助にコソコソ言う。

「俺にふるなよ、卓巳さん。もしかしたら食べ物的一种じゃないのか？」

「なるほど、恩にきるよ」

卓巳は小さく笑いながら明海に視線を戻す。

そして続けて、

「黙秘ね。あれって美味しいよね」

ちなみに黙秘とは何も言わないで黙っている事をいう。もちろん食べ物的一种じゃ決してない。

そうとは知らず、まるで知ったかのようになってしまった卓巳を明海は怪訝そうに見つめた。

「言っている意味が分からないのだけど？ 学年最下位とブービーには聞きなれない単語だったかしら？ それなら気を利かせなくてごめんね」

誤るというより、明らかに卓巳たちをバカにしていた。

卓巳は少し頭にきたが、ここで言いたい事を言ってしまったたら自分と良助の印象が最悪になってしまったため、卓巳は握りこぶしを作りながらも堪えた。

「だよね、俺たちバカだからもうちょっとソフトに言ってくれと助かる」

良助は卓巳がよく堪えた后感心し、明海は意外そうな顔で卓巳を見つめた。

「あら、よく怒らないわね？ 自分がバカにされているって気づいているの？」

「気づかないほうが無理だって。それよりどうして挑発するような事をさつきから言うんだ？」

卓巳は不機嫌になりつつも、どうして明海がこういった態度をとるのか探ろうとする。

明海は一瞬苦虫でも噛んだような表情を見せたが、それも一瞬。直ぐにそっぽを向いた。

「別になんだっていいでしょ」

「話したくないんなら無理に聞かない。だけど誰にでもそんな態度とっていたら友達減るぞ？」

「う、うるさい！ あなたには関係ないでしょ！？」

「確かに関係はないな。まっ、ここはお人よしからの忠告とでも思

つてくれ」

卓巳に言われるまでもなく明海は前々から知っていた。だからこそ誰かに言われた事が無性に腹が立ち、イライラさせた。

明海は「ふん」と鼻で言いながら卓巳たちに背を向けて食堂の出口に歩いていった。

大きなため息をつきながら、卓巳は隣に立っている良助をチラリと見る。

良助は実にガツカリし、肩を落として落ち込んでいた。そんな良助を見た卓巳は罪悪感で胸がいっぱいになったが、その時には既に遅い。どうすることもできないため、そつと良助の肩に手を置いた。

## 9 パシリ 君の名前を覚えて（後書き）

回想モードに突入しましたあゝ

まだ回想モードは続くので、明美ルート終了はもう少し先になります。

次回は今回の話から少しとびますが、次回も楽しみにしていただけると嬉しい限りです。

## 10 パシリ 君の名前は狩野明海 〈前編〉

卓巳と明海が始めて会話をしてから数日が経った頃。正式に言えば冬休みを目の前に控えた最後の週。

「あゝ、ダルマックス」

卓巳はそんな事を呟き、券売機に小銭を入れる。

「ってかさ、こんな真面目に学校に行く必要とかあったわけ？」  
小銭を入れ終わった後に、隣に立っている良助に言う。

良助も卓巳の言ったことに同感なのか、

「あるはずがない！」

何の迷いもなくキツパリと答えた。もし仮にこの場に明海が居合わせていたらきつと説教の一つでもしただろう。だが、相変わらず人気のない食堂には明海どころか、人の姿すら見当たらない。

「だよな、どうせ来週から冬休みに突入だから休めばよかったな」

「……いや、やっぱり学校は必要だ」

何の前ぶれもなく良助はそんな事を口走った。さっきは「あるはずがない！」と断言していたのに、今はニヤリと似合いもしない笑みを浮かべている。

「はっ？ 突然どうした？」

「来週に冬休みが控えている。それと同時に我らにも大イベントがあるではないか！？」

実に嬉しそうに良助は言う。

「俺は学校が休みなら常に大イベントだぞ？」

「かぁー、お前の大イベントはしょっちゅう見かける閉店セールなみだな。この時期になると体の奥から湧き上がる情熱と言う名のバストを異性にぶつけようと思わないのか！？ クリスマスだぞ、クリスマスイブだぞ、the evening of Christmas Eveだぞ！？ 健全な男の子なら気になるあの子からちよつと無愛想な子まで幅広い守備で挑むだろ！ 最低でも五人は誘

って時間帯別にデートするのが常識だろ！？ 最後のメインディッシュは共に夜を明かすのが日常だろ！？ それを「俺は学校が休みなら常に大イベントだぞ？」あゝ、ヤダヤダ。俺は絶対に嫌だね！ 実は彼女がいたりしますよ、みたいな余裕ぶっこいている子に育てたつもりはありません！？」

「お前って興奮すると犯罪者の臭いがするのって俺の気のせいなのか？ それに話しの最後はしっかりまとめような」

やれやれ、と肩をすくめながら卓巳は冷ややかな目で良助を見つめた。だが、一度興奮状態に陥ったらそう簡単に素に戻るはずもなく、

「いいえ、お母さんは卓巳ちゃんに世の中のある方を教えないといけないのっ！？ 卓巳ちゃんが小さい頃に亡くなったおつとさんも望んでいるのよー！」

しまいには裏声まで使って良助は叫んだ。

（おつと、この展開は友情破局かあ！？ ってか、前々から思っていたが、良助の頭って末期だな。救いようのないバカだな）

卓巳はそんな事を思っていた。それでも唯一の救いは食堂に誰もいないことだ。もし一人でもいたら一緒にいる卓巳も変人と思われるていただろう。

そんな事を卓巳は思いつつ、ふっと食堂の入り口に視線を送る。

誰もいるはずがない。そう思っていたものの、それは明海によって無残に裏切られた。

「ほら、お得意の口説き文句で彼女を誘ってみろよ」

ツンツンと良助のわき腹を肘で突きながら卓巳はコソコソと言う。チラリと良助は食堂の入り口を見る。一瞬間がパァーと、花が咲いたような表情をする。が、それも一瞬で、次の瞬間には何事もなかったかのように平然を装っていた。それでも装っているだけで、たいてい行動を共にする卓巳には嬉しいのだと感じさせていた。

「ばっ、バカやろう！ ど、どうして俺が誘う必要がある……けどタツくんの頼みなら行ってくる」

卓巳は良助の口からタツくんと言われたのが初めてで、そこから相当緊張していると感づく。案の定良助は嬉しさ半分、悲しさ半分、緊張プラスアルファだった。嬉しさは分かるが、どうして悲しいのかは、五手先をよんでバッドエンドを予想したためだ。

良助はテクテクと小走りで明海のところまで行つた。そんな友人の後ろ姿を卓巳は小さく笑いながら見送る。

\*

\*

「ちよつと待つた。今の話で明らかに西沢くんと明海が付き合う前提がないのは私の気のせい？　むしろ良助くん……だっけ？　その人と明美が付き合っちゃんいますみたいな空気があるのは私の気のせい？」

時は戻り卓巳と梨乃がベンチに座っている公園。

「いや、ここはまだ話しのオードブルだ」

「私にはオードブルなんて必要ないの、手っ取り早くメインディッシュに移ってくれない？」

「……」

「それに私って前フリが長い話とか嫌いなタイプだから、そろそろ限界だつたりするのよね」

ニッコリと微笑む梨乃をチラリと横目で見た後、卓巳は大きくため息をついた。

「はいはい、分かつた。手っ取り早く結末まで飛ばすな……」

「それでいいのよ」

\*

\*

十二月二十四日。

クリスマスを前日に控えたクリスマスイブ。それだけなら素晴らしい日なのだが、世の中のもてない男子にとって辛い日だったりす



る。

それはそうと、街のイルミネーションが綺麗で誰もが目を奪われてもおかしくはない道の端。そこに卓巳と良助が地べたに座っていた。

「はあ、俺たちって何をしているんだろっな？」

「それを言うな、悲しくなってくる……」

良助は大きなため息をつき、地面に視線を送る。

そんな良助を横目でチラリと見てから卓巳は自分の目の前を通り過ぎる人を見ていた。

腕を組みながら一緒に歩いているカップル、

楽しそうに話しながら店のウィンドウを見ているカップル、

待ち合わせ場所でそわそわしながら時間を気にしている男性、

人の数だけ微妙に違った行動をしている人を卓巳は遠めで見つめる。

「ちょっとトイレに行ってくるわ」

さっきまで落ち込んでいた良助が突然立ち上がりながら、そう卓巳に告げる。

「俺の目が届かないことをいいことに犯罪に走るなよ」

もう歩き出している良助にヒラヒラと手を振りながら言う。良助は聞かなかったフリをしているのか、小さく鼻で笑いながら人波にのまれていった。

一人取り残された卓巳は何もすることがなかったため、再び人間観察をする。

卓巳は人間観察をしながら、ふと思った。

俺はいったい何をしているのだろっか？

そう思うと卓巳は無性にむなしく思え、ふと空を見上げた。空には雲一つなく星が綺麗に見えていたのではなく、雲が空を支配し星どころか月すら見えない。そんな空がさらに卓巳をむなしくさせた。

「一人で道端に座っているなんて寂しい人ね」

卓巳が空を見上げている時、卓巳にとって少し聞きなれた声が聞

こえた。かなりきつい言い方をする子、明海の声が。

「ほっとけ……」

そう小さく呟くものの、卓巳は明海を見ようとはしなかった。

明海はそんな卓巳を見ながら小さくため息をつく。そして卓巳の隣にそつと腰を下ろした。

「俺と一緒にいるところクラスの誰かに見られたら勘違いされるぞ？　俺は学年一バカで、お前は学年一頭が良い。話のネタにはうってつけだろうな」

「心配無用よ。私は皆から信頼されているから、ただの誤解で済むと思うから」

「あつそ、それよりこんな時間に何をしているんだ？　デート……のようには見えないけど」

チラリと卓巳は明海を見る。

明海の格好はデートに行くとは到底思えない格好をしていた。それどころかこの場にいるのが少し場違いのような格好である。下は私服のジャージ、上にはカーディガンを羽織って首にはマフラーを巻いている。化粧もしてなく、どことなくラフな格好にプラスアルファで着込んだだけのように卓巳は思えた。

「私のプライバシーを知りたいわけ？」

「……興味ないね」

卓巳はそう言っただけで肩をすくめる。

「ふーん、本心は興味津々だけど自分のプライドが許さないからってそんな素振りをしているのよね？　もう少し自分に正直になった方が私は良いと思うわ」

「はっ？　今までの話からどうしてそこに繋がる？　それ以前になぜあたかも当たり前のように隣に座っている？　つか、お前ってナルシストなわけ？　それなら今日からお前の事は狩野・ナル・明海って呼ぶわ。どっかのアニメに出てきそうでカッコイイだろ？」

「今の冗談のつもりだったんだけど……、気づかなかった？」

明海は冗談を気づいてもらえなくガツカリし、さらには追い討ち

をかけるかのように卓巳がキツイ一言のせいで軽く落ち込む。もちろん卓巳は明海が冗談を言う人のように思えなかったため、心からの本心だと勘違いし、かなり言い過ぎたと罪悪感に浸る。

「……な、なんていうの？ あれだ、そう、あれあれ。普段冗談やボケを言わない人が言つと、無性にボケを潰したくなる衝動が今まさに受けてね……、なんて言うのかな？ ……ごめんなさい」

とっさに思いついたことを卓巳は言うが、まとまるはずもなく卓巳自身何を言っているのだろうか、そんな事を思っていた。

「それがあのボケ潰しっていう高等テクニクなのね！ あなた案外中々やるわね」

卓巳の内心とは裏腹に明海は少しはしゃいだように身を乗り出し、心底感心しているかのように卓巳を見つめていた。もちろん今の卓巳は明海がそんなキャラだとは微塵にも思っていなかったため、驚きの表情で明海を見た。

「お前キャラ変わってないか？」

「あつ……」

明海は居所が悪そうに地面に視線を送る。

学校での明海はクールに装っていた。だけど普通の私生活では学校での明海とは正反対だった。それだと自分の印象やら何やらの少女の気持ちから私生活とは別の自分。クールで学校生活を送ろうと明海は人知れず思っていた。その結果として人からは近寄りがたい存在やら自分より格下とは付き合わない。そんな幻想を他の生徒に人知れず植え付けていた。明海自身今となってはマイナスの印象になっちゃったことを後悔したが、今更どうしようもなかった。だから明海はクールな自分を演じ、なれもしない事を口走っていたが、

それは卓巳という存在で無になってしまった。

明海は今までに卓巳に酷い事を何度も言ってきた。だから明海は決意をした。学校の私と今の私で引かれるのだと。

「まっ、俺としてはそっちの方が接しやすいから別にいいけどな」

卓巳は明海の想像とは全く別の事を言う。

それは当たり前なのかもしれない。

男性と女性の考え方が違う。そこにある。女性が気にしている事でも男性は気にしていない。よくある話だ。もちろんその逆も存在する。だから男性と女性の付き合いは難しく、それでもって謎なところが無数にある。

「あつ、あはははは」

予想外の出来事に何を言っているのか分からず、明海はただ笑った。苦虫でも噛んだように顔が引きつっているが、少なからず明海は嬉しいと思う気持ちがあった。

変な人だって思われなくてよかった。

と、

心のどこかで思う気持ちがあったからだ。

当の卓巳は首を傾げ、不思議そうに明海を見ていた。

## 10 パシリ 君の名前は狩野明海 〱前編〱（後書き）

9 パシリから相当日が経ちましたね^^;

途中まで書き終えてオチをどうするかで悩んだ結果が前編と後編に分ける結果になりました。

次はもっと早く更新できるように頑張りますので、これからも応援よろしくおねがいします。

11 パシリ 君の名前は狩野明海 く中編く

「それよりさつさと帰らないと親が心配するんじゃないか？」

そう言いながら卓巳はジーンズのポケットに突っ込んである携帯電話を手に取り、時間を確認しながら言う。

時は二十時を過ぎ、息子なら特別うるさくは言わないだろうが、娘なら親も相当心配するだろう。

「私は親から信頼されているから大丈夫よ。あなたこそ大丈夫なの？」

「さあ、な。どうせ仕事が忙しくて俺がいないことに気づいていないかもしれないな」

「それって寂しくない？」

「いや、結構気楽でいいよ」

卓巳はそう言いながら過去を振り返る。そして振り返れば振り返るほど、卓巳は親との接点が少々薄いことに気づく。もちろんゼロと言うわけではない、それでも他の家庭よりかは少なかった。かといって卓巳はそれについて特別不満がある訳ではないので、特に気にすることはなかった。

「へー、私だったら耐え切れないかも」

明海は苦笑いながら言う。

「慣れたらそんな事は感じなくなる」

卓巳は深く息を吸い、そして深く息を吐いた。息は白くにこり、その息が風に乗って消えていく。

「そんなものなの？」

「ああ、例えば熱い湯船に入ったら最初は辛いけど慣れたら気持ちいいだろ？ それが今の俺と親に変わったただけだ」

「なるほどね、中々興味深い事をあなたは言うのね。けど私は少し違うと思うわ」

そう、卓巳の言ったことは少し過ちがある。どれだけ熱い湯船に

慣れたところで熱いのは変わらない、熱を体に溜めれば溜めるほど、それ以上の対価で払わなければいけない。

つまり明海は早い話、いつかは寂しい気持ちでいっぱいになる。

と、思った。近い未来なのか遠い未来なのかは誰にも分からない。それでもいつかは寂しいと卓巳が思うはずだと明海は感じていた。

「ただの例え話だ。多少違っていようがさほど気にする事はない」

「……まっ、そうかもね。それで、いつまでここで座っているつもりなの？」

明海はそう言えば、と言っているかのように突然言う。

「さー、ね。俺は早く帰りたいけど、友達がトイレに行ったきり戻ってこないから、勝手に帰る訳にはいかないから戻ってくるまで未定だな」

「その友達っていつも一緒にいる人？」

「ああ、そうだ」

「ふーん、イブだっというのに一緒にいるなんて特別な関係なの？」

明海は何の迷いもなくサラツと言う。もちろん卓巳と良助はそんな仲では決していない。よくて仲の良い遊び友達、悪くて悪友といったところだろう。

「お前な……」

卓巳は大きなため息をつき、無邪気に笑っている明海を見る。そんな明海を見ていたら卓巳まで可笑しくなり、小さく笑った。

「突然笑ってどうしたの？」

「いや、ただお前を見ていたら飽きないなって思っただけ」

「なにそれ。……突然あなたの事が分からなくなっただけ」

「人なんてそう簡単に分かるものじゃない。それが異性ならなおさらだ。違うか？」

卓巳が言ったことは大方あっている。男女の価値観とは相当ずれているものだ。小さい頃から女性の中で男性が一人過ぎすのなら話は別なのかもしれない。が、卓巳は女性より男性との付き合いが長い。そのため女性とどう接すればいいのか分からないのだ。

明海は噴出すように声を出して笑い、

「その通りね。あなたは勉強ができないけど、違う知識を色々と持っているのね」

「ほっとけ」

卓巳は少しすねたようにそっぽを向く。

ふふふっ、とすねた卓巳を明海は小さく笑いながら見る。

「いじけちゃった？」

「いじけてない」

素っ気なく卓巳は言い放つ。もちろんそっぽを見た常態で、だ。

「いじけてるじゃない」

「いじけてるはずがない」

「いじけてるわよ」

「それは気のせいだ」

と、何度か卓巳がいじけているのか否か口論……というより、明海が卓巳をいじっていた。

「まあ、いじけてないって事でいいわ。あなたって以外に頑固なのね」

「それは違う。事実を述べただけだ」

「そこが頑固なのよ。もう少し素直なら可愛いのに……あなたと話していたらのどが渴いてきたわ」

ガッカリしたように明海は肩を落としながら、最後に小さく呟く。女性の扱いのイロハのイも知らない卓巳は「そのコンビニで何か買ってくるけど、何が飲みたい？」と、言えるはずもなく、それどころか「だからなに？」と言わんばかりの顔をしていた。

多少の沈黙が二人の間を流れる。

「ねえ、そこは男性が気を使って買ってきてくれるのが普通だよね？」

大きなため息をつきながら明海は情けない人を見つめるかのよう  
に卓巳を見る。

問題の卓巳といえば、今にも古風に手のひらの上にコブシを叩き



そんな仕草をして、今の状況をようやく理解していた。

「ちよつと自販機で飲み物買ってくるよ」

「もういいよ」

立ち上がって走り出そうとしている卓巳に明海は告げる。

「のど渴いていたんじゃないのか？」

怪訝そうな顔で明海を見つめた。

「もういいって」

「なに怒っているんだよ」

「怒ってない！」

「怒っているよ」

「怒ってないってば！！」

明海はどうにもむず痒い気持ちでいっぱいだった。それと一緒に無性に卓巳の顔を見るとイライラし、その結果として怒鳴るかたちとなってしまうた。もちろん卓巳にとっては理解できるはずがなく、オロオロするだけだった。

道行く人は別れ話だろうと思っっているのか、チラリと見るだけで、何事もなかったかのようにそれぞれイブという日を楽しんでいた。

少しの沈黙の後に、明海はおもむろに立ち上がる。そして人の波に混ざるかのように歩き出そうとした。が、卓巳が明海の腕を掴む。「いったいどうしたんだよ？ 俺バカだから分らないけど、気に障ることがあったら言ってくれよ！」

「……あなたは何も悪くはない。だから離して！」

「それじゃあ、分からないだろ！？」

卓巳はどうして明海の機嫌が突然悪くなったのか思い当たることはなかった。そのため、明海にどうにかして聞きたかった。それは学校で友達と呼べる人が少なかったから一人でも友達と呼べる人を失いたくなかった。からではなく、ただたんに明海の事が気になつて気まずい関係になるのが嫌だった。でもなく、卓巳は女心に気づけない自分に苛立ちを覚えていたからだ。どうしてこうなったか分からない以上、どうしようもない。だからこそ卓巳は知りたかった

のだ。どうして明海の機嫌が突然悪くなったのか、を。

思いつきり卓巳の手を振り払おうとも、ひ弱な明海が振り払えるはずもなかった。それは卓巳も同じで、絶対に明海の腕を放すつもりはなかった。

無言のまま卓巳と明海の間には解放しない気持ちと、解放されない気持ちとが交差する。

「そろそろ話してくれよ」

重い空気の中でポツリと卓巳は言う。

「バカ」

近くの人にしか聞き取れないほど小さな声で明海が言った。とっても、卓巳は聞き取れなかったため怪訝そうに首を傾げる。

「バカ！」

叫ぶように言い放ち、卓巳の顔を睨む。

「あつ……」

卓巳は明海の顔を見て、手から力が抜ける。その隙を逃すはずがない明海は、卓巳の腕を振り払って一目散に人の波に飲まれるように消えていった。

その場に残された卓巳は振り払われた腕とは関係ないかのように、手を伸ばしたまま明海の姿を追っていた。

「……ずるいよ……お前」

そして小さく呟いた。

卓巳は振り返った明海の顔がどうしても頭から離れなかった。それは卓巳にとって初めて誰かを泣かせてしまった事だからだ。

卓巳はさっきまで座っていた場所に再び座り、少しの間悩んでいた。

どうして明海を泣かせてしまったのか、と。

それでも卓巳が行き着く先には何もなかった。分かることは自分が悪いという事実だけ。それ以外は何も分からなかった。

「わり、ちよつと道に迷っていた」

良助は重い腰を卓巳の隣に落とす。

「……」

「ん？ 何かに思いつめているように見えるけど、俺がいない間に何かあったのか？」

チラリと横目で見ながら良助は心配するというよりかは、気楽に言った。

「……いや、別に」

素っ気なく卓巳は呟く。

「そうか、何か飲み物でも買ってくるわ」

眉を軽くひそめて再び良助は歩き出した。

一応良助なりの心遣いだった。

考えたい時、誰かに愚痴を聞いてもらいたい時、一人にしてほしい時、人にはそれぞれ独自の世界と、その状況に応じた対応策が必要となる。それでも他の人からは決してどの選択が最善なのかはあまり分かったものではない。時として最悪の結果となるかもしれない、時として最善の結果になるかもしれない。それは誰にも分からない事かもしれない。だからこそ良助は卓巳をそっとしておく選択をとったのだ。

卓巳は一人になり深く考え、その結果として一つだけ分かったことがあった。

もう一度明海に理由を聞こう。と、だ。

それによって明海に避けられるかもしれないが、卓巳は心が揺れてどうすることもできなかった。だからこそ本人に直接聞いて、言ってくれなかったらそれまでだと思った。

そう思ったら卓巳は直ぐに行動に起こした。直ぐに立ち上がり、人の波を器用に避けながら懸命に走った。そして後から良助には謝っておこうとも思った。

明海がどこに向かったのかは卓巳には全く検討がつくはずがない。それは当然で、卓巳と明海は友達といえるかどうかの瀬戸際の関係だからだ。悪くて顔見知り、良くて話し相手といったところだろう。

それでも卓巳は走り続けた。体力のない体を怨みながらも走り続けた。

どれぐらい走ったのだろうか。十分だろうか、それとも二十分だろうか。それぐらい長い間走っていたように卓巳は感じた。だけど、実際は五分弱ぐらいしか走ってはいなかった。

「や、やっと思つた」

荒い呼吸をし、肩で息をしながら卓巳は走るのを止めた。走るのを止めたのだから、必然的にそこに明海の姿があった。

明海はビックリしたように目を見開き卓巳を見ていた。

まだほのかに赤い瞳を隠すかのように卓巳に背を向け、その時の彼女の頬はほんの少しだけ赤く染まっていた。

## 12パシリ 君の名前は狩野明海 〔後編〕

「まあ、そんな感じ。その後はどこかのヤンキーに絡まれて、その時に俺が「俺の女に手を出すな」と言っただけ。それが俺とあいつが付き合うきっかけになった話だ」

時は戻り、公園のベンチ。

卓巳は一通りの説明をし、まだ残っているジュースを一気に飲み干す。もちろんむせて吐き出しそうになったのは言うまでもない。  
「なるほどね、大体の話は理解した。けど一つだけ疑問があるけど、いいかな？」

「答えられる範囲なら」

「どうして明海は泣いていたの？ 別にそこは泣く必要はなかったと思うけど……」

「確かだけど、気持ちの整理がつかなかったらしい。まあ、よく分からなないけどな」

肩をすくめ、大きなため息を一つ吐く。だけど梨乃には理解できなかったのか、なるほどと言っているかのように頷いていた。

「それで、西沢くんは今からどうするつもりなの？」

「なにが？」

「なにがって……明海のことしかないでしょ」

梨乃は呆れ、頭を抱える。

それも仕方のない事である。何事にも鈍い卓巳を相手にすること、すなわち話しの一つ一つに説明がいるということだ。そのため根気よく接しないと話しかみ合ってそうでかみ合わないことがしばしばある。けど、本人の卓巳は全く自分が鈍いとは思ってはいないため、相手が卓巳のペースに合わせなければならぬのだ。

「その事だけど、まだ何も考えてない」

「へっ？」

あまりにも予想外の答えに梨乃は恥ずかしいぐらい間拔けな声を

上げる。

卓巳は恥ずかしそうにそっぱを向いて今にも口笛を吹きそうだった。

「ちょ、ちよつと待って、今考えるから」

梨乃はこめかみを押さえながら考えた。

今から明海に会って何を話すのだろうか、それ以前に私は何をしているのだろうか、などと初心に帰るほど考えた。

「要するに、西沢くんは何も考えないまま明海に会おうとしたわけ？」

「まっ、そうなるな」

「……こりゃあダメだ」

今にも梨乃は崩れ落ちそうだった。もちろん悪い意味で、だ。

そんな梨乃の傍らで卓巳は、むっと眉間にシワを寄せる。

「悪かったな」

「別に悪くはないけど、もう少し後先を考えて行動したらどう？」

「少しは考えたんだけど、考えてもしようがないと思ってさ」

「それで明海のところまで走っていたってわけ？」

「ああ、そうだ」

「西沢くんの思考回路どこか異常あると思うから病院に行くことを進める」

「失礼なやつだな。俺はどこも異常はないし、普通の考えだ。お前だってあるだろ？」

「なにが？」

「考える間に体が動く時って」

「全くない！」

梨乃は言い切る。

といっても、人は切羽詰る状況に陥れば考える前に体が動くなんて別に珍しい事ではない。そんな体験をしてない梨乃だからこそ言い切れる事だったりする。

「まあ、いいわ」

梨乃は卓巳を真剣な顔で見る。

「なんだよ？」

「明海には本当の事を言つて、自分の気持ちを伝えなさい。そうすれば明海もきつと分かってくれる。そして心のどこかにまだ明海と付き合いたい、そう思うなら別れる事を考え直しなさい。分かった？」

「……ああ」

「ならさつさと言いにいけ少年よ」

「そうだな、少女よ」

それだけを言い残して卓巳はベンチから立ち上がり、直近くにある明海の家に向かって走りだした。そんな卓巳の後姿を見て梨乃は小さくだが「がんばれよ少年」そう呟いたのだった。

明海の家の前。

ごくごく普通で、どこにでもある家の前。そこに場違いと思わせる服装をしている卓巳は立っていた。

軽く肩で息をしながら、卓巳は携帯電話をズボンのポケットから取り出す。別に時間を気にしている訳ではない。それどころか今の時間が深夜だろうが、子どもが寝る時間だろうが卓巳には関係のない事だ。

携帯電話の発信履歴を見る。

名前のない番号、明海の番号を睨んだ。

卓巳は通話ボタンを押そうと何度かするが、それでも通話ボタンは押していなかった。ただその場には携帯と睨めっこする卓巳以外誰もいなく、辺りは静けさを保っていた。

数分の間、卓巳は携帯電話を睨んでいたが、睨むのを止めた。そしてごくごく稀にする真剣な顔で明海の部屋、道路側の部屋を見上げる。

その刹那、卓巳は通話ボタンを押す。

携帯電話を耳に当て、何度か呼び出し音が鳴る。数回鳴ったところで、明海に電話がつながった。

『……もしもし、卓巳？』

かなりか弱い声で明海は言う。

「……そうだ」

そんな明海の声を今までに聞いたことのない卓巳は戸惑った。それでも直に元のように接しようと平然を保ちながら言った。かといって元のように接することなんて無理な話だ。だから明海には少し卓巳の変化に気づいた。

『ねえ、理由だけ……』

「ん？」

『理由だけ聞かせてよ。私と別れるって理由』

「……そうだったな」

そして卓巳は遠い目をする。

「強いて言うならば昔の俺に対する責任ってやつかな」

『責任？』

「そう、責任だ。お嬢さま……詳しい事は言えないけど、いろいろあつて今執事やっているんだ。そのお嬢さまが俺に言ったんだよ。夢を叶える前の自分に責任をもてって」

『……そう』

「俺は前までお前の事を本当に好きだった。授業中もお前の事をずっと考えていた。風呂に入っている時も、布団に入っているときも」

「

『もう止めて！……お願いだから止めてよ……悲しくなるから』

卓巳の言葉を遮り、明海は叫ぶ。それと同時に携帯電話の向こうから明海の鳴き声が卓巳の耳に届いた。

「だけどそれも最初だけだった。日が経つにつれてそんな感情は薄っすらと消えてった。お前だってそうじゃないのか？ 学校でも話さなくなっただし、連絡のやり取りもなくなっただ」

それでも卓巳はお構いなしに続ける。

『違う……もん。私は今でも卓巳の事は好き……誰よりも好きなの！』



「それじゃあ、どうして？」

『だって卓巳はいつの間にか私の事を見てくれなくなったもん！だからどうしていいか分からなかったもん……』

そうして卓巳は気づいた。

俺は一人で先走っていたのだと。

明海が悲しい時、卓巳はそんな時そつとしいてあげた。そして逆に卓巳が悲しい時があった時、そんな時は明海が電話をした。それでも一人にして欲しいと思う気持ちがあった。その気持ちが明海も同じだと卓巳は勘違いをしていた。だから卓巳と明海に間に知らぬ間に深い溝が出てきた。

卓巳は齒を思いつきり食いしばる。

「……そうか、俺がお前の事を知らなすぎてこうなったんだな……ごめん、な」

『それじゃあ』

「いや、よりは戻せない。もう無理なんだ……」

『お嬢さまのことがあるから！？』

「それもあるし、それとは別に俺はお前の事を傷つけた。だからもうそんな思いをお前にさせたくない。だからもう……」

『……誰かと付き合うこと楽しい事ばかりじゃないの。お互いを傷つける事もあるの。だからそれは仕方ない事なのよ。だからこれから傷つけない努力をすればいいじゃない』

卓巳は以前に誰かにそう言われたような気がした。誰だか分からないが、その言葉が卓巳の記憶に薄っすらと残っていた。

「……ごめん」

そしてお互いに沈黙が訪れる。

数秒それが続き、卓巳が持っている携帯電話の向こうから明海の声が届く。

『……分かったよ。けど、これだけは言わせて』

「なんだ？」

『後悔してもしらないからね！』

「ああ」

『私は卓巳の事が今でも好きだからね!』

「ああ」

『誰よりも好きなんだからね!』

「ああ」

『だからまたいつか、その時は私から告白するからね!』

「ああ」

『……バカ』

最後は今にも声が消えそうなほど小さな声で呟いて電話が切れた。卓巳は明海の部屋から視線を外し、携帯電話をパタリと折りたたみ再びズボンのポケットに入れる。

少しの間、卓巳は目をつむった。  
とその時。

「気は済みましたか？」

優しくほんのりシャンプーのする彼女の声が卓巳の耳に届いた。振り返らなくても卓巳は誰なのか分かつている。

小堂愛華。卓巳の主であり、卓巳の執事として使える相手。

「ああ……悪くはない後味だ」

卓巳は愛華の顔を見るのではなく、明海と別れた場所を見ながら言った。

もう誰もいないその場所を、ずっと、ずっと、ずっと、ずっと、見ながら言った。

「そうですね。それは良かったですね」

静かな街中、彼女の透き通った綺麗な声が響き渡る。

「ああ」

微弱な卓巳の声は響くことはなく、愛華の耳にだけ届いていた。

## 12 パシリ 君の名前は狩野明海 〱後編〱（後書き）

明海ルートは終了しました。

次回からは…… まあ、少しは考えていますが、全体の流れは何一つ考えてないです、はい^^;

感想や評価、どんな話が見たいかなどがありましたら気軽にお願いしますね。

それでは次回にまたお会いしましょう^^

### 13 パシリ 入院とは暇な生活の最終地点

とある病院の一室。

そこに西沢卓巳がベッドに横たわっていた。

彼はカッコイイと言われるより可愛い、そう比喻された方がしっくりする顔立ちで髪の色素が薄いのか少し茶色をしたブラウンヘア。大きな眼が特徴で、それに合った長いまつ毛、そして太陽の光を浴びないのか白くスベスベした肌。全てが男性と言うよりかは女性と感じさせている。

卓巳はパジャマを着込み、外見上ではどこも異常のないように感じられる。が、パジャマの下、腹部に巻かれた包帯が痛々しさをだしていた。

そんな彼の傍ら、ベッドの傍らには彼の主である小堂愛華が無駄にゴージャスな椅子に座りながら本を読んでいた。

彼女もまた美しい顔立ちをしている。

長い髪は自然に垂らし、大きくアーモンドに似た目、整った鼻、リップをつけているのか綺麗な色をした唇、雪のように真っ白な肌。初めて見た人は芸能人かモデルでもしているのかと勘違いするほどの美貌と、それにあったスリムな体型をしていた。スリムといっても出るところはしっかり出て、そうでない所はしっかりとなない。

病院の中でも上ランクに値するほどの個室には二人以外だれもなく、部屋は静寂に保たれていた。それでも卓巳にとっては居心地が悪い場所でしかたがなかった。

「俺の事はほつといていいから邸に帰ったらどうだ？」

恐る恐る卓巳は言う。ちなみに愛華がこの個室にきてから、もう何度か言った言葉だった。

「あなたの怪我の責任は私にあります。ですから下僕の怪我は私に任せて下僕はしっかり休養しなさい」

治るものも治らん。

卓巳がそう思ったが、そんな事を言ってしまったら後々めんどうな目に合うと察知し心の中で呟く。

「別に愛華さまの責任じゃないから気にする事はないって」

「いえ、経過はどうあれ最終的に私が下僕に命令をしたのは変わりません」

「でもな……ほら、学校の宿題とかあるんじゃないのか？」

「下僕は私にさっさと帰ってもらいたいように感じられますが、それは私の気のせいかしら？」

「そ、そんな筈があるわけないでしょ？ 愛華さまの気のせいですよ」

かなりベタだが、卓巳は今にも口笛を吹きながらどこか遠い目をしそだった。

愛華は一度きりつと卓巳を睨む。

読んでいた本にしおりを挟み、パタリと閉ざす。

「まあ、いいでしょう。今日は帰りますので、また明日学校が終わってからきます」

座っていた椅子から立ち上がり、本を脇に持ちながら出口に向かって歩き出す。

卓巳はようやく解放されたことの嬉しさから笑みがこぼれる。

「最後に言っときますが、私がない事を良い事に目に余る行動は控えるように。ではまた明日」

それだけを卓巳に告げ、愛華は部屋から出て行った。

「……脇いてー！」

今にも泣きそうな顔をしながら卓巳は脇腹を軽く抑え、齒を食いしぼる。ちなみに卓巳の怪我はアバラ骨折と全身打撲だったりする。卓巳がこうなってしまったのは三日前さかのぼる。

\*

\*

とある日曜日の昼下がりに。

卓巳と明海との問題が一段落してから早くも二週間が過ぎようとしていた。その間、明海から卓巳に何度か連絡はあったものの、本人に伝わる前に色々な事情からもみ消されていた。そんな事があるとは知らず卓巳は以前より愛華からの命令に忠実とはいいがたいが、それでも愛華の頼みを聞いていた。

愛華の頼み、命令は日に日にエスカレートしていき、時間なんて関係なしに卓巳を使っていた。咽が渴いたから紅茶を持ってこいとは序の口で、酷い時は眠れないから羊の格好をして柵を飛び越えろ、などと無茶な事を言っていた。

別に卓巳が嫌いだから無茶な命令を愛華はしていたのではない。

ただ、彼女はムシヤクシヤしていた。

別れても連絡をしてくる明海に、主である愛華をほつといて明海のところに行った卓巳に、そして無茶な命令をしても結局やる卓巳に、色々な事に対してムシヤクシヤしていたのだ。だから思ってもいないことを卓巳に命令していた。

そして卓巳の怪我に繋がる一件もまた、愛華の命令からだった。

「下僕。暇だからカナメのスカートをめくって下着の色を私に報告しなさい」

この愛華の一言がことの発端である。

「さて、取り敢えず落ち着こうか。俺がカナメさんのスカートをめくるとする。それによって何の利益がある？」

もちろん卓巳はそればかりは拒もうとする。なぜならカナメの腕力は並みのではない。きつとリングを持たせれば何の感情もなく握りつぶすほどの腕力の持ち主だ。さらには日々のトレーニングで鍛え抜かれた筋肉は尋常ではない。かといってカナメも一人の女性。人目を集めるようなほど筋肉一色の体ではない。ほどほど鍛え抜かれた体のため、じっくり見ない限り、誰もカナメがトレーニングをしているとは思えない。まあ、早い話、見せる筋肉ではなく、戦う筋肉とでもいおう。

そんなカナメのスカートをめくれば仕打ちが恐いのは誰だって同

じだ。

「決まっているじゃない。私の暇潰しになるじゃない。下僕だって私の暇を潰せて嬉しいでしょう？」

愛華は何の迷いもなく言う。

そして愛華は直側にある鈴を鳴らす。

チリンと部屋に鈴の音が響き、その直後にカナメがどこからともなく現れる。

「どうかなさいましたかお嬢さま？」

「さあ、下僕。条件はそろいました」

カナメの言葉を無視し、愛華は卓巳を見る。

卓巳は一度舌打ちし、半ばやけくその状態でカナメのメイド服のスカートを掴む。そのまま一気に手を振り上げようとしたのだが、カナメの蹴りで阻止される。

馬の蹴りのように、カナメは思いつき卓巳を後ろに蹴り飛ばし、その結果としてどこかのカンフー映画のように蹴り飛ばされ壁に激突。漫画のように壁にめり込むまではいかなかったものの、ミシリと壁が悲鳴を上げた。

「ま、愛華さま……ピンクです……」

やり遂げましたみたいな表情のまま卓巳は息を引き取った。のではなく、気絶した。

次に卓巳が起きた時、悲鳴と絶叫が邸に響き渡り、小堂家専属の医師によればアバラ骨折に全身打撲と告げられ再び卓巳の絶叫が邸に響き渡った。

\*

\*

時は戻り、病院の一室。

愛華は卓巳に休養をかねて長期休暇を与えた。それでもどこかに行けるはずもなく、休暇とはすこし言いがたいものがある。

（ジューズでも買いに行くか）

卓巳はそんな事を思い、横になっていたベッドから立ち上がる。そして愛華が卓巳のために置いていった財布を手取る。が、その財布の異変に卓巳は気づく。

そつと覗き込むように財布の中身を確認したのはいいものの、常識外れの中身に少々戸惑う。

なぜなら財布の中身は全て万札だからだ。しかも枚数が普通ではない。もう百万ぐらい軽く超えているぐらいの厚さを誇っていた。もちろん愛華なりの心遣いの結果としてこうなった。普段の愛華はカードしか支払いはしない。そのため札という存在を今の今まで忘れていて、カナメのアドバイスから札になったのはいいが、自動販売機は万札を使えない。そのため卓巳からしたら嫌がらせ以外になにもなかった。

（これだから金銭感覚がおかしい人は……）

やれやれと思いながら卓巳はそつと財布から一万円札を取り出し、それ以外はそつと枕の下にでも隠しといた。

軽く欠伸をしながら売店に行くため部屋のドアをスライドさせ廊下にする。

VIPと思わせる個室だが、一般の病室と同じフロアにある。そのため一般の方とも顔を合わすことは少くない。

が、卓巳が部屋から出た途端にビクリして一步引き下がる。

なぜなら卓巳の部屋に入るためのドアの両脇。そこに黒服の大男が二人立っていたからだ。まさかの展開に卓巳はドン引きする。

「西沢さま、どちらに？」

二人の大男がハモリながら言う。

「ちよつと売店に……って誰だよ、お前ら！？」

「病院の中ではお静かにするのがマナーというものですよ」

大男Aが普通に注意する。

「あつ、すいません」

そして普通に誤る卓巳。

第三者から見ればきつとお偉いさんと、そのボディガードのよ



うに見えるだろう。

「じゃなくて、お前ら誰だつて？　つか、そこで何をしている？」

「愛華お嬢さまから何も聞かされていないのですか？」

ハモル大男二人組み。

「聞かされてないけど……」

「そうですか、私たちは西沢さまの行動を監視するために愛華お嬢さまから申されております」

どこまでもハモル大男二人組み。

「……百歩譲って認めよう。だが、他の人に迷惑だから帰れ」

「そうは言われましても愛華お嬢さまの決定は絶対ですので、いかに西沢さまの頼みでも受け容れることはできません」

「何か、今の言い方からすれば他の頼みなら聞いてくれるのか？」

「当たり前です。私たちより西沢さまは格が何段階も上ですので」説明しよう。小堂家に使える使用人にはそれぞれランクがある。

下から邸の掃除人、車の運転手、コック、ボディガード、メイド、執事ときている。さらに専属の執事になると使用人から崇拜されるほど凄いのだ。

そうとは知らず、今の今までそれらしい待遇を受けたことがない卓巳は全く実感ができずに今に至っている。

「……そうか、なら帰れ」

「ですから愛華お嬢さまの決定は絶対ですので受け容れることはできません」

「全ての責任は俺が背負う」

「ですから……」

「ならこれは命令だ。今すぐ帰れ。上官の命令も絶対だろ？」

ニヤリと卓巳は笑みを見せる。

「……分かりました。どうなっても知りませんよ？」

大男Bが諦めたようにため息をつく。

「おい、いいのか？」

大男Bに賛成できないのか、困ったように大男Aが言う。

「西沢さまの命令なら仕方ない。それに私たちが西沢さまのボディガードをしたところで、何かが変わるはずがない。そうでしょう、西沢さま？」

「ああ、その通りだ」

「なら西沢さまの命令に従うまでだ。帰るぞ」

そして大男Bは一度卓巳にお辞儀をし先に歩いていく。その後ろを不満そうな顔で大男Aがついていった。

一人取り残された卓巳は一度大きなため息をつき、当初の目的である売店に向かって歩き出した。

売店で適当に飲み物を買い、近くに置いてある固いソファに腰を下ろす。

ぐったりと座り、天井に視線を送る。

(とてつもなく疲れたような気がする)

そんな事を卓巳は思っていた。

「となり、空いているかな？」

卓巳の気持ちとは裏腹に、卓巳に明るく声をかける少女が一人。

そして卓巳の返事を待たずに、控えめに座る。

誰かと思い、卓巳は横目でそつと見る。

そこにはパジャマ姿の可愛い子が一人座っていた。黒く長い髪、モデルのように小さな顔に大きな瞳と少し控えめな口。とても可愛い子がそこに座っていた。

不意の出来事に卓巳はドキツと胸が高鳴る。

「私は東郷亜里沙。君は？」

とても笑顔が似合う子だった。

「……西沢卓巳」

それ以外に卓巳は何も話せなかった。

ただ、隣に座っている彼女の顔が素敵だったからだ。

### 13 パシリ 入院とは暇な生活の最終地点（後書き）

次は亜里沙ルートです。

今回も愛華の出番は多分少ないかもしれませんがね^^;

それでは次回を楽しみにしていただけたらとても嬉しいです

## 14 パシリ 二人の出会い

卓巳と亜里沙が出会ってから二日が過ぎた頃。

あまり人との付き合いが得意とは言えない卓巳は亜里沙と会ってもかなりぎこちなかったのだが、亜里沙はそんな卓巳とは正反對で、もう仲良しになりましたと言っているかのように気さくに話しかけてきた。

話の内容としては日常生活やら昨日見たテレビ番組の内容やらがメインだった。そしてお互い自分の病気やら怪我やらの話は一切しなかった。それが当たり前のように。

卓巳と亜里沙が話しこむ場所は決まっており、最初に会った場所。売店の固いソファだった。

亜里沙も卓巳同様に個室なのだが、男子部屋と女子部屋まで結構の距離がある。そのため卓巳が亜里沙の部屋に行くことはない。だけど女子部屋から男子部屋、主に売店などに行く場合に限って話しは別だ。女子部屋から売店に行く過程の道に卓巳の個室がある。それでも何故か話す場所は売店の固いソファと決まっていた。

それは今も同じで、固いソファに並び二人は並んでジュースを飲んでる。

「そのジュースって美味しいの？」

不思議そうな顔で卓巳が持っているジュースを見る。

卓巳が持っているジュースは特別珍しいものではない。むしろメジャーすぎるぐらい有名なジュースだ。

「？ 飲んだことないのか？」

「うん。体に悪いからお医者さんが飲んだらダメだって」

そう言っただけで彼女は苦笑う。

本当は飲んでみたい。そう何度も思った。美味しくて甘いお菓子も沢山食べたい。そう何度も思った。それでも亜里沙のお母さんや担当の医師はダメだといい続けていた。だから余計にそういった

事に敏感になっていた。

「……そう、か」

「それだけ？　ここは嘘でも体が良くなったら何でも奢ってやる。とか言っただけだったんだけど」

「俺は守れない約束はしない主義なんぞな」

「それなら仕方ないね」

あはは、と亜里沙は笑う。

「あつ、そうそう。前から一度聞こうと思っていただけいいかな？」  
「別にいいけどスリーサイズは教えないぞ」

「……西沢さんと初めて会った日のこと覚えている？」

卓巳の言葉を軽くスルーしながら言う。

さすがの卓巳でもそれぐらいは覚えている。固いソファに座りながらジュースを飲んでいたら笑顔の彼女が隣に座ってきた。たった二日前の事ぐらいしつかりと覚えていた。

「当たり前だろ？　なにか、東郷は俺の事をバカにしているのか？」

「そんなわけないでしょ！？　ただね、始めて話す前に廊下で黒服の人と西沢くんが話しているのが見えたの」

「ああ、あれか。それがどうかしたのか？」

「気を悪くしたらごめんね、それがどうしても気になって……」

亜里沙は最初に卓巳を見かけた時、黒服の大男と話している姿がミスマツチしていたため印象が濃かった。

「そうか……あれを見てしまったのか……東郷とは短い付き合いだったけど仕方がない」

「も、もしかして……」

一瞬で全てを悟った亜里沙の表情が青ざめていく。

「すまないな、痛いのは一瞬だけだ。少しだけ我慢してくれ」

そういいながらパジャマの中に手をつ込み、指で拳銃を持っているように見せかける。

「バーン！」

そう言うのと同時に笑いが込み上げてくる。

卓巳はあまり嘘をつくのが得意ではない。それは顔に出るためだからだ。だから今までかなり我慢していたのだが、それも限界。言い終えるのと同時に、笑った。けど、笑いと同時にわき腹に激痛が走ったため、結果としてやり損といえるだろう。

騙された当の亜里沙は、漫画でいうならば口を三角にし、潤んだ瞳で放心状態に陥っていた。その姿は可哀想というより、どこか愛らしかった。

「おい、しっかりしろ」

少し罪悪感に浸った卓巳は、軽く亜里沙の肩をゆする。

「ふ、ふえ？ 私死んじゃったの？ あれあれ？」

卓巳の冗談を真に受けている亜里沙は自分が死んでいるのか、それとも現役バリバリ生きているのか分からない様子で足やら胸をペタペタ触っている。

「すまん、軽い冗談のつもりだったけど、ここまで本気にするとは予想外だ」

軽く笑いながら卓巳は言う。そうじゃないと、わき腹が悲鳴を上げるからだ。

「も、もー！ 西沢くんのバカー！！」

顔をトマトのように真っ赤にし、できるだけ大きな声で叫ぶ。

けれども卓巳にとってはその姿もまた、愛らしい姿だと思い、少し心が和んだような気がした。

「それより胸から手を退けたらどうだ？ あまり人前でそうするのはよろしくないかと思うけど」

つい先ほど足やら胸やらを触っていた手が、まだ胸を触っている形で、健全な卓巳にとって少々刺激的だった。

「……セクハラで訴えてもいいかな？」

「それはちよつと困るな。まあ、それはそうと、話を戻すよ。あの黒服の人たちは何て言うのかな？ ……簡単に言えば、職場仲間ってやつかな。といつても、この前初めてあったから職場仲間っていうのも微妙なニュアンスなんだけだな」

「西沢くんって私と同年だよね？ 何の仕事をしているの？」

首を傾げて、亜里沙は怪訝そうな顔をする。

「執事」

「執事ってあの執事？」

「あの執事だ。一応こう見えてもお嬢の専属執事だから結構偉いんだぞ」

「具体的にはどのへん？」

「偉いってことで？」

「うん。それ以前に使用人にも位つてあるの？」

「さあ、俺も詳しくは知らん。けど、執事の中にも色々なカテゴリーがあつて、オールマイティーな執事もいればメイドのような仕事をしている執事もいる。その中でも専属執事は色々な使用人の中でも一番位が高いらしいんだよ」

「なんで、らしいなの？」

「一応俺だつてついこないだまで普通の高校生だったんだけど、不幸が積み重なりちよいつと前から執事に無理やりならされたってわけ。だからそういつたことは無知なの」

「ふーん、西沢くんも苦労しているんだね」

「まあな」

そつけなく返し、改めて自分が苦労しているのだと感じた。けど、苦労というよりかは、親に売られた性といつても過言ではない。そのため卓巳は思った。

別に裕福な暮らしじゃなくてもいい。だから親が親であつてほしい。

そう思った。

「楽しそうね、お二人さん」

どこからともなく綺麗で透き通る愛華の声が売店に響く。それでもトゲがあるような声なのに、卓巳は直ぐに分かった。

卓巳は慌てて時間を確認すると、時間は既に五時をまわり、いつもなら既に愛華がお見舞いにきている時間だった。

少し機嫌が悪い愛華とは裏腹に、一面に花が咲いたような顔を亜里沙はした。

「ねえねえ、この綺麗な人って西沢くんの知り合い？」

うきうきしたようにわき腹をツンツンと突つつく。もちろん卓巳にとつては痛いから迷惑以外になにもない。

愛華と亜里沙が会うのは初めてなのはいうまでもなく、愛華のような綺麗な人に声をかけられるのも初めてだった。そのため亜里沙は憧れの瞳で愛華を見つめる。

「さっき話したお嬢だ」

「へー、この綺麗な人がそうなの」

「卓巳さん、隣の可愛い方を紹介してもらえます？」

ニツコリと笑みを見せる。

愛華は自分の家、主に部屋以外では素ではない。猫を被り、いい顔をする。そのため部屋なら卓巳の事を下僕とか言い今とは比べ物にならないぐらい何ともいえない性格をしている。

そんな事とは知らずに亜里沙は自分が可愛いと言われ、嬉しいのと同時に照れる。

（可愛いなんて、そんな……けど可愛いかな。うふふ、照れる）

亜里沙はそんな事を思っていた。

「……ああ、彼女は東郷亜里沙。見ての通り入院中の身だ。ってかさ、本人に聞けばいいだろ？ どうしてわざわざ俺が説明する必要がある？」

「そう、東郷さん私の執事が迷惑かけませんでしたか？」

「おい、人の話を流すな！」

「ちよつとセクハラ発言がありましたけど、西沢くんはとっても優しくしてくれますよ。まあ、無愛想なのが少し残念ですけどね」

小さく笑う。もちろん卓巳は全く笑えない。この後に愛華に何を言われるかと考えたら、かなりテンションが下がる。

「セクハラ発言ですか……卓巳さん、後でお話をしなければいけませんね」



顔が引きつっている愛華の笑顔。

青ざめる卓巳。

嬉しそうな亜里沙。

それぞれ、いや卓巳だけは一つ問題の種ができた事にがつくりと肩を落とした。

「まあ、それはそうと、東郷さん？」

「あつ、はい。なんででしょう？」

「卓巳さんは私の事をあまり良いように思っていないようなので、私がない間は卓巳さんの事を頼みましたよ」

そんな愛華の姿に卓巳はお母さんのように見えた。

発言だけではなく、時々見せる心遣いやら仕草がそう見えた。それでも年頃の卓巳にとっては、そんな発言もまた嫌で仕方がない。

「おまえは俺のおかんか！？」

「あら、卓巳さんは主人である私におまえと言うのですか？」

「……愛華さま」

あまりお嬢さまという存在から縁のない亜里沙の前で、愛華さまと言った事に卓巳は少し恥じらいを覚えた。

学校ではこれが常識なのだが、一歩外に出ると常識とは少し違っている。それは庶民の方が富豪よりはるかに多いため、誰かの事をお嬢さまと言う機会がないからだ。だから富豪の常識は庶民には非常識となる。これは富豪と庶民に関係なく、色々な面からでもいえるだろう。

「それでいいのです。それで、卓巳さんにカナメが話したい事があるそうです。部屋で待っているのです、後ほど二人で話してください」

卓巳はどことなく何を話すのか予想はできた。決して悪い方向の話ではないと思っけていても、怪我のきつかけとなったカナメの蹴りが明細によみがえり、ひしひしと腹部辺りに痛みが走る。

「分かった」

「心配はなさらなくても大丈夫ですよ。カナメには私から誤解を解きましたので、もう乱暴することはないと思います」

「それについては何も心配はしていない」

「と、いいますと？」

愛華はてつきりカナメから説教をされるのかと思っていたらしく、予想もしない返事に首を傾げる。

「おまえ……愛華さまがするようにとカナメさんに言えば、カナメさんは愛華お嬢さまの事を軽蔑するんじゃないのか？ それなら別に誤解を解かなくてもよかったと思って、な」

「卓巳さんは私の事を心配してくれるのですか？」

「そうじゃない。邸で愛華さまとカナメさんは結構一緒にいることが多いだろ？ だから気まずい関係になると嫌じゃないか。それに、嫌な事は全部俺に押し付けても別にいいんだぞ？」

「少しは男らしいところもあるのね。けど大丈夫よ。カナメと私の関係は卓巳さんが思っているよりも深いですから」

「そうか、ならいいんだが」

「ええ」

ニッコリと愛華が微笑む。

卓巳はその笑顔が作り物だと感じていたが、突然の笑顔に少し胸がドキツとする。けど、愛華は別に作った笑顔ではなかった。卓巳の思いがけない言葉に少し心が躍り、その結果として自分でも信じられないほど素直に笑顔ができた。

「それでは東郷さん？ 卓巳さんをお借りしますがよろしいでしょうか？」

「あつ、はい。どうぞです」

軽くお辞儀して愛華は歩き出す。

「じゃあまたな」

卓巳はそれだけを言い残し、先に歩いている愛華の後を追う。少し歩いたところで、卓巳は愛華の隣を歩き、

「今日もお嬢さまを演じきっているな」

そう小さく呟く。

「当たり前です。いかなる場合も人の目を気にしなければ、どこか

ら噂が流れるか分かりませんからね」

卓巳は「そうか」と、ぶっきらぼうに答え軽く欠伸をしながら愛華と共に部屋に向かった。

## 15 パシリ 仲直りと皮肉

「お帰りなさいませ、お嬢さま」

卓巳と愛華が部屋に入るや否や、カナメが深くお辞儀しながら出迎える。そんなカナメの姿を卓巳は素直に見ることはできなく、視線をずらす。

カナメは無表情で卓巳をチラリと見て、直ぐに隣の愛華に視線を送る。その表情からは何かを読み取るのは難しく、長年メイドとして雇っている愛華もカナメの考えている事が分からなかった。

「卓巳さんを連れてきたので、私は廊下で待っていますわ。お話が終わり次第声をかけてちょうだい」

それだけを言い残し、愛華は背を向け廊下に歩み寄る。

「お嬢さま、私たちが廊下でお話しますので、お嬢さまはこちらに」  
「私は廊下でも構わないわ」

愛華は立ち止まることもせず、歩きながら言う。そしてカナメの返事も待たずに、ドアを開けて廊下に出る。

部屋には静寂に満ちた。

カナメは無表情で、ピクリとも動かない。卓巳もカナメから視線を外したまま何かを言う気配がなく、二人の間に沈黙が訪れる。

卓巳とカナメが話すことは少なく、邸でもすれ違いに挨拶程度だった。それが普通の日常であり、二人が共にいれば静寂になる時間は少なくはない。それでも今は違っている。今の静寂はとてもヘビ―な静寂で、少なくとも卓巳は部屋から出たい気持ちでいっぱいだった。

「……西沢さん」

短い沈黙を打ち破ったのはカナメだった。卓巳にとっては長い沈黙のように思えたが、実際はほんの三分程度だった。

ビクッと卓巳の体が震える。

「……」

「お嬢さまから聞きました。私は西沢さんに悪い事をしてしまい申し訳ないと思っています」

愛華同様に深く頭を下げた。

卓巳にとつては理由がどうあれ、あんなことをしてしまったのは変わりはない。だからカナメの行動がどうにも納得できなかった。

「……俺の方こそごめん。でも……どうして誤れる？俺はカナメさんに酷い事をしたんだぞ？」

そこでようやく卓巳はカナメの顔を見ることができた。

無表情の彼女からは読み取ることはできないが、それでも卓巳はどことなく寂しげな顔をしているように思えた。実際のところ、カナメは本当に悪いことをしたと反省をしていて、寂しげというよりは落ち込んでいた。

「理由の経緯は問題ではありません。それによって西沢さんが怪我をさせてしまった事実には責任があります」

「それこそ問題じゃない！俺がやったことが問題で、カナメさんは何も悪くはない」

「ですから西沢さんを蹴ってしまい、あまつさえ怪我までさせてしまった私が悪いのです」

「違う。俺がやったことに対してカナメさんは反射的にした。だから全ては俺の責任だ」

「……分かりました。それではこうしましょう。この件につきましては誰の責任でもない。私も西沢さんも悪くはありません」

「それなら俺ももう何も言わん」

「あと、西沢さんって結構頑固なのですね」

不意だった。

卓巳はその時のカナメの顔が笑ったように見えた。いや、見えたのではない。笑っていた。まだ卓巳とカナメの付き合いはほんの少しだが、今までに卓巳は一度カナメの笑顔を見た。それがどうしても忘れられなく、そして素敵な笑顔だった。

「……ああ、よく言われる」

少しの間だけ驚いたようにカナメを見ていたが、直ぐに卓巳もクスリと小さく笑う。

「それでは私はお嬢さまをお呼びいたします」

「いや、俺の方が近いから、俺が呼ぶよ」

そう言い、卓巳は部屋のドアを開ける。

愛華は部屋の前に仁王立ちで立っていた。ドアの左右には愛華のボディーガードらしき人が立っていて、その表情は困っているようだった。

「話は済んだ。早く中に入れよ」

ドアから顔だけを出して、左右のボディーガードを軽くスルーするように言う。

「そう、思ったよりも早かったのね」

ぶつきらばうに愛華は答え、卓巳が部屋に入ったのと同時にさつさと部屋の中に入る。そして愛華の特等席である無駄にゴージャスな椅子に足を組んで座る。

愛華の座っている椅子の前にはベッドがあり、その上に置いてある本を手に取り読む。一連の動作に無駄がなく、そんな愛華を卓巳は呆然と見ていた。

「私に何か言いたい事でもあるの？」

本のページをめくりながら呟く。

「あつ、いや、別に何でもない」

卓巳は愛華が何か、具体的に言えば卓巳とカナメの事について言うてくるものと思っていた。だが、愛華は別に何もなかったかのようになり椅子に座り、そして本を読んだ事に卓巳は予想外の行動に上手く言葉がでなかった。

「そう」

それだけを言い、愛華は再び本に集中する。カナメは壁と同化したかのように部屋の隅で愛華から何かを言われるまで立っており、音らしい音はカナメが本のページをめくる音だけで、再びヘビーな沈黙が部屋に流れる。

卓巳はこんな部屋にしているとどうにかなりそうと悟り、廊下に向かって歩き出す。もちろん悪い意味で、だ。

「卓巳さん、どちらに？」

本に視線を送りながらも愛華は言う。

「ちよつとトイレに」

「そう」

それだけだった。

卓巳は大きなため息をつきながら廊下に出る。ドアの左右に立っているボディーガードをチラリと見て、再び大きなため息をついた。ボディーガードは無表情まま何も言わずに立ち、その姿はできのいい人形のようなだった。

卓巳は別にトイレに行きたいわけではなく、その場から移動したい一身での嘘だ。そのため、トイレとは反対の方向を目的もなく歩いている。いや、目的がないわけではなかった。少なからず、今の卓巳にとっても唯一の救いの場である売店に本人も気づかずに向かっていた。

入院してから何度通ったか分からない道を卓巳はポケットとしながら歩いている。知らない誰かが見たら、夢も希望もなく今にも屋上から飛び降りそうな人のようにも見えた。別に重い顔をしている訳ではない、むしろバカそうな顔をしている。そのせいか暇だから飛び降りようかな、とでも他の人に思わせていた。

「あれ、西沢くんじゃない？ お話は済んだの？」

卓巳は気づかない間に売店についた事に、亜里沙の声で気づいた。

「ん？ …… ああ、終わった」

「そうなの。ほら、立ってないで座りなよ」

亜里沙は座っている椅子の隣をバシバシと叩く。けど直ぐに手に持っていた紙パックを卓巳に差し出して「これ捨てて」と促した。

紙パックを直側にあるゴミ箱に捨てて、卓巳は亜里沙の隣に座る。

「ありがと。それで、どんな話をしていたの？」

「他愛もない話だよ。ってかさ、それ以前にずっとここにいたわけ

？」

「そうだよ。それがどうかしたの？」

卓巳がそう言うのにも訳があった。卓巳と亜里沙が別れてもう三十分ほど時間が経っている。そんな中で、テレビもなにも無い所にいるという事だ。あるのは固いソファと自動販売機、そして売店の小母ちゃんぐら이다。小母ちゃんとなら話すだろうが、それでも卓巳は小母ちゃんが喋ったところといったら「ありがとうね」やら「いつもありがと」のどちらかだ。

亜里沙は不思議そうに首を傾げる。

「ここって何も無いじゃん？ それなのによくいられるなって思ってたさ」

「ああ、私の数少ない趣味に妄想があるの。だから妄想で時間を潰していたの。これが結構面白くてね、ついつい時間を忘れていたよ」

本当に面白かったのか、亜里沙は笑顔で言う。けど卓巳にとっては複雑な心境だった。どうにも世間一般では妄想を良く思わない傾向にある。だから卓巳もその一般にのっとっている訳ではないが、今まで話してきた中で亜里沙がこうも楽しそうなのは初めてだった。そのため卓巳は複雑で、どうにもやるせない気持ちがあった。

「そう……それで、どんな妄想をしていたんだ？」

亜里沙はニヤリと口元を緩める。

「聞きたいの？」

「いや、別にいいや」

卓巳は背筋に嫌な汗が流れた。どことなく自分にとって不利な話がかこれから聞かされそうな気がひしひしとしたからだ。案の定亜里沙は卓巳に係のある話をしようとしていた。

「どうせ暇でしょう？ それなら少しぐらいいいじゃない？」

「いやいや、今からお嬢に飲み物を持っていこうと思ってだな、それほど暇じゃないんだよね。いや、残念だよ。本当は凄く聞きたかったけど、本当に残念だ」



ごめん、嘘です。

と、卓巳は心の中で呟く。

そして曲がれ右で部屋に戻る訳にはいかず、ポケットの中に突っ込んであった小銭を取り出し自動販売機に投入。愛華の事だから市販の紅茶には文句を言々と察し、適当にお茶と炭酸飲料水、そしてジュースをチョイスした。カナメは飲み物に関してはさほどうるさくはないと判断しての全く違った三種類だった。ちなみにジュースとは一般的に果汁100%の事を言い、本当はそれいがいをジュースとは言わないのだ。

冷たい缶を三つ持って卓巳は逃げるように売店を後にした。

亜里沙から眼の届かないところで大きなため息をつく。

「あゝあ、俺の居場所って少ないよな」

そんなため息のオプシオンとして、そんな独り言も呟く。

戻った先は言うまでもなく、愛華とカナメがいる個室である。

ドアの前で待機しているボディガードを軽くスルーし、卓巳は腕でスライドドアを開ける。

卓巳が部屋を出て行った全く同じ光景がそこにあった。

愛華は無駄にゴージャスな椅子に座り本を読み、カナメは部屋の一部と化して立っているだけで、その光景は見ていて決して楽しいものではなかった。

缶ジュースを手を持ったままベッドの隣に供えてある机に置く。

愛華は横目でチラリと盗み見るように見て、カナメは卓巳が部屋に入ってきたときに缶ジュースを手を持っている姿を見ていたため、さほど視線を送ることはなかった。

「それは何ですか？」

興味があるのか、愛華は読んでいた本を閉じてジロジロと缶ジュースを眺める。

正真正銘のお嬢さまである愛華にとって缶ジュースという代物は珍しいものだった。とりわけ何かを飲むという時はカナメが作った

紅茶がメインで、それ以外はほとんど口にしないのだ。そのため缶ジュースは今までに飲んだこともなければ、触ったこともない。

卓巳は怪訝そうに缶ジュースを見つめる愛華を、さらに怪訝そうに見た。

「何かの冗談か何か、か？」

あくまで一般人の考え方しか持ち合わせていない卓巳にとって、お嬢さまである愛華でもジュースの存在くらい知っているものだと思っていた。

愛華はムツとし、

「私は卓巳さんに、これが何なのか聞いているのです。何も言わずに素直に答えるのが紳士のたしなみってものではないのですか？」

「……ああ、そうだな。簡単に言えば、咽が渴いたら誰でも直ぐに飲めるように缶に飲み物を入れて自動販売機で売っている。それ以外詳しいことは俺に聞いても何も知らないから聞かないでくれ」

「なるほど、やはり庶民という種類の人は時間というものに極端にないので、こういった物で咽を潤すんですね」

感心したように卓巳を一瞥し、机の上に置かれているメジャーな炭酸飲料水を手取る。プシュツと缶から炭酸が抜ける音がし、匂いを嗅いだり、缶にプリントされている絵を見たりと興味津々に缶を見ていた。

そんな愛華の様子を傍から卓巳は見て、驚いたように目をパチクリさせ、缶に唇を近づけるものの中々飲もうとしない愛華が微笑ましく見えた。

「……飲まないのか？」

見ていると飲もうとしない愛華に痺れを切らし、卓巳が小さく鼻で笑いながら言う。

「飲むわ。けど始めて口にするものは少し抵抗があるの」

「その気持ちは分かるが、それほどの物じゃないだろ？」

「……それもそうね」

愛華はギョツと瞳を閉じ、ゆっくりと缶に唇を近づける。いつき

に飲むのではなく、ほんのちょっぴり口に含んだ。

最初は炭酸特有の酸味が口に広がり、それから咽にささやかな刺激が加わる。

今までに愛華は色々な場でワインやシャンパンなどを飲んできた。そのため、特に咽には気に留めることは無かった。それでも口に残る糖分特有のべとつきが気に食わなかった。

「もついいわ。残りは卓巳さんにあげる」

口元を軽く拭きながら再び愛華は本に視線を送った。

そんな愛華の姿に卓巳は肩をすくめ、直ぐにカナメの方を見る。それからジューズを手に取り、大きな円を描くようにカナメに投げた。カナメは小さくお辞儀をし、愛華とは反対に一気に飲み干す。

「あつ、そうそう。卓巳さん？」

大事な用件を思い出しました。みたいな感じで愛華は卓巳を見る。  
「ん？ どうした？」

「今週いっぱいでお医者様が退院してもよろしいことです。お早めに東郷さんにお別れでも言っておいたほうがよろしいですよ？ それにしても残念ですね。可愛らしいお友達がせっかくできたのに、一人で先に退院とは」

そういつつ悪戯っぽく愛華は笑みを見せた。

卓巳は、というと突然の退院宣言に少しあっけを取られ上手く言葉がでなかった。

「……また大変な日常に逆戻り、か」

ようやく出た言葉が愛華に対する皮肉だった。

## 16 パシリ 普通ではない日常に逆戻り

愛華から退院宣言されてから卓巳が感じた体感時間は普段の倍以上のスピードで過ぎていったような気がしていた。

眼が覚めたかと思えば、気づいた頃には日が傾いている。その繰り返しだった。

卓巳にとって些細な一日でしかなかったのに、思いのほか毎日を充実に過ごしていた。

ドラマでは退院の時に医師やら看護婦が花束を渡す光景を高確率で見える。だけどそれは重い病気やら酷い事故のあった人に贈るお祝いで、卓巳の怪我はそれほど重い事故ではないので本当ならば花束は贈られることは無いだろう。それでも小堂家が関係しているため、卓巳にも花束が贈られた。

花束を手に卓巳と愛華、そして亜里沙が病院の出入り口で向かい合い立っている。

「ははは、西沢くんに先を越されちゃったな」

亜里沙は苦笑いながら残念そうに言う。

卓巳は何も言葉が出なかった。亜里沙が今にも泣き出してしまいそうだったから。

「……」

「卓巳さん？ 毎週日曜日は暇でしょう？ ですからお見舞いにも行つて色々な話をしてあげなさい。もちろん東郷さんがよろしければですが……どうですか？」

本当は卓巳に日曜だろうが土曜だろうが暇な日は一日たりともなかった。強いて言うならば愛華なりの心遣いだ。

「あつ、はい。ありがとうございます」

そんな事とは知らずに亜里沙嬉しそうに頭を下げる。

「お嬢さま、そろそろお時間になります」

カナメが切りのいいところでそう言った。愛華は腕時計で時間を確認し、亜里沙に一礼をする。

「それでは私たちは用事があるのでまたの機会に。卓巳さん、行きますよ」

それだけを告げ、愛華の後ろに控えてある車に向かう。

卓巳も軽く亜里沙に手を振り、愛華を追うように車の方に歩む。

「西沢くん！ また入院するのを楽しみに待っているからね！」

ようやく退院した人に言うような言葉じゃない事を卓巳に告げ、ニヒルな笑みを亜里沙は浮かべた。予想外の事に卓巳は亜里沙に振り返るが、悪戯っぽく笑う彼女に卓巳は鼻で笑う。

「ああ、その時はよろしくな」

そう言い、愛華同様に車に乗る。

卓巳が車に乗ると直ぐに邸に向かって走り出した。少しの間は二人とも車から見える景色に視線を送っていたが、流れていた景色、信号に掴まったことがきっかけとなり卓巳は愛華の横顔をチラリと盗み見る。

「どうかしましたか？」

外の景色を見ながら、耳だけを卓巳に向ける。

「愛華さまはどうして東郷さんにあんな事を？」

「話の意図が理解できないのですが」

うそつき。

愛華がそう言うものの、卓巳は何の話をしているのか愛華は気づいていると確信を持っていた。お互いの付き合いは短いものの、愛華は賢い子で、頭の回転が速いと短い付き合いの中でも卓巳は分かっていた。

「そうか、なら言い方を変える。どうして俺が毎週日曜日に東郷さんの見舞いに行かないといけない？ 俺には日曜でも土曜でも愛華さまの執事として働かないといけないだろ？ 今までもずっとそうだったのに、どうして今更？」

「逆に聞きますが、どうしてそんな事を私に聞くのですか？ 聞かなくても大方検討はつくでしょう？」

「あいにく俺はバカでね。愛華さまが言わない限り気づかない」

「それもそうですね」

何の迷いもなく肯定する。その事に少し俺はムツとした。

「答えなら時が解決してくれるでしょう。ですから卓巳さんは私に言われた通りに毎週日曜日に東郷さんのお見舞いに行きなさい。私からもう何も言う事はないわ。……少し疲れたわ。あまり私に構わないで」

「……」

卓巳は愛華が何を考えているのか分からなかった。流れゆく景色を見ながら卓巳は大きくため息をついた。

邸についたのは病院を出て二十分ほど経った頃だ。

卓巳と愛華が車を降りれば、玄関に向かってズラリと頭を下げて並ぶメイド達。そのいつもと同じ何気ない光景を見た途端に、卓巳はようやく帰って来たのだと実感した。

愛華は表面上では笑みを見せてメイド達の間を歩き、玄関から自分の部屋までもその笑みは崩す事はなかった。それでも自分の部屋に入るや否や、さっきまでの笑みは消えうせ、腕を組みながら機嫌が悪そうにベッドの上に座る。

卓巳がこの部屋に入るのは久しぶりだったが、最後に入った時と何も変わっていない。

無駄にゴージャスなシャンデリアにキメ細かなタンス。そして卓巳専用の小汚い椅子。それ以外にも沢山の物が置かれている部屋で、どれも卓巳の知っている部屋だった。

「なあ、愛華さま？」

卓巳は座り心地がお世辞にも良いとは言いがたい小汚い椅子に座り、愛華を一瞥する。

「下僕の分際で私の名前を軽々しく呼ばないでほしいわ。あと気安

く私の肌を見ないでくださる？」

「……」

睨み付けたかと思えば、プイツと直ぐにそっぽを向く。

卓巳はそんな摩訶不思議な愛華の言葉に返す言葉もないため肩をすくめ、そつと小汚い椅子から立ち上がる。

チラリと愛華は卓巳を見るものの、卓巳と目が合ったと単に再びそっぽを向く。こうなってしまったら手がつけられないと悟った卓巳はホトボリが冷めるまで部屋を出たほうがいいと思い、何も言わずに静かに部屋から出る。

どこかに向かう訳もなく、卓巳は無駄に広い邸をひたすら巡回していた。廊下ですれ違うメイドは立ち止まり卓巳に向かって頭を下げ、掃除をしている人に限っては完全に壁に張り付き道を譲っていた。そんな今までに受けたことのない待遇について卓巳は少々居づらい気がしてならなかった。できることなら普通に接してくれるのが何よりベストなのだが、卓巳の気持ちを知ってか知らず、卓巳の願いは無残にも届く事はなかった。

「西沢さん、こちらで何を？」

廊下を普通に歩いていても頭を下げられたり、道を譲ってくれたりとありがた迷惑の行為に心底うんざりした卓巳は、適当に入った部屋のベッドに仰向けで寝転がり天上を眺めていた。とりわけ広くはなく、あるのはベッドとタンス、そしてテレビに簡易のキッチンと冷蔵庫ぐらいだ。後は備え付けのシャワー室などがあり、客を泊めるような部屋でもないように思える部屋に、だ。

そんな時、完全無欠のメイド長であるカナメの声が部屋に響く。静かな部屋にドアの開く音は聞こえなかったのだが、色々なステータスを持っているカナメに今更驚く事はなかった。

「お譲に名前を呼ぶな、私を見るな……そんなことを言われて、な。部屋にいても気まずいし、適当に廊下を歩いていたらもつと場違いなような気がして……」

「それでこちらに？」

「ああ、結構落ち着ける広さだし、割と気に入った。ここじゃマズイか？」

「そんな事はありません。気に入ったのでしたら好きな時にいらしてください、お茶菓子ぐらいならご用意できますので」

「？　ここつてもしかして……」

「私の部屋です」

さすが完全無欠のクールビューティーといったところか、表情を変える事無くカナメはサラリと言い、キッチンでお湯を沸かし始めた。

卓巳はそんな事とは知らずに勝手に部屋に入り、天津さえベッドに寝転がっている。それについてかなり悪い気もしたのだが、それでも体を動かすほうだった。だからカナメの言葉に甘えようとベッドから起き上がる事無く寝転んだままだ。

数分してからカナメはお盆にお茶と和菓子を乗せてベッドの脇にある小さな机に置くと、そっとベッドの脇に座る。

「お茶と和菓子を持ってきたので、どうぞ召し上がってください」

「ああ、ありがとう。……ねえ、カナメさん？」

「どうかなされましたか？」

「どうして俺なんかに敬語を使うんだ？　自分で言うのも何だけど、俺に敬語を使うほどの人材じゃないと思う。それに勝手に人の部屋に入った俺にどうして怒らない？」

言っていて少し虚しくなった卓巳はカナメに背を向けるように寝返った。

「お気を悪くされたのでしたら謝罪いたします。ですが、私はこれが素なのです。私が怒らない件につきましては、卓巳さんだからです」

「俺だから？」

「そうです。他の誰かが勝手に部屋に入っていたのならきっと私は怒っていたでしょう」

「使用人の位つて奴ですか？」



「ただ。そう卓巳は思った。」

「それは違います」

「ただ力ナメは否定した。」

「卓巳さんはお嬢さまに、そして私にも優しく接してくれます。それに自分の地位から誰かに押し付けることなく、それでいて皆に気配りができる優しい方です。だからです」

「……変な事を言つてごめん」

卓巳は考えることを途中で止めて、遠心力を使って体を起こす。

ひょいっと卓巳は手を伸ばし、机の上に置かれている和菓子を摘まんで食べる。そして口の中に残る和菓子を流し込むようにお茶を一気に飲み干した。

「美味しかったよ。ありがとう力ナメさん」

「いえ、私は何もしてはおりませんよ」

卓巳は軽く肩をしかめて小さく鼻で笑う。そしてベッドから立ち上がって軽く伸びをする。

「またいつでもお越しになってください。私はいつでもお待ちしておりますから」

ドアに向かって歩き出す卓巳の背中に力ナメは落ち着いたように言う。

「ああ、またこさせてもらいます。その時はよろしく」

それだけを告げて卓巳は廊下に出た。

中々いい時間を過ごせたと卓巳は思い、廊下から見える中庭に視線を送る。

中庭には綺麗に切られた木、そして誰が育てているのか分からないが数々の花が花壇に植えられていた。そのプチ庭園を少しの間眺めながら廊下を歩く。

「西沢さま？」

プチ庭園から心が和んでいる時、透き通る心地のいい声がした事に卓巳はビクリして振り返る。

そこにはメイド服を着込んだ一人の女性が不思議そうに立っ

た。

愛華とカナメは美しい美人なのだが、卓巳に声をかけた女性は幼く可愛らしい顔をしていた。どこことなく卓巳に似ている。

「えっと……君は？」

「あつ、すいません。私つたらつい」

アハハと苦く笑いながら、女性は頭を下げる。

「頭を上げてください。別に俺は何も気にしてないし、できれば普通に話してもらってもいいですか？　あまり敬語とかで話されるのは慣れていないので」

「いえ、私はメイドで西沢さまは執事です。それだけはできません」

「ん、なら執事の俺が普通に喋ってほしい、そうお願いします。」

それでもダメですか？」

「うう……」

女性は少し唸り、考え始める。

「……分かりました。西沢さまがそうおっしゃるなら普通にお話しますね」

渋々女性は了解したものの笑顔で答える。

「私の名前は朝倉空です。空と書いてクウって呼びます。気軽に空って呼んでくださいね。それで西沢さまは中庭に興味があるのですか？」

「できれば西沢さまって呼ぶのも止めてもらってもいいですか？

俺の事も気軽に卓巳って呼んでください」

「あつ、はい。……なら、卓巳くん。卓巳くんは中庭に興味があるのですか？」

ちよつと頬を赤らめて空は俯きながら言う。別に空は卓巳に特別な感情をもっているから頬を赤らめているのではない。強いて言うなら異性の人を名前と呼ぶのは初めてだったからだ。

「そうだね、結構素敵な中庭だね。まあ、今始めて中庭の存在を知ったけどね」

「そうなのですか。ここの中庭を任されているのは私なのです。な

ので、こうして中庭を見ている卓巳さんを見ていたらどうしてもお話したくて」

そんな感じで中庭について卓巳と空は楽しく話していた。季節によつてどの花を植えているのとか、ここで一緒に作られているハーブは料理に使われているだとか、そんな他愛もない話をしていた。

卓巳が愛華の部屋に戻ると、まだ機嫌が直つてないのか愛華は卓巳と目を合わそうとはしなかった。それでも卓巳は心が落ち着いていたからイラつくことなく、大人の対応で愛華を見守りながら軽く話しかけた。

## 17 パシリ お見舞い

日曜日。

卓巳にとつて日曜日とは仕事が唯一休みになった日であり、以前の入院で友達になった亜里沙のお見舞いに行く曜日だ。それについてはあまりノリ気じゃなかったのだが、愛華の命令で渋々といった感じでお見舞いに行く事になった。

卓巳が亜里沙のお見舞いによりノリ気じゃないのには理由があった。

第一に私服は実家に置いてあるため、着ていく服が仕事用だけである。その格好を知り合いに見られるのはとても恥ずかしいためである。

第二に卓巳の退院の時に見せた悲しい顔、そして何より亜里沙自身が抱えている病気。短い付き合いだったとはいえ、少なからず卓巳は亜里沙の病気が普通の病気ではない事は感じていた。だから何を言っているのか分からないのだ。これが本当の理由なのかもしれない。

気持ちではそう思っているにしろ、卓巳は病院に向かっていた。

愛華の行為により卓巳は車で送ってもらえる事になった。

車内の中では愛華と亜里沙は二度ほどしか顔を合わせていないのに、どうしてこうまでするのか。それについて卓巳はずっと考えていた。

考えていたのはいいが、結論にたどり着く前に病院についてしまった。

卓巳は大きいため息をつきながら、運転手に軽くお礼を言って車から出る。

眩しく輝く日光を遮るように目を細めながら手を当て、再び大きくため息をつく。

「わぁ、本当にきてくれた」

卓巳が亜里沙のいる病室に入り、カーテンで閉ざされた亜里沙のスペースに入り込むなり、卓巳を待ち構えていたように胸の前で手を打って喜んだ。

そこまで喜ばれるとは当然思ってもいない卓巳は少したじろぐ。

亜里沙は卓巳が思っていた以上に平気だった。卓巳が退院した時は悲しかったものの、それでも時間が解決してくれた。そして自分のためにお見舞いにきてくれた事に対し、心の底から嬉しいと思っている。

卓巳はその場に突っ立っている訳にもいかなかったため、外来用の椅子に腰を下ろす。もちろんこの前まで卓巳が入院していた個室にあった無駄に豪華な椅子では断じてない。ごくごく普通の緑色をした固く背もたれのない椅子だ。

「取り敢えずこれ」

卓巳は素っ気なくそれだけを言い、邸を出る時に愛華から渡されたフルーツの詰め合わせセットを机の上に置く。

亜里沙は卓巳からそういった物をもらえとは全く思っていなかったため、嬉しさ半分と悪い気持ち半分があった。かといって悪い気持ちがあってもお見舞いの品がもらえるのは嬉しい。亜里沙はフルーツが入ったバスケットを嬉しそうに触る。

フルーツ詰め合わせセットは実にベタなのは言うまでもないが、バスケットの中に入っている果物はベタでは断じてない。それどころか金持ちの力をフルに発揮しているのか、亜里沙が知っている果物はあまりなかった。

「わぁ、嬉しいな。ありがとう、西沢くん！」

亜里沙は果物を一通り確認してから手軽な果物を手に取る。実を言えば亜里沙は普段ミカンかリングしか果物は食べていない。そのため手に取った果物は良く知っているリングだったりする。あまり果物に詳しくない亜里沙が無難に美味しいリングをチョイスした。

「お嬢からの贈り物だ」

「お嬢さまにもお礼を言わないとね」

「別にお嬢だからいいって。それよりリンゴの皮をむかなくていいのか？」

卓巳は別にリンゴが淒く食べたい。そうは思っていないのだが、亜里沙が包丁を片手に話しているものだから危なっかしくて見ていられなかった。

亜里沙は忘れていたかのように一瞬体を震わせる。そして手馴れた手つきで包丁でリンゴの皮をむき始めた。病室に果物ナイフがあるのは取り敢えず伏せておくとして、亜里沙の包丁さばきは本当に上手で皮をむいているだけなのに卓巳は見入った。

リンゴの皮をむき終わったところで食べやすいようにリンゴを力ツトし、何時の間にか机の上に置かれた皿の上に置いていく。

「どうぞ」

何かをやり遂げたように亜里沙はリンゴが置かれている皿を卓巳に差し出す。卓巳は一つをヒョイツと手に取り食べた。

「甘くて美味しいな」

それ以外の感想を言えるほど卓巳に実況のセンスはない。それでもそのリンゴは実に甘くて美味し、卓巳はそう思った。実を言うところ卓巳はあまりリンゴを好んではいなかった。それでもこのリンゴは別格の美味しさを放ち、お見舞いの品と忘れてひよいひよいリンゴに手が伸びそうになった。

「あつ、本当に甘くて美味しい」

感動したように亜里沙も卓巳同様にリンゴに夢中になりつつあった。

「そうそう、前から聞こうと思っていただけ、執事ってどんな仕事をしているの？」

リンゴの話で花を咲かせるのは別にいいが、これだといささか若い二人には場違いと言える話かもしれない。そのため思い出したように亜里沙は前から聞こうと思っていた質問を卓巳に投げかける。

「東郷さんが思っているような仕事だよ。一日の予定を言ったり、

一緒に学校に行ったり、お嬢の世話が俺の仕事」

「けどそれだと西沢くんが遊びたいと思っても遊べないよね？」

「仕事だからな」

「それって寂しくない？」

「寂しくはないけど、青春を無駄にしているとは思うね」

本音だ。卓巳はまだ十代の半ばであり、少し前まで働くのは当然先と思っていた。まだまだ時間に有余があるものだと思っていたため、あまり青春ドラマみたいな事は何一つしていなかった。それなのにいざ働くとなれば青春の舞台もなければ時間もない。あるのは終わりのない仕事だけだ。

「……」

亜里沙は寂しそうな顔をした時に、卓巳はようやく自分が地雷を踏んだのだと悟った。

いうまでもないのだが、亜里沙は卓巳以上に青春とは遠い生活を送っている。それどころか病院の敷地から出ることさえもあまりない身だ。そのため卓巳の言葉が深く胸に突き刺さった。

「アハハハハ。私の体が弱いから仕方ないよね」

亜里沙は無理に笑う。

ズキリと卓巳の胸に罪悪感が生まれるが同時だった。

「……ごめん」

「誤らないでよ。本当の事だからさ」

「けど……」

「もういいの。この話は終わりにして、面白い話をしようよ」

\*

\*

帰りの車の中で卓巳はため息しか出てこなかった。

お見舞いは病院の食事の時間になったため、卓巳は無理やり話を切り上げた。亜里沙自体はまだ話し足りないのか、残念そうな顔で卓巳の背中を見つめていた。

「……めんどくせえ」

流れる景色を見ながら卓巳は呟く。

何が面倒なのかは言った本人にも分からない。ただ胸の中がムシヤクシヤとしていた。そのムシヤクシヤがどうにも気持ちが良いものとはいえなかった。

それでも愛華がいる邸につくまでずっとムシヤクシヤした気持ちで過ごしていた。



## 18 パシリ 面倒だ

毎週日曜日の午前中に亜里沙のお見舞いをするのがいつしか卓巳の日課となっていた。

何度かお見舞いに行き、その都度卓巳は心のどこかでムシャクシヤする気持ちがあった。別に亜里沙が悪いわけではない。悪いのはそう思う卓巳の方だ。

それについて卓巳も罪悪感でいっぱいだったが、ムシャクシヤする気持ちは抑えられなかった。

今日もまた午前中に卓巳は亜里沙のお見舞いをし、午後は休息がないに等しいほど愛華にしごかれていた。

身も心も疲れ果てた卓巳は唯一の安息地であるカナメの部屋に転がり込んでいた。

「どうぞ」

人の部屋だというのに卓巳はマナーという言葉を知らないのか、はたまた疲れ果てて一瞬だけマナーという言葉をおぼえたのか、カナメのベッドに寝転がっている。

カナメはベッドの横に備え付けられている机に紅茶が入ったティーカップを二つとクッキーが入っているバスケットをおく。

「今日は紅茶とクッキーにしてみました。お口に合わなければ気にせずに残してください」

卓巳は体を起こしてベッドに座り、少し小さめのクッキーを口に放り込む。

口の中にしつとりとした食感と甘い味が口に広がる。簡単に言えば絶品だった。

あまり紅茶に詳しくない卓巳でも、ティーカップから香る紅茶の匂いから本格的に作ってくれたのだと思った。そして口に一口含めば、口中に紅茶の味が広がる。

「……すいません。蒸らし時間が足りなかったので、少し味が濃い

ですね」

紅茶というのはティーポットの中で葉がジャンピングするのは言うまでもなく大切なのだが、それと同時に紅茶の種類一つひとつに蒸らす時間が決まっている。その時間通りに蒸らさなければ味が濃かったり薄かったりする。それもまた紅茶を淹れる中で気を配らなければならぬことなのだ。

卓巳はそこまで紅茶を飲んだことがないため、多少味が濃くても気にする事はなかった。

「あゝ、俺はこれぐらいが好きですよ」  
社交辞令程度に庇う。

「そうですね。では次回はもっと美味しい紅茶をお出しできるように頑張ります」

「ほどほどに頑張って」

そう言つて多少熱いが、卓巳は紅茶を一気に飲み干して再びベッドに寝転がる。

「一つだけ質問してもいいですか？」

卓巳は見慣れない天上を見上げながら言う。

「答えられる範囲ならお答えします」

「最近のお嬢は俺に厳しくないですかね？」

「厳しいという事は西沢さんに期待をしているのだと思います。少なからず愛華お嬢さまは西沢さんを悪いようには思っていないと私は感じています」

「そうですね……どうしてお嬢は俺を執事にしたのかな？」

「それについては私も疑問に思っていました。愛華お嬢さまと西沢さんは以前からお知り合いだったのですか？」

「いや、俺が知る限りでは昔会った記憶がない。それ以前に金持ちの知り合いなんて俺にはいない」

「ではどうしてでしょう？」

「さーね、金持ちの考える事は俺には分かん。まっ、俺に分かる事があるならお嬢は相当の変わり者って事ぐらいだけだ」

「ちなみに言いますが、この部屋で行われている会話も愛華お嬢さまが聞かれていますよ？」

カナメがそういい終えた途端に、部屋に備え付けてある電話が鳴る。

「……まるで鬼だな」

卓巳は大きなため息をつきながら言う。

電話の相手はいうまでも無く愛華で、電話に出た卓巳に「今すぐ部屋にいらっしゃい」と単刀直入に言っただけで電話を切った。

そして卓巳は部屋に不釣り合いで小汚い椅子に座り愛華と向かい合っている。

「私が何を言いたいのかわかりますよね？」

「サッパリ」

卓巳は何食わぬ顔で言うが、何を言いたいのかは察している。

そんな卓巳の態度に愛華はため息をつく。それからポケットからテープレコーダを出すと、再生ボタンを押す。

テープレコーダから先ほどの卓巳とカナメのやり取りが繰り広げられるが、卓巳は顔色一つ変えずに腕を組んで聞いている。

「それは俺の影武者だ」

全てを再生し終わったテープがまき戻されているBGMを聞きながら卓巳は適当な事を言っただけで椅子から立ち上がる。

「そう、ならその影武者とやらをこの場に連れてきてちょうだい」

「……愛華様は俺に何をさせたい？ 最近それについて疑問に思っていますがない」

「あら、影武者はもういいの？」

「……」

皮肉たっぷりの笑みを浮かべながら言う愛華を卓巳は無言のまま見据える。

やれやれといった感じで、愛華は肩をすくめる。

「……私はただ執事がほしかっただけよ。それ以外に何もないわ」

「なら俺は来週のお見舞いが終わった後に執事を辞めさせてもらう……」

卓巳は面倒くさいと思えてきた。

この執事としての仕事も、愛華を相手にするのも、さらには無理やりお見舞いに行かされている亜里沙の事も。全てが面倒で仕方がないような気がしてきた。

卓巳は愛華にもっと違った答えを求めていた。だが、その答えが普通すぎて、その普通が卓巳にそういった気持ちを芽生えさせた。もちろんその事に愛華だが、言った本人さえ気づいていない。ただ面倒くさい。それだけの気持ちで卓巳に芽生えるだけだった。

数秒愛華は言葉を発することができなかった。卓巳に言った意味が突然すぎて理解できなかったからだ。

そんな愛華とは正反対に卓巳は実に面倒くさそうに愛華に背を向けて歩き出す。

「……辞めるって、その意味が分かっているの!」

そこでようやく愛華は我に返り、卓巳の背中に叫ぶ。

「父さんの会社は好きにしろ」

「本当にそれでいいの!？」

「ああ、それでいい。後は勝手にしてくれ」

卓巳はドアを開けて廊下に出る。

もちろん愛華は「ちょっと待ちなさい!」と卓巳の背中に叫ぶものの、当の卓巳は振り返る事は無かった。

愛華の部屋のドアによしかりながら卓巳は遠い目で廊下を見る。

「……結局俺は……」

そこまで言って卓巳は黙り込んだ。

一度目をつぶり、目的がある訳もなく、ただ一歩前進する。

「……前までの生活に戻るのか」

そう最後に呟いて卓巳は当ても無く歩き出した。

## 19 パシリ 自由の身

卓巳が愛華に「執事を辞めさせてもらっ」そう言ってから、約束の日まではあつという間に時間が流れた。

以前の生活に戻る。そう分かつていた卓巳にとって愛華の執事としての残りの生活は実に面倒であったが、それでも仕事だけはこなしていった。

そして日曜日の十一時頃。

恒例となりつつある亜里沙のお見舞いに今日もまた卓巳はきていた。

これが最後のお見舞いになるとは亜里沙は知る由もなく、この日もまた平凡な話を繰り返していた。

「ちよつと、聞いているの？」

無駄に固い椅子に座りながらボンヤリと考え事をしていた卓巳は、いじけたような亜里沙の声で現実に戻される。

卓巳はどのタイミングで「もうお見舞いにはこれられない」と、告げるか考えていた。

タイミングを誤ってしまえば、亜里沙は悲しい思いをする。

そのため言い出すタイミングで少しでも悲しい思いをさせないように卓巳は考えていたのだ。

それでも何か良い案がある訳でもなく、亜里沙に不快な思いをさせるだけだった。

「あ、ああ。ちゃんと聞いていたよ」

バカ正直に「考え事をしていたから聞いていなかった」とは言えるはずもなく、卓巳は苦笑しながら言う。

ベッドの横に置かれている時計で時間を確認すると、そろそろ昼食の時間になろうとしていた。

結局のところ、二時間程度ここにいたのだが、亜里沙との話の内容が記憶に無く、切り出すタイミングも思いつかない、最悪なお見

舞いになる形となった。

「今日はちよつと変だよ？ 何か悩み事でもあるの？」

付き合いと共にした時間は短いのだが、それでも卓巳の異変に亜里沙は気づいていた。その異変に最初に気づいたのは、ベッドの囲むようにあるカーテンを開ける時からだった。

亜里沙は病院に入院し、そのせいで毎日暇な時間を持て余していた。その結果として、亜里沙は人間観察を暇つぶしにしていた。おかげで亜里沙はそういった変化に少し敏感になっていた。

思いがけない言葉に卓巳は無理やり笑みを見せて首を振る。

それでも亜里沙が感じている異変は薄れるはずもない。それどころか無理をしているのがハッキリと分かるほどだった。

「……そうなの」

亜里沙はそれ以上の詮索はしなかった。

あまり人の心の置くまで土足で踏み入れる。または異常に詮索するのは誰だって嫌で、嫌われる対象だからだ。もちろん全ての人が嫌う対象とするのではない。それでも多数の人はその対象と見るだろう。

「ああ……そろそろご飯だろ？」

「もうそんな時間か。やっぱり友達と話していると時間が経つのが早いね」

「……」

卓巳は胸にズキリとするものがあつた。

亜里沙にとつては無意識からの言葉だったが、それでも「友達」その言葉を聞いた途端に卓巳の胸には罪悪感が生まれた。

そう、卓巳はその「友達」と別れる最後の言葉を言うのが今日の目的だった。だが、亜里沙の口から「友達」と聞かされた。

卓巳は悩んだ。

本当に別れてもいいのか、俺は友達を裏切つてはいないのだろうか、と。

否。

別にこのままお見舞いを続けてもいいじゃないか、愛華とは何も関係ない、俺がしたいようにすれば何も問題は無い。

別れや裏切りの直後に亜里沙との関係が続ける思いが卓巳を支配する。

「そうだな」

先ほどは何も言えなかった卓巳だったが、気持ちが楽になると自然に口元がほころぶ。

そうだ、このままでいい。何も問題はない。

そんな事を思いながら卓巳は椅子から立ち上がる。

「また来週くるよ。……あと、悪かったな」

謝罪の言葉を最後に付け足す。

この謝罪は今日の態度と卓巳が一時でも「友達」と別れようと思った気持ちからの謝罪だった。

亜里沙はどうして謝られたのか知るはずも無く、怪訝そうに卓巳を見る。それでも、まあいいか、そうお気楽な言葉で見るのを止める。

「分かったよ。また来週楽しみだよ。その時まで面白い話を用意しておいてね」

「ああ」

卓巳が相槌を打つと同時にカーテンが開かれ、看護師が昼食を持ってくる。

卓巳は看護師に軽く会釈をし、病院を後にする。

亜里沙のお見舞い後、たった今から卓巳ははれて自由の身となった。それでも本人に自覚は無い。自覚が芽生えるとするならば、実家に帰り、以前のように学校に通う。それを経験して初めて自覚が芽生えるだろう。

兎にも角にも、卓巳の気持ちはまだ執事だった。

ようは一刻も早く執事のトレードマークである服を脱ぎ、私服に着替える。自覚とは別に、そこで初めて愛華の執事を辞める事になるのだ。

卓巳は迎いの車に乗り込み、窓から見える流れる景色を呆然と見つめる。

車の中では愛華にどういった別れを言おうか考えていた。無難に「じゃあな」が一般的かもしれないし、もう会わない事を前提に皮肉の一つでもプレゼントをするのもよし。何にせよ、何も告げないで別れるほどの仲ではないのは確かだ。

頭の中で色々な事を考えているうちに邸に着く。

車は邸の玄関に停められる。運転手の心遣いだった。

卓巳はお礼を言ってから車を降りる。

すれ違うメイドからは道を譲られ深く頭を下げられる。まだ愛華とカナメ以外は誰一人として卓巳がここを去るのを知らない。

それでも日常は何一つ変わらない。

卓巳という人がいないだけで誰かが淒く困ることもなければ、誰かが淒くガツカリすることもない。そう思えば気が楽だった。

ゆっくりと歩く卓巳に最初に目に入った知人は朝倉空だった。

空は中庭を任されているメイドである。

格好も仕草もメイドそのものなのだが、それでも花に対する顔つきは真剣そのものだった。別に愛華に中庭を任されているからこれほどに真剣になるのではない。空は花に限らず、何かを育てるのが好きだった。だからこそ中庭を任された今は毎日が充実している。

卓巳は一瞬だけ話しかけるか、仕事の邪魔をしないようにその場を去るか考える。が、今日でなにもかも終わりのため、卓巳はゆっくりと空に近寄る。それと同時に車の中で飲もうと思って病院で買った缶コーヒーを取り出す。

「そこら休憩でもいれないか？」

ピトツと空の頬に缶コーヒーを当てる。

買ってから相当な時間が経っているため、冷たくなければ熱くも無い。それでも元からの缶の冷たさからビクツと体が震える。

「ひゃう！ た、卓巳くん！？」

驚いたように振り向き、その直後に頬を赤らめて怒ったように言



う。

「悪いわるい。ほら、缶コーヒーあげるから休憩でもどうだ？」

空は「ありがとう」そう言って卓巳から缶コーヒーを受け取る。

二人は中庭にあるベンチに腰掛ける。

「毎週日曜日の午前はいつも何をしているのですか？ 午前だけ姿が見当たらないのですか？」

「ん？ ああ、友達のお見舞いだよ。朝倉さんこそ日曜なのに仕事？」

「いえ、今日は休みですが、お花さん達のお世話がありますので」

「偉いね。俺なら休みの日まで仕事とかしたくはないな。まっ、それも今日までだけだね」

「えっ？ それってどういう意味ですか？」

「今日で執事はおしまい。はれて自由の身さ」

「……愛華お嬢さまは承諾したのですか？」

「どうだろう」

卓巳は愛華に言った時の事を思い出す。

どうにも無理やりで、愛華の言葉を聞く前に部屋から出た。だから愛華が承諾したのかは何も分からない。それでも、だ。卓巳は今日限りでこの邸から出るつもりでいる。愛華が何て言おうが卓巳の気持ちは変わらない。

あさつての方向を見る卓巳を空は怪訝そうな顔で見つめる。

「お譲の返事を聞く前に俺は部屋から出たからな」

少しの間を空けてそう卓巳は呟く。

「……そうですか。とても残念です」

「どうして？ 別に俺がいても何も変わらないだろ？」

「それは違います。愛華お嬢さまはきつと寂しいと思っていますよ。それに西森さまだって卓巳くんがいなくなると寂しいと思います。

二人だけじゃなく、私もそうです。とっても寂しいです」

「……」

卓巳は何も言えなかった。

ただ呆然と俯いている空を見つめる。

卓巳本人は気づいていないが、心の奥で誰かにそう言ってもらえることを望んでいた。愛華に辞めると言った時も、だ。その引き金となったのは愛華の「ただ執事がほしかっただけ。それ以外に何も無い」その言葉だった。もしその言葉が偽りでも卓巳を気に欠けた事を愛華が言っていたら卓巳が辞めるとは決して言わなかっただろう。

結論として卓巳は誰かに必要とされたかったのだ。

そして今。

卓巳は空に引き止められた。

空の言葉で卓巳の心は少しだけ揺れる。それでも愛華の言葉を思い出せば、空の言葉は意味の無い言葉となった。

「そう言ってくれるのは朝倉さんとカナメさんだけだよ。ありがとう」

そして卓巳はベンチから立ち上がる。

「まっ、これからも頑張って中庭を綺麗にね。そうすればきっと良い事があるよ」

それだけを言い残して卓巳は中庭を後にする。

もちろんだが、卓巳の背中に空は言葉を投げかけた。だが、卓巳は手を上げる以外に何も答えなかった。

## 20 パシリ 気づく気持ち

空に別れを告げてから卓巳が次に向かった先はカナメのところだった。

カナメの部屋の前で卓巳は立ちすくんでいた。

ノックをするのもドアノブを回すのも容易いのだが、卓巳はカナメと何を話せばいいのかわからなかった。

カナメは以前から卓巳が執事を辞めることを知っていた。そして空と同じような事も言っていた。だからこそ、だった。

部屋の前で立っている、突然ドアが開かれる。

もちろんだが、部屋の中。ドアノブを手にとって卓巳を見ているのはポーカークフェイスのカナメだった。

カナメの内心では早く部屋に入らないのか、そう思っていたが中々ドアが開かれる様子がなかったため、痺れを切らしてカナメ自らがドアを開けたのだ。

卓巳は驚いたような顔をするが、カナメだから。その一言で驚きをなくす。

「ど、どうも」

「立ち話はなんですから中にどうぞ」

カナメはそれだけを言っただけで先に部屋の中に入っていく。卓巳もカナメの後を追うように部屋の中に入り、ベッドに座った。

卓巳がカナメの部屋に訪れるのは今までに何度かあったが、それでも今の卓巳はどこか落ち着きがなかった。

カナメは既に淹れていた紅茶をお盆に載せてベッドの横にある机に置くと卓巳の隣に座る。

「お気持ちは変わらないのですか？」

卓巳が口を開こうとしなかったため、カナメが先に問う。

最初は何を言っているのか卓巳はカナメの言った事の意図が掴めなかったが、それでも今日の事で分かった。

カナメが言っている事、それは執事を辞める気持ちは今も変わらないのか。ということだ。

「ああ、俺は今日で辞める」

卓巳の気持ちは変わらない。いや、揺るがないのだ。

もう卓巳はその答え以外は持ち合わせていなかった。

「それは残念です」

何事にもポーカーフェイスに対応しているカナメも今もそのポーカーフェイスを崩さず言う。それでもカナメは内心とても残念で仕方が無かった。できることなら以前の生活がもつと続けばいい、とまでも思っていた。

カナメと付き合いが短い人なら言っていることと表情が矛盾していると思っても仕方が無いのだが、それでも卓巳にはカナメの想いが伝わっていた。

基本的に卓巳は愛華とカナメと共に行動をしていた。そのため愛華ほどではないが、卓巳はカナメの想いが薄っすらと読み取れるようになっていたのだ。

「……ねえカナメさん？」

卓巳は膝に肘を寄せ、手のひらで顔を覆う。突然その行為に走るのには少なからず意味がある。

「俺は最後にお嬢に会うべきなのか？ それともこのまま何もしないで帰るべきなのか？」

そう、卓巳は結局今日の今まで卓巳がこの邸を出る理由も意味も何も問われず、さらには卓巳が辞める事をあたかも知らないかのように以前と同じように振舞っていた愛華と最後に会うべきか、それともこのまま自然消滅かのように邸を去るべきなのか、普通の人ならば何も悩むほどの事でもない事を卓巳は以前から悩んでいた。

「私はやはり会うべきなのだと思います」

「どうして？」

手で顔を覆う卓巳にとってカナメの表情は見られない。仮に見たとしてもポーカーフェイスのカナメから意図を掴むのは非常に難し

いだろう。そのため耳だけをカナメに向ける。

「強いて言うならば一時であれ家族だったからです」

「家族？」

「ええ、家族です。住み込みで働いている私が雇い主である愛華お嬢さまを家族と思うのは出すぎた真似だと承知しております。ですが、出すぎた真似と思っています。それも心の奥では家族として共に生活をしている事と思っています。それが愛華お嬢さまにとって迷惑な事でも、メイドとしてしてはならない事でも私の思う気持ちは私の自由です。私がどう思っても誰にも迷惑をかける事はありません。……すいません。上手くまとめられませんが、要するに私が言いたい事は……」

「一時であれ家族として思えたお嬢と最後に会うのは当たり前。そう言いたい訳ですね？」

卓巳はカナメの言葉を遮るように言う。

その時の卓巳は先ほどのように手で顔を覆う姿はしていなかった。組んだ手の上に顎を乗せ、横目でカナメを見ていた。

「その通りです」

「……俺はお嬢を家族だと思った事は今の一度も無い」

「それでは会わないと？」

「いえ、そうじゃありません。確かにお嬢を家族と思った事は一度も無いのは確かです。ですが、一瞬でも大切な人だと思えた人に別れを告げるのは当たり前ですね。結局俺は逃げたかっただけのようです」

ようです。そう言うからには今までその事に気づかないで、たつた今その事実を知ったかのようなのだが、その通りだった。卓巳は今のいままで「逃げたかった」そうとは思ってはいなかった。それに気づいたのはカナメが「家族」と言った時だった。

愛華の脅迫に似た形で執事となった卓巳にとって日常を土足で踏みにじり、それだけでは物足りず平穩を蹴散らしたといっても過言ではない愛華から逃げたいと思うのは十分すぎるぐらいの理由だ。

だがその気持ちは物理的なものではない。むしろそれでは何の解決にもならない。

そう、卓巳が逃げたかったものは気持ち、精神的な面だ。

愛華が卓巳の平穏な日常を奪ったのは逃れられない事実で、変えられない事実だ。もちろんその事に対して卓巳は今更何も言わない。だが、卓巳が以前に愛華に対して自分を選んだ理由を聞き、その答えとして「執事がほしかった。それ以外に何も無い」そう返ってきた。愛華の言った事は本音かそうでないのかは卓巳には分からない。だが、そう言われた以上卓巳にとって今まで少なからず慕っていた人に裏切られた。そう思っても仕方が無かった。それが愛華から逃げたいと本人が気づかずに抱いていた思いだった。

「愛華お嬢さまからですか？」

「自分の気持ちからです。俺はお嬢から次に何を言われるかを知るのが恐かったのかもしれませんが」

「恐い？ お言葉ですが愛華お嬢さまは誰かを傷つけるような事は決して言いません」

「そうかもしれませんが。ですがそれは一般的なものです。現に俺はお嬢から『執事がほしかった。それ以外に何も無い』そう言われた時にとっても悲しかった。空しかった。今までしてきた事は何だったのか？ そう思えるぐらいにね。だから俺はこれ以上何かを言われる前にこの邸から出たい気持ちが強すぎて結果としてお嬢から逃げたい、そう思いました」

「ならこのまま愛華お嬢さまに会わないのですか？」

「いえ、それはさっきも言ったように会いますよ」

「ならどうしてそんな事を私に言ったのですか？」

「そうですね、強いて言うならカナメさんだからですよ。この部屋に知らずに入った時にカナメさんは俺に『優しい方』と言って怒りはありませんでした。それと同じですよ。カナメさんも優しい方だからこそ俺は本音を言おうと思いました。まあ今の会話はお嬢に筒抜けなので何を言われるか分かったものじゃないですけどね」

そう言つて卓巳は苦く笑つた。

卓巳は机に置かれたティーカップをヒョイツと手に取ると一気に飲み干す。

「とても美味しかったです。それじゃあ俺はもう行きます。カナメさんも元気で」

それだけを告げると卓巳はドアの方に歩き出す。愛華に別れを言いに。

「あつ、そうそう。中庭で花の手入れをしている朝倉さんにもう少し楽をさせてあげてください。彼女休みの日とか関係なしに花の手入れをしています。それだけ覚えといってください」

ドアノブを回した時に卓巳は思い出したように言う。

「ええ、朝倉さんにつきましては私も以前から何度も楽をさせてあげたいと思っていましたし、それにつきましては任せてください」

「ありがとうございます」

「いえ、卓巳さんこそお元気で」

卓巳はカナメの言葉を笑顔で返して部屋を後にした。

閉ざされたドアに卓巳はよしかかり、大きなため息をつく。

## 21 パシリ 閉ざされたドア

卓巳から執事を辞めると告げられてから愛華は今に至るまで卓巳の気持ちを尊重し、このまま送る事を決意していた。

が、その日はあつという間にやってきて、日が一日ずつ削られるごとに愛華は自己嫌悪を抱いていた。

愛華にとってこれほど素直になれない自分が憎く、おぞましく思えた瞬間は無かった。

それでも気まずい関係のまま別れるのを愛華は嫌っていた。それは遠い昔に喧嘩別れした卓巳との出会いが原因となる。

そう、卓巳と愛華は昔出会っていた。

卓巳はその事は何も覚えていない。だが愛華は覚えている。何の因果があるのか分からないが卓巳と愛華は出会っていたのだ。

二人が出会ったのは四歳の頃。

そこまで幼いのならば卓巳が覚えていないのは当たり前で、それは卓巳以外の人も覚えていないだろう。仮に覚えていたとしても写真のようなワンシーンを覚えているだけが精一杯だろう。人の記憶ほど曖昧なものはないのが現状だ。

だが愛華は違った。

世の中には例外という言葉がある。まさに愛華は例外だった。

一般的に長い年月を経た記憶ほど真実と異なり自分に都合のいいように書き換えられる。が、心に傷ができた記憶は長い年月が経っても覚えていられる。傷をつけた本人にしてみれば忘れられる対象ではあるが、逆に傷を受けた本人にしてみれば些細な事でも記憶として残る。人間はそこまで強い生き物ではないからだ。強いて言うならばモロイ箇所を突けば容易く崩れ落ちるという事でもある。いかに人からどう思われようが人はそれほどモロク、壊れやすいものなのだ。

とにかく二人の間に何らかの問題が生じ、一方は何も覚えていな



し、もう一方は明細に覚えている。これを皮肉以外にどういふべきなのか愛華は知らない。

何はともあれ愛華もまた卓巳同様に悩んでいた。

今しがた卓巳とカナメの会話を聞き、直ぐに卓巳が愛華の部屋に訪れるのは真実だ。だが、愛華もまた卓巳に何を言っているのか分からなかった。

愛華は無駄にゴージャスな椅子に座り、目の前に置かれている部屋には不釣り合いな朽ち果てた椅子を見つめながら考える。

仮に愛華が「体には気をつけて」と言うでしょう。が、その後続く言葉が思いつかない。思いつくのは発展性のない掛け言葉だけだった。そう思えば思うほど、以前どういった会話を卓巳としていたのか思い出せないでいる。

論外ではあるが、仮に卓巳がカナメに言ったように中傷的な言葉を投げかければ、それこそ最悪の別れであり昔の繰り返しでもある。普通なら愛華の素直な気持ちを卓巳にぶつけるのが何よりも効果的ではあるのだが、動揺している愛華にとってその選択肢は存在しなかった。だが、これもまた皮肉な事に卓巳はその愛華の素直な気持ちを心の底から受け止める事はできないだろう。

卓巳は既に「執事がほしかった。それ以外に何もなし」その愛華の言葉を本音と受け取ってしまったているからだ。

何とも哀れな愛華のだろうか。

世の中にはツンデレという部類の人がいる。だがそれは漫画やアニメ、はたまた小説などだからこそ人々に受け入れられる部類である。

人と関わる中でツンは致命的とも言える。

第一印象だ。ツンで接し、その結果相手に恐い人とインプットされればそれ以上関わろうとはしないのが普通だ。そうなればデレに入る前に二人の関係が途絶えてしまう。要するに卓巳はツンの愛華に対して「キツイ人」と認識している。だからこそ愛華が卓巳に言った言葉が冗談や嘘の類ではないと認識してしまっている。

なら仮に今からデレとして卓巳に接すれば何もかも上手く収まる。という訳でもない。以前までキツイ姿を見てしまっている以上、多少の優しさや素直さを見せたところで「何か裏があるかもしれない」と逆に警戒されるのがオチである。もちろん記憶同様に例外もある。そこで「デレ期キター！」と思えるのであればお互いハッピーな結果になるだろう。

が、あいにく卓巳にそういった答えは持ち合わせていなかった。持っているのは相手を警戒する気持ちと、気づかないフリをする気持ちだけだ。

結果として愛華の照れ隠しを信用させるのには他の誰かの力を借りなければ成立しない。もちろん時間をかけてゆっくりと誤解を解く方法もあるのだが、今日という短い時間ではどうにも誤解を解く術はないに等しいだろう。

そうなれば直ぐ未来に待ち受ける卓巳と愛華にはバッドエンドの一方通行しか用意されていないことになる。

以前明海との問題で卓巳は「感情に流された恋人の結末はどうなると思う?」そう問い、愛華の答えは「バッドエンドの道しかない」だった。その質問をもう一度されれば愛華は同じような返事を返すだろう。

が、それが今の卓巳と愛華である事は言った本人にも気づいていない。

愛華は昔の過ちを断ち切り、新たな思い出を求めるために感情に身を任せて卓巳に近づいた。結果としてそれは卓巳を傷つける事になった。

よく「違った出会いをしていれば結末もまた違った」やら「君とは違った出会いをしたかった」似たり寄ったりな言葉が使われる。それは今の卓巳と愛華のためにあるかのような言葉でもある。が、それは結果が出た時に使う言葉であり、まだ結末がない卓巳と愛華には必要のない言葉なのもまた事実。

だが遠かれ早かれ愛華が今のままであればあるほど、その言葉が

近づいてくる。

要するに自分の思いを相手にぶつけられない人、我慢をして相手に合わせ続ける人ほど良い結末が用意されないのだ。

当たり前ではあるが、愛華はその全てを気づいてはいない。気づいているのは目の前に置かれている朽ち果てた椅子に座る卓巳と気まづくなる事だけだ。

愛華が悩む張本人である卓巳といえば、カナメの部屋と同様に愛華の部屋の前で呆然と立っていた。

ノックをするために上げられた手は無常にもその役割を果たせないで、ドアの直前で止まっていた。

やはり卓巳もまた愛華同様に悩んでいた。

先ほどカナメとの会話で愛華に別れを告げると宣言したのにも関わらず、直前になって迷っていた。

このままドアをノックするのは容易い。だが、会って何を話せばいいのか。愛華と全く同じ事を考えていた。

卓巳と愛華は似たもの同士だった。

自分の気持ちを相手に言えないのに対するに至ってはミリ単位もずれないほど同じだった。もちろんお互いその事に気づいてはいない。

カナメに会う時もまた卓巳は同じように何を言えいいのか分からないでいた。だが、それはカナメの力を借りて話せたに過ぎない。だが今は誰かの援助も助言もない。

卓巳の悩みは辺りの気配にも気づかないほどだった。

卓巳から少し離れた位置にカナメは西洋のドールのように立って卓巳を見守っていた。その姿は誰もが息を呑むほどの美しさなのだが、その美しさに気づく人は誰もいない。

ドアの前で立ち尽くしている卓巳の頭の中では会話の序列を並べに並べている。だが、悩んでいる時こそ気の利いた言葉が欠けるものだった。

かといって、このままドアの前で誰かの助け舟が来るのを待つほ

ど卓巳は落ちぶれてはいない。

コンコン。

だから卓巳はノックをした。もちろん頭の中では先ほど何も変わらず、何を話せばいいのか分らないでいる。

「……どうぞ」

数秒遅れてからドアの向こう、愛華の返事が返ってきた事により卓巳はもう逃げる道を失った。ノックをしなければまだ逃げ道があった。もちろんそれは愛華とカナメを裏切る形になるのだが。

卓巳はきめていた決意をよりきめ、閉ざされたドアを開けた。

## 22 パシリ 進まない話

卓巳はこの部屋には不釣合いな朽ち果てた椅子に、その朽ち果てた椅子から一メートルほどに向かい合うように置かれた無駄にゴージャスな椅子に愛華。

それぞれ自分が座る椅子に座り、向かい合ったままお互い喋ろうとはしなかった。何もない空白の時間だけが無残にも過ぎ、それは優に五分強ほど続いている。

卓巳がこの部屋に訪れてから未だに会話らしい会話が展開されていない。お互いこれほど居心地の悪い場所はないだろう。

それでも卓巳にしても愛華にしてもお互い気づいている。このままではいけない、と。

かといって思いはするもののそれを行動に移せないのはお互いが自分の素直な気持ちを表に出さず、心の奥底でとどまっているからだ。その行為がお互いを気まぐれくさせ、さらには何を言えいいのか分からない元凶だとは気づくはずも無かった。

何もない空白のこの部屋に唯一ある音、それは時計の秒針が進む音だけで、いつまで経ってもお互い喋る兆しが無い時だった。

ドアが二度叩かれる音が部屋に響く。

「どうぞ」

卓巳が部屋に入って初めて発する言葉が愛華のそれだった。

「紅茶をお持ちしました」

そう言ってお盆にティーカップを二つにケーキの乗ったお皿もまた二つを乗せてカナメが部屋に入ってくる。

これはカナメの優しさだった。

どうにもこのままでは誰かがきっかけを作る以外にお互い黙りこむとドア越しに気づき、そのきっかけを作りにはカナメがやってきたのだった。

卓巳は優しさ事態には気づかないものの、それでも嬉しさから安

堵の息を漏らす。

そんな姿の卓巳を向かい合って座っている愛華が見ないはずがなかった。愛華はその卓巳の何気ない行為を「私というのが嫌だ」と受け取り顔には出さないものの、それでも相当なショックを受けた。もちろん愛華の受け取りは実際遠くも近くもない。別に卓巳は愛華とこうしているのは嫌だとは思ってはいない。気まずいのは嫌だが、それでも愛華というのは嫌とは思ってはいない。

愛華の微妙な変化に気づいたカナメはハツとなる。

この状況において最善の策なのは変わらない。だが、卓巳の反応によって愛華が傷ついたのも事実。カナメの優しさが裏目に出てしまったのは本人にも直ぐに分かった。

卓巳自身は全く気づいてはいないのだが、卓巳はカナメがきた事によって緩みきった表情をしていた。その表情もまた愛華の気に障った。

嫌だった。卓巳のそういった表情を自分以外の誰かにするのは嫌だった。それがカナメでも嫌だった。

そう心の中で誰にも悟られないように思う。それと同時に切なさが増え上げてきた。

どうしてそういった気持ちが生じたのかは本人の愛華にも分からない。だが、卓巳がカナメに送る視線と愛華に送る視線が違っているのは薄っすらと気づいていた。

卓巳がカナメに送る視線は、優しさや信頼などの安らぎの視線だった。そして愛華に送る視線は、優しさや安らぎが半信半疑となった微妙な安らぎの視線だった。

なにはともあれ、だ。その事に知ってしまった愛華にとって気まぐさから、カナメが来た事により卓巳が愛華をどう思っているのか知った居心地の悪さに変わる。

いふなればこれは共に過ごした時間が多い愛華より、共に過ごした時間が愛華より少ないがそれでも濃い時間を過ごしたカナメの方を卓巳が選んだ。ということになる。

それを知ってしまった愛華とつてこの場ではカナメに太刀打ちできないと悟った。

軽くうな垂れる愛華を見てカナメはどうにも親切心から申し訳ない気持ちに変わった。

卓巳の気持ちこそは普段と何ら変わらないのだが、それでも気持ちの奥、本人でも悟るのに時間がかかるほど心の奥底にはカナメの存在が大きく聳え立っている。簡単にいえばカナメに今まで得られなかった物を望んでいる。さらに簡単にいえばカナメに優しさ、安らぎ、落ち着き、そういった部類の物を望んでいる。

卓巳は別にカナメに恋心を抱いている訳ではない。望めるなら、望んでいいのなら、何でも話せる姉といった物を望んでいた。それを愛華は恋心と勘違いをしている。

「……そこに置いといてください」

少しの沈黙の後に愛華が呟くように告げる。その愛華の声からは嘆きと切なさが発せられていた。

そこでようやくカナメの表情が変わった。常にポーカーフェイスなのだが、この時ばかりは焦りが見られた。カナメが表情を変えるのは実に稀だ。

カナメのポーカーフェイスが崩れるのには条件がある。

一つ、大切な人が傷つく姿を見た時。

二つ、自分のせいで相手が傷ついた時。

明らかに今は後者となる。

いかに卓巳にスカートをめくられても平常心に対応したカナメでも、焦りからくる心理状態まではどうにもセーブできない。もちろんそれはカナメに限らず、大抵の人がセーブできずにオロオロするだろう。

カナメは取り敢えずこの場から離れる事が何よりも重要だと悟り、紅茶の入ったティーカップとソーテーを机に置き一礼をする。

そのまま礼儀正しくドアの方に向かうものの、どうにも卓巳とすれ違う間際に見てしまった悲しみに満ちた顔が脳裏に焼きつき離れ

なかった。それは主である愛華の気持ちを気づかないフリをしてまで部屋に残留するほどの事だった。

だが、辞める身である卓巳とこれから主であり続ける愛華、この二人を天秤にかければ愛華を優先するのが当たり前となる。

「……私は甘いですね」

そう、誰にも聞こえないようにカナメは呟く。

結局のところ天秤にかけようがその意味は場の雰囲気と自分を頼りにする人がいるのなら覆すのがカナメである。

ようはいかに卓巳と愛華に会話ができるように仕向けるのか、いかに二人にとって一番良い結果が残れる状態で別れられるようにするのが重要になる。だが、本当に別れに良し悪しがあるのかは全く謎である。いや、別れ自体が悪い結果が導いた答えなのだからカナメがどう行動を起こしても悪い結果にしかないのかもしれない。

カナメは体を反転させて卓巳たちの元に静かに戻ると愛華の背後に立つ。

「愛華お嬢さまはどうなされたいのですか？」

無表情のまま、同じ体勢で、愛華の表情を見据えるように、カナメは呟く。その呟きは愛華に届くものの、ほんの少しだけ離れた卓巳には聞き取れなかった。もちろんカナメは愛華だけに伝えるのが目的で、卓巳に聞き取られないように配慮したのだ。

「私は……」

愛華は口ごもる。

正直になれない自分をもどかしくもあり、それによって自己嫌悪を味わった愛華なのだが、今まで誰かに本音や弱みを見せないでいた。だからこそ今更どうしようもできないでいたのだ。

人は慣れている物、生活でも性格でも急に変えられるものではない。時間をかけてゆつくりと他の物に変えるのが周流となり、それは愛華も同じだ。もしかしたら愛華がこの場で素直になることによって卓巳の考えも変わるのかもしれない。だが、それを愛華自身が



分かっていたとしても中々行動には移せない。たった一言「辞めな  
いで」そんな簡単な言葉を発するにしても同じだ。

カナメは大体十秒ほど愛華の答えを待った。だが、結局愛華は黙  
り込んだまま答える様子がなかった。

呆れる様子もなくカナメは卓巳に視線を送る。

「卓巳さん、申し訳ありませんが、朝倉さんに今すぐ仕事を切り上  
げるようにお伝えをお願いします。先ほど伝えるつもりでしたが、紅  
茶に気をとられて忘れてしまいました」

頭を深く下げてカナメは言う。

実際のところ電話一本で済ませられる。それでもまだカナメには  
愛華に伝え、その答えを聞かなければならなかった。もちろん卓巳  
がそれについて断る選択肢は用意されていないと踏まえての頼みだ  
った。

「分かりました」

案の定卓巳はそう言い残して椅子から立ち上がりドアの方に向か  
う。

卓巳はこの場から一時でもいいから離れたいと思っていた。卓巳  
が想像した以上に気まずく、どうにも一人で考える必要があつたか  
らだ。その事にカナメは気づいていた。だからこそ告げたのだ。

当たり前ではあるが、カナメが伝え忘れるなどの失態をしない。  
簡単に言うならば空を利用したのだ。

カナメはドアに歩みゆく卓巳の背中を見つめ、卓巳が部屋から出  
たのを確認してから愛華に向き直る。

その時のカナメの瞳には不安そうな表情の愛華が映っていた。

## 23 パシリ すずらん

「もう一度お聞きします。愛華お嬢さまはどんなさりたいのですか？」

愛華が豪華な椅子に、その後ろに立っているカナメ。そして愛華の向かいには誰も座っていないタダの小汚い椅子。

カナメが言った通り二度目の質問だった。一つ違うとするならば、一回目は小汚い椅子に卓巳が座っていたため声のボリュウムを落とされていたのだが、今はハッキリと言うほどの違いぐらいだった。

「私は……」

先ほど同様に愛華は口ごもる。

卓巳が部屋から出て行く間もカナメにどう答えるべきか考えていた。それでも愛華には答えが出てこなかった。できるなら「辞めないうで」と言いたい、そう思う以外は何も。

「……」

「……」

カナメは愛華の返事を待ち、愛華はどうするべきなのか考え、静寂が辺りを包む。

その静寂の時間を打ち破ったのはカナメだった。

「私は卓巳さんには辞めてほしくないと思っています」

愛華がどう思っているのかカナメは察している。だからこそ愛華の本音を聞くためにそう言ったのだ。もちろんカナメはポーカーフェイスで、その言葉に信憑性が欠けるのは致し方ない。

「……」

「愛華お嬢さまはどう卓巳さんを思っているのかは私には分かりません。私は卓巳さんの事はとても大切な方と思っています。私個人の意見を述べますと、これから愛華お嬢さまと卓巳さん、そして私の三人で一緒に仕事をしたいと思っています。こう思う私は我が侘でしょうか？」

「……」

「愛華お嬢さまも気づいているのではありませんか？」

カナメは責め方を変えた。一向に喋ろうとしない愛華に痺れを切らしたからだ。

\*

\*

一方その頃卓巳といえば、中庭で楽しそうに仕事をしている空の背中を見つめながら呆然と立っていた。

カナメに言われた通り「仕事を切り上げて休むように、だって」と言うのは簡単だ。だが、そう言ってしまえばまた静寂に包まれた愛華の部屋に戻る事になる。だから卓巳は今の時間をできるだけ伸ばしたいと思っている。

が、その思いははかなく終わりを告げた。

「あれ？ 卓巳くん何しているのですか？」

卓巳の存在に気づいたからだ。

空は軍手をはめた右手にスコップを持ちながら怪訝そうに卓巳を見る。今更なのだが、メイド服に軍手とスコップというのは実にシユールだ。

もう少しこの時間が続けばよかったのに、そう思いながら卓巳は肩を竦めながら空に近寄る。

花壇の側でしゃがむ空の隣に卓巳も一緒にしゃがむ。

「この花なんて名前？」

そう言っ指した先には白く垂れた花がある。

これといって花に興味がある訳でもない卓巳だが、これほどまで鍛錬に整えられた花壇と花に少しでも興味を抱いた。

空は嬉しそうに胸の前で手を打つ。

「すずらんです。花言葉は純潔と謙遜です。本当は五月に咲く花なのですが、ビニールハウスで育ててここに植えなおしました。それでもこの気温に合っていないので数日もすれば枯れてしまつかもしれ

ません……」

実に残念そうに空は肩を落とした。

「それなら別に花壇に植えなかなければいいじゃない」

「できるなら私もそうしたいと思っています。ですが、これも仕事ですから仕方ありません」

「そう……それはまた可哀想に」

卓巳はすらんを指でピンとはじく。すらんは揺らぎ、何事もなかったかのように元の位置で止まる。

「お花を苛めちゃダメですよ！　とっても可哀想ですー！」

「あつ、悪い……」

「はい、分かっていたただけたのならそれで結構です」

と、ニツコリ空は微笑む。

「どうして休みの日に仕事をするわけ？」

先ほども卓巳は同じ質問を空にしている。その時の答えも卓巳は覚えている。それなのにどうして同じ質問をするのかといえば、違った答えが返ってくるのかもしれない。ではなく、根元からその理由を知りたかったからだ。

「さつきもその質問しましたよね？　答えも一緒です。お花さん達のお世話がありますので」

「別に他の誰かに任せてもいいじゃない。そこまで苦勞する理由がどこにあるの？」

「それは違います」

空は真剣な眼差しで卓巳の瞳を見る。一瞬だがその真剣な眼差しを卓巳は逸らしたが、直ぐに空同様に瞳を見据える。

「私は今までお花さん達のお世話を苦勞したと思った事はありません。私の意志でお休みの日もお花さん達のお世話をしているのですよ。それに私はこうしてお花さん達のお世話ができてとても嬉しいです。だから私は毎日がとても充実しています。卓巳くんだって短い間でしたが、愛華お嬢さまが好きだから仕事をしていたのではないのですか？」

「俺は別に俺はお嬢が好きだから仕事をしていた訳じゃない。する以外に選択肢が無かったからだ」

「それならどうして辞めるの？」

「お嬢に執事がほしかった。それ以外に何も無い。そう言われたからから仕事事態が馬鹿らしくなったからかな」

「それはつまり卓巳くんは愛華お嬢さまを特別視していたから、そう言われて空しくなったのでしょ？」

「特別視とまではいかないけど、一時は大切な人と思っていた」

「私は愛華お嬢さまの事はよく知りません。こう言った事をいうのは叱られるかもしれませんが、私の知る愛華お嬢さまは素直ではないと思います。私だっと思ってている事を素直に誰かに言えるほど器用な人ではありません。きっと愛華お嬢さまは照れ隠しにそう言ったのだと私は思いますよ」

空はそう言っつて卓巳に微笑む。

卓巳もそれについては薄々感づいていた。それでも確信がなかった。あるのはそう合っつてほしいという願いと愛華の表情だった。あくまで前者は卓巳の願いであるため無視してもいいのだが、後者は無視するには致し方野暮だ。

愛華が「執事がほしかった。それ以外に何も無い」そう言った時、愛華の視線の先には見慣れたアンティークの家具が映っていた。

嘘の答えに卓巳の顔を直視できなかったせいだ。

それでもその時の卓巳にはどうして愛華がそういった行為をする意図が掴めず、その結果として辞めると告げた。もし仮に卓巳が行為の意図を掴むことができたのなら、違った結末が待っていただろう。

「……」

かといって今更どうこう空が言おうが、卓巳の思いは変わらない。ただ辞める前に手品の種明かしでもされた程度だ。

結局のところ素直じゃない二人が向き合っつても何も良い結果にはならない。二人のうち一人が妥協するか、その場だけでも素直にな

れば良い結果になるだろう。だが卓巳と愛華は今更と思う気持ちが強く胸のうちにあった。

今更辞めたくない。

今更辞めないで。

と、お互い答えは出ているのだが、その気持ちを素直に受け止めていないのだ。

「……もう……いくよ」

受け止められないからこそ卓巳は逃げるようにその場から立ち上がる。いや、逃げるように、ではない。実際逃げている。自分の素直な思いからも、空からも。

空は「そうですか」と呟き、去りゆく卓巳の背中を見つめた。

卓巳が中庭から姿を消したのを確認してから、

「もっと素直になればパッピ―エンドなのにな」

と、目の前のすずらんに言う。

## 24 パシリ 見慣れた天上

卓巳が空に用件を告げて部屋に戻っても静寂は変わらなかった。当たり前といえば当たり前である。

無言を決めているのか、カナメは愛華の背後に蠟人形のように立ち、少し冷めた紅茶が二人を見守るかのように机に置かれ、それ以外はいつも見慣れた部屋だった。唯一の音は時計の秒針が動く音だけだったが、二人にとってその音さえ気まずさに変えていた。

どちらかが話を切り出さなければ無言は打破できない。それは二人とも分かっているのだが、どうしても切り出せない。もちろん理由はプライドと気まずさだった。

卓巳は視線だけを愛華に移した。

目が合う。

そらす。

その繰り返しだった。

だが、どちらかが「あ」でも「い」でも「し」でも「て」でも「る」でも一言を口にすれば違うのかもしれない。あるいは今までのように沈黙が続くかもしれない。ただはつきりする事、それはどちらかが一握りの勇気さえあれば事はハッピーエンドを迎えるということだ。たった一言「一緒にいたい」ただそれだけ。とても簡単で、とても難しい一言。それでも今の二人には到底無理な話なのかもしれない。

ため息でもつきたい表情を浮かべ、カナメはようやく口を開いた。「……私は卓巳さんとこれからも一緒に仕事をしたいと思っています」

卓巳はハツとなる。不意打ちだった。

「お、俺は……」

何を考えているのか分からない瞳に見つめられ、卓巳はすぐに視線をそらした。怖かったのだ。全てが悟られていそう。

「俺はもう……無理、だ」

途切れ途切れになりながらも答えがそれだった。

結局のところ卓巳はプライドを捨てられなかった。いや、男の意地というやつだろうか。

かくして卓巳の無駄に高いプライドと、どうしようもない意地で事はすんだ。

好きな異性に高いポイントを持たせるには手っ取り早い方法が一つある。言うまでもなく、褒めちぎる事だ。褒めてホメテほめちぎる。逆のパターンを思い浮かべれば想像はつくと思う。異性から、男性なら「カッコイイね!」女性なら「可愛いね!」そう言われて不愉快な思いをする人はいない。むしろ表面上には出さないものの、内心では嬉しい気持ちが芽生えるだろう。それでも勘違いしてはいけない。それはただのきっかけで、そこからどうつなげるかによってハッピーエンドになるのか、はたまたバッドエンドになるのか変わる。中には「そんな恥ずかしい事言えない!」そう思う人もいるだろう。だが、恥ずかしくても言った方が近道になるのは明白だ。ただ注意事項が一つだけある。それはニコニコしながら、あたかも社交辞令かのように言っても信憑性に欠けるということだ。言う方からすれば本音かもしれないが、言われた方は眉唾物である。

さて、話が少し脱線したが、用は今の卓巳と愛華がまさにそれだった。典型的な恥ずかしがりやだろう。「一緒にいたい」「辞めないで」「俺の事を見てくれよ」そんな事口が裂けても言わないだろう。ようは一步踏み出せなかったのだ。

卓巳は特に荷物という物がない。それは荷物をまとめる暇もなく家を出たからだ。どっちにしろ卓巳の私物が愛華の部屋に置かれる事は万に一つもなかっただろう。

「どうしてもお辞めになるのですか?」

愛華の部屋の前でカナメは悪あがきをする。



少し寂しそうに瞳のカナメを卓巳は見れなかった。見てしまうと  
ついつい「もう少しここに居たい」と言ってしまうからだ。

卓巳はカナメに一礼をして背を向けて玄関に向かって歩き出した。  
その後姿はどこかもろそうで、ほんの少し力を入れて押してしまえ  
ば倒れそうなほどだった。自分のせいで家庭崩壊寸前の父親にどこ  
か似ている姿だった。

その小さすぎる背中が見えなくなるとカナメは両手を壁に押し当  
ててよしかかる。この場を誰かに目撃されれば一騒動になるだろう。  
カナメのそういった姿は愛華でも見たことがないからだ。

それでも少しの間だけだった。少しだけ考えにふけて卓巳を追っ  
た。カナメは最後の最後に卓巳を実家まで送ろうと思って。

\*

\*

すごく久しぶりに自分の部屋の天上を見た。そんな事を卓巳は思  
っていた。

辞めたのはいいが、家に帰る手段がなかった卓巳にとってカナメ  
の申し出は実にありがたく、お言葉に甘えて家まで送ってもらった  
のだ。卓巳が何食わぬ顔で家に帰ってきたのを見た卓巳の父である  
浩史は、顔を青ざめてその場に崩れ落ちたのは言うまでもない。が、  
それも今更の事だ。浩史は特に卓巳の事を攻めなかった。浩史にも  
卓巳を無理やり執事にした事について罪悪感があつた。その償い  
にしてはかなり小さいが、攻めなかった。

漫画やドラマでは担任の教師が退学届けを隠し持っていた。とい  
う展開があるのかもしれないが、現実はそのままで甘くはない。もち  
ろん退学した事になっているし、今では晴れて時代の最先端である  
二トになった訳で、暇をもてあますお嬢様となんら変わりない生  
活になるうとしている。ここは忠実にティーカップ片手に鏡の向こ

うの自分に自慢話の一つでもしようかと卓巳は企んだ。

## 25 パシリ 意地っ張りな男の子

執事を辞めてから一週間ほど過ぎた頃、卓巳は廃人と化していた。突然すぎるが、これが事実なのだから仕方がない。では卓巳の一日の流れを大まかに説明しよう。起床すると何かをするわけでもなくボーっと天井を眺める。朝食を食べていると時々意識がなくなり、ハツとする。なお昼食も夕食も同様。お風呂に入ると、口を大きく開けてボーっとしている。自由時間は読書や暇つぶしに勉強などをしているが、ふと気がつくと以前の忙しい日々の妄想。これを廃人という以外に何というおうか。卓巳の両親さえ息子を見るのが辛いときている。

特に何をするわけもなく、卓巳は近くの公園のベンチに座り、ボーっと空を眺めていた。近くでは近所に住んでいる子どもが楽しそうにキャッキヤと騒いでいるが、今の卓巳には全く耳に届いていない。

時々ビクツと体を震わせ、近くで遊んでいる子どもにも興味を植え付けるが、それ以外は変人としきれないようがない様である。仮に卓巳の隣にカップルが座っているとすると、きっとヘビーなデートになるだろう。幸いな事に卓巳の隣には誰もいなかった。

そんな廃人と化している卓巳の隣に、学校の制服を着込んだ一人の女性が座る。手には不可解なキャラクターがプリントされている缶を手をしている。

「久しぶりに西沢くんに会ったけど、相変わらず間抜けな顔をしているのね」

女性はそんなサド的な発言をする。

かといって今の卓巳を罵ろうが、当の本人である卓巳の意識は遠い彼方にあるわけで、全く効果はない。こうなってしまったら罵った張本人がバカらしくなるだけである。

「……」

案の定卓巳は無言のままボーッと空を見るだけだった。

「ちよつと！ 無視しないでよね！」

卓巳の反応にイラッとした女性は卓巳の体を揺らしながら大声を上げる。

「……」

それでも卓巳の意識は戻らない。

「ちよつとー!!」

さらに大きく揺さぶり、さらに大きな声で怒鳴る。

そこでようやく卓巳がハッとし、意識が覚醒する。それと同時に今の状況を飲み込もうとあたりをキョロキョロする。

「……明海の友だちの少女Aが……」

さもどうでもいいように呟き、関わらないでくれと言わんばかりに嫌な顔をする。

明海の友だちの少女A……梨乃はプルプルと体を振るわせる。当たり前だが、そこまで言われて怒らない人はいないだろう。

「誰が少女Aよ!!」

さつき以上に怒鳴り散らし、公園中の視線を集める。母親の交流の広場である公園で、そのような光景を見ればかつこの話のネタになり、案の定「どっちが浮気したのかしら？」と、キャピキャピした話題で盛り上がっている。

「どうしてここに少女Aが？」

「もうっ！ そこをスルーしないでよ!!」

「そもそも学校はどうした？ 今の時間だとまだ授業中だと思うけど……」

「人の話を聞きなさいよね!! ……はあ、もう少女Aでいいわ。今日は学校の都合で午前中だけなの」

卓巳が話を聞かない事に梨乃は諦める。そこで「そういえば西沢くんの名前いつてなかった」と気づく。今の梨乃にとって、どうでもいい話になる。

「そうか……」

「そういう西沢くんは何をしているわけ？」

「何って……今や流行の最先端のニートだけど、何か問題でもあるのか？」

「問題しかないでしょ。ってかさ、学校辞めてからずっと？」

「いや、一週間ほど前からだ。その前まで金持ちの道楽に付き合っていた」

梨乃は意味不明な発言に「？」マークを頭にうかべる。

「あの……さ、話変わるけど、あれから明海に連絡した？」

その途端に卓巳の表情がみるみるうちにブルーになる。今の卓巳にとって愛華と共に過ごした時間のときにあつたさやかな出来事でもNGワードとなっている。

卓巳は大きなため息をする。それから明後日を見て「そんな事もあつたな……」とかいいそうな表情で現実逃避する。

そんな卓巳の異変に気づかない梨乃は追い討ちをかけるかのよう

に、  
「明海寂しがっているよ？ ほら、携帯かしてあげるから連絡してみれば？」

そう言いながらキーホルダーが何個もついている鞆から携帯電話を取り出す。携帯電話を卓巳に差し出し、そこで梨乃はギョツとする。

「ちょっと落ち着こう。何で泣いているわけ？」

そう、卓巳の頬には一粒の滴が流れている。

「連絡したところで何て言えばいい？ 『俺って今ニートだけど、それでもいいかな？』とか言えばいいのか？」

「別にそんな事言わなくていいと思うよ。ってかさ、それは全世界のニートに対する挑戦になるから、あまりニートニートとか言わない方がいいと思うけど……」

「ならさ、『今の俺は色のないパレット……無色だけでもいいかな？』とか言えばいいのか？」

「意味不明だし……」

もう梨乃は卓巳の異常に驚きを通り越して呆れていた。  
だがこうなった卓巳は止まらない。例えるなら急な坂を一輪車で  
爆走するようなものだ。

「そつだよな……。今の俺はどう転んでも悪い結果にしかない  
よな。ははっ、これじゃあ、お譲も明海も愛想尽かすか……」

そしてしおれた花のようにシヨンボリする。

取り敢えず今の梨乃にできる事は一つ「今の西沢くんは少し優し  
くすれば簡単に落ちるよ」と明海にメールをするぐらいだった。

そんな不可解な会話を繰り返している卓巳と梨乃が座っているベ  
ンチの後ろ、道路の脇に真黒のリムジンが停車する。こんな平凡で、  
高級住宅街とはお世辞にも言えない地区にリムジンは場違い以外に  
ない。

西森カナメ。

場違いなリムジンから出てきたのはカナメだった。

カナメは何の迷いもなく卓巳に近づく。

公園でいる子どもの保護者達は何事かとヒソヒソする。

卓巳が執事を辞めてからの一週間、ずっと卓巳の事を考えていた。  
空にも相談し、その結果としてカナメが仲裁として卓巳を連れ戻す  
結果にまとまった。

「卓巳さんお久しぶりです」

礼をして卓巳を見据える。

その場に居合わせた梨乃は新手と卓巳の関係が気になるものの、  
その服装がどうにも本場の物としか思えず困惑する。

「カナメさん……俺に何の用ですか？」

さっきまでとは打って変わって卓巳は落ち着いていた。卓巳はカ  
ナメが来る事を察していた。いうなれば一週間も妄想した結果から  
可能性がある結末としてピックアップしていたのだ。

「卓巳さんを連れ戻しにきました」

「それはカナメさんの意思ですか？ それともお譲の意思ですか？」

「両方と言っておきましょうか。卓巳さんが執事を辞めてからお嬢

様は落ち込んでいます。それをどうにかするのもメイド長の務めです。こういった言い方をすれば私が卓巳さんに、お嬢様の気持ちを元に戻すただけに連れ戻しにきたとお思いでしょうが、私も卓巳さんと一緒に仕事をしたいと思っています。こう言うのはおかしいと私自身も思いますが、私は卓巳さんに期待しているのです」

「期待？」

「ええ、期待です。卓巳さんとは短い付き合いです。執事として目に余る行動もありました。それでも卓巳さんのおかげで今まで見たことのないお嬢様の表情を見ることができました。ですから私は卓巳さんに期待をしています」

「俺に期待するのは期待はずれですよ。きっと気のせいです」

「……卓巳さんは寂しくないのですか？」

卓巳は表情には出さなかったものの、ドキツとする。今までの言動から卓巳が寂しいと思うのは明白であり、そして愛華に対する気持ちも日々高ぶっていた。

そんな卓巳とカナメのやり取りを真横で見ている梨乃は、近いようで遠い話だと、ただただ盗み聞くだけだった。もちろん卓巳とカナメの関係を聞けるものなら聞きたいという気持ちはある。だが、それを今聞くわけにもいかず、あくまで傍観者の立場をキープしている。

カナメは淡々と続ける。

「お嬢様や私、朝倉さんは卓巳さんが辞めることを寂しいと思っています。お嬢様は最近あまり学校の方へ行っておりません。どうしてかわかりますか？ 私が思うに、お嬢様は卓巳さんがいつ戻ってきてもいいようにと、必要最低限は屋敷から出ないのだと思います」  
「それこそ気のせいですよ。あのお嬢がそんな事をするはずがありません」

そう断言するものの、淡い期待をしてしまうのが人というものであり、この一週間廃人として生活してきた卓巳である。

カナメにそう言うが、内心では妄想で膨らませた脳内が活発に色

々なシユチュエーションを生み出していた。このまま承諾して再び執事として働く道、プライドから断る道、車の中から愛華が出てくる道、色々なパターンが妄想として思い浮かんでくる。

「では邸に戻ってくるつもりはないのですか？」

「……」

卓巳は答える事ができなかった。一言「戻ります」そう言えば問題は解決なのだが、その一言がどうしても言えなかった。それで全てがまるく収まるのにも関わらず。

数秒間の沈黙後、カナメは「またきます」とだけ告げ、その場を後にした。

残された卓巳は俯き、梨乃はあくまで傍観者なため黙り込んでいた。



## 26 パシリ 元彼女

カナメと別れた後、およそ20分間は地面が友だちといった具合にうつむいていた。その隣では居心地が悪そうに梨乃が座っている。時折「うつ」「あつ」と、声を漏らす。今の卓巳に何と答えればいいのか梨乃は分からず、居心地が悪そうに卓巳の横顔を盗み見ていた。

やれやれといった感じに梨乃は携帯電話を鞆から取り出す。やはり女子高生といったところなのだろうか、ものすごい速さでメールを打ち込む。

狩野明海。

名前の欄には梨乃の友だちであり、卓巳の彼女だった明海の名前が携帯電話のディスプレイに映っていた。

梨乃はメールを打ち終えた後、静かに鞆の中にしまった。

公園で遊んでいる子どもの母親達は、卓巳たちをコソコソと見ては話のネタにしていた。内容としては第三者の登場についてだ。そう、カナメとの関係をそれぞれの妄想をして話している。主にピンク色の妄想だったりする。

「……あのさ、申し訳ないけど、私帰ってもいいかな？」

「そうだな。俺も帰るか」

「いや！……ちよつと待った。西沢くんはこのまま座っていなさい」

「どうして？俺もそろそろ帰りたい」

「別に理由はないけど……」

「そうか。なら俺は先に帰るな。長い時間付き合ってくれてありがとう。少女Aって結構優しいな」

「誰が少女……。まあ、いいわ。それより西沢くんはここにいなさい。私は帰るけど」

梨乃は理由を告げず、ベンチから立ちあがる。最後に念を押すよ

うに「言っておくけど、帰ったら絶対に後悔するからね」そう言い残し、やれやれと言いたげにその場を後にした。

どうして梨乃がそんな事を言うのか全く意図が掴めず、卓巳は言われたとおりにベンチに座り直す。卓巳が家に帰っても、居心地の悪い思いしかしなく、それなら梨乃の言われたとおりにベンチに座り直したのだった。

卓巳は改めて公園を見渡した。鬼ごっこでもしているのか、元気に走り回る子ども。その子どもの様子をチラチラと気にしながらも、楽しそうに雑談に花を咲かせる子どもの母親。とても平和な光景だった。元気に走り回る子どもを見てみると、卓巳は「自分にもこんな頃があつたのか」そう思う。

それからほどなくした頃だった。卓巳に一人の女性が近付く。足音に気が付き、卓巳がその方を見れば、そこには卓巳が以前付き合っていた元彼女 狩野明海がそこに立っていた。

卓巳はそこでようやく梨乃が引き留めようとした理由が分かった。それでも卓巳にとって、この場合は何とさえいいのか知らなかった。仮にも一度は愛した人なのだが、それも過去の事で、今となつては気まずい関係である。

「……」

「……」

卓巳同様に明海もかける言葉を知らず、二人して黙る以外の方法を知らないようだった。

そして第四者の登場に、外野で井戸端会議をしている子どもの母親達の会話が弾む。卓巳の存在によって、本日のネタには困りそうにないようだ。

先ほどまで梨乃が座っていた場所に、明美は無言で腰を下ろす。言うまでもないが、明海は梨乃に呼び出されたのだった。先ほど梨乃は「今すぐ学校の側にある公園にきて！」そう明海にメールを送ったのだった。

実は以前から明海は卓巳に会いたいと思っていた。それは隠しよ

うのない事実で、何度か卓巳の家に行こうかとも思っていた。それでも中々決心がつかず、今に至る訳だった。だが、いざ本人を目の前にすると、こうである。二人とも黙ったまま、時だけが過ぎていく。

どちらかが勇気を出して一言何かを言えば、もしかしたら話題が弾む……、訳でもないが、それでもきつかけにはなるだろう。

「……たつくん。あのね」

「たつくんって誰!? いつも卓巳だったよね!? ……いや、なんでもない。忘れてくれ」

せつかく明海が勇気を振り絞って声を出したのに、卓巳は異変に突っ込みをいれ、そのせいで再び気まずい空気が流れる。

バカな事をしたと、卓巳は唇をかみしめる。

そして再び無言の時間が過ぎた。

実際のところ、明海は今までに卓巳を「たつくん」と呼んだ事は今の一度もない。ではどうして突然「たつくん」と言い出したのだろうか。答えは簡単だった。心の中ではいつも「たつくん」と呼んでいたから。学校でのイメージ、卓巳からのイメージ、そして何より自分が可愛らしく「たつくん」と呼べるような人ではない、そう知っているから心の中限定での呼び名だった。

二分ほど全く会話がなく、そろそろ子どもの保護者達の興味が薄れていく頃、次は卓巳の方から会話を持ち出した。

「……あ、なのな。突然どうした?」

たったそれだけの、何気ない一言だった。

「えっとね、梨乃からメールが来て……」

「梨乃? ……あー、少女Aの事ね」

「少女A?」

「あつ、いや、こつちの話」

「……卓巳さ、前と少し変わったね」

「変わった?」

「なんかね、雰囲気が少し変わったような気がするよ。学校やめて

から何があつたのか話してよ」

「……ああ」

卓巳はこれまでの事を話した。愛華が通っている学校の事、入院中に出会った亜里沙の事、邸で働く花がとても好きなメイドの事、無愛想だけど優しいカナメの事、そして一番身近にいた愛華の事。順を追って卓巳は話した。

今までの出来事を話している卓巳はとても楽しそうだった。それが卓巳の話を聞いている明海が感じた事。

「そんなところかな」

全ての話が終わった事には、先ほどの気まずい空気はなくなっていた。卓巳は楽しそうな表情で、明海もそんな卓巳につられて嬉しそうな表情をしている。

「そっか……。私の知らないところで色々な事があつたの。ちょっとお嬢様に妬けちゃうな……。ねえ、少し歩かない？」

「どこに？」

「目的のない散歩だよ。嫌かな？」

「……ん、行くか」

そして二人は並んで歩きだす。

二人にとってこの辺りの地理は少し詳しい。学校の近くだけあり、付き合つて間もない頃は、二人肩を並べて遊びに行ったりしていたからだ。それも今では良い思い出だろう。

目的のない散歩のため、卓巳が曲がり角を右に行けば、何も言わずに明海も右に行く。明海が曲がり角を左に行けば、何も言わずに卓巳も左に行く。

二人の会話は主に思い出話だった。下校途中に立ち寄った本屋だったり、雑貨屋だったり、ファミレスだったり、その時に何があったのか、面白楽しく二人で話しながら歩いていた。

ほどなくして学校の近くにある商店街についた。学校の近くだけあり、卓巳にとっても明海にとっても、よく知っている制服が目立つようになる。明海は才女として学校では有名人だった。そのため

学校の生徒から注目を浴びる。そうなれば隣にいる卓巳もおのずと注目を浴びる。そのせいだろうか、至る所から「ほら、狩野さん。隣にいるのって……、もしかして前に学校やめた彼氏の西沢くんだっけ？　まだ付き合っていたみたいだね。ちよつと意外」と、遠からず近からずそんなような話が至る所でされていた。

もちろんだが、そこまで大きくない商店街なため、卓巳と明海にもその話題は耳に入る。二人とも居心地が悪そうに、お互いの顔を見て苦笑いをする。

そんな時、商店街の入り口に一台の車が停車した。商店街に不釣り合いな車がそこに停まっていた。その車から一人の女性が出てくる。後ろには黒いスーツを着込み、体格のいい男性が数人出てくる。さながら映画に出てくるボディーガードのようだった。

\*

\*

ほんの少し前の話。

卓巳が邸に戻るつもりはなく、連れ戻す事に失敗したカナメは、邸に帰る車の中で考え事をしていた。車の中には数人の男性がいて、全員が黒いスーツを着込んでいた。本来彼らの仕事は愛華のボディーガードなのだが、カナメが卓巳の所に行くと知り、無理を言って数人だけついてきたのだった。

ボディーガードと言っても、四六時中一緒にいる訳ではないのだが、邸で働く他の人達よりかは愛華の側にいる身である。そのため愛華の変化にも少し敏感である。仕事内容を忘れ、カナメについてきたのだった。

「西森様。西沢様は何と言っておられたのですか？」

黒服の一人がそう言う。以前一度だけ、入院中の卓巳と関わった事がある人だった。

「何も言っていないんですけど、戻るつもりはないようです」

「ではこのまま帰るのですか？」

「……そうするしか方法はないでしょうね」

「少しかだけ考えてから、カナメはそう言う。内心では苦虫を噛んだかのような気持ちだった。」

「ですがこのままでは」

「何の解決にもならないのは分かっています」

「でしたら、ここは強引に連れ戻すのはどうでしょうか？」

「と、いいえますと？」

「愛華お嬢様にしても、西沢様にしても、お互い意地になっている訳ですよ？ それでしたら強引に二人を会わせてみてはいかがでしょうか？」

「お互い意地になっているのでしたら、会ったところで何の解決にもならないと思います」

「二人が会わない事が解決にならない一番の原因だと私は思います」

「……それもそうですね」

カナメは車内に付属されている電話をとる。呼び出し音などは全くない。その電話は運転手に用件を伝えるために存在する電話だからだ。

「卓巳さんの所に行ってください」

そう短く告げると、相手の返事を聞かないまま受話器を置く。

ほどなくして走ると、車は商店街に停車した。どうして迷いもなく卓巳の居場所が分かったのかといえば、さすが何でもこなすハイスペックなメイド長とでも言うておこう。

## 27 パシリ 気づく思い

「卓巳さん」

居心地の悪い商店街を抜けようと、卓巳と明海が歩いていると、卓巳の名前を呼ぶ声が響く。誰が呼んだのかは言うまでもなく、カナメだった。卓巳が振り返ると、その後ろに控えている黒服たちは一例する。

元から注目を浴びていた二人だが、カナメと黒服の登場で更に辺りがざわめく。

「ねえ、卓巳。この人達だれ？」

明海は不安そうに卓巳の後ろに隠れ、消えそうな声で問いかける。「さっき話したカナメさんと、お嬢のボディーガード。……それで、次は何の用ですか？」

そう簡潔に目の前にいるメイドと黒服の説明をすると、卓巳は本題を切りだす。

「先ほどと同じです」

「俺は……、戻りませんよ」

卓巳はカナメの顔を見て言えなかった。視線を地面に移し、今にも消えて無くなりそうな声で言った。そんな卓巳を明海は怪訝そうな顔で見つめる。

それもそのはずである。先ほどは実に楽しそうに、目の前にいるカナメや愛華の事を話していたからである。それなのに、どうして「戻りません」と言うのか理解できなかった。

数秒だけ卓巳とカナメを交互に見て、明海はハツとする。卓巳が意地になっているのだと、理解したのだった。卓巳の事をよく知っている明海にとって、とても容易い問題だった。

「……卓巳」

「……」

「……卓巳！」

名前を呼んでも聞いていない卓巳に、明海は大声を出す。

突然の出来事に辺りが静まり返る。

「えっ？ どうした？」

「どうしたじゃない！ この頑固者。さっさとお嬢様の所に行きなさい」

「いや、俺は……」

「本当はお嬢様と仲直りしたいのに、いつまで意地はっているつもり？ お嬢様が謝るまで会うつもりがないの？」

「……」

「さつきは楽しそうにお嬢様達の話をしていたのは何だったの？ このままだったら、前の私と卓巳みたいになっちゃうよ。それでもいいの？」

以前の卓巳と明海。その言葉に卓巳は心が締め付けられる思いをした。関係を修復しようにも、どうしてもできない状態。それが二人の関係だった。

「俺は……」

「今行かなかったら、もうカナメさん来てくれないかもしれないよ？ 私だったら絶対に後悔すると思う……。私は卓巳との関係に後悔している。もっと話せばよかった。もっと卓巳の気持ちを知ればよかった。……私はもう後悔したところでどうにもならないの。卓巳はお嬢様とそうなってもいいの！？」

「……」

何も言わない卓巳の背中を明海は押す。

「ほら、行ってきたさい。きっとお嬢様も卓巳と仲直りしたと思っているよ」

「それで」

「はつきりしなさい！ ……自分の気持ちに素直になろうよ。何なら私が卓巳の気持ちを今いってあげましょうか？」

「俺の気持ち？」

「そう。卓巳の気持ち。……本当はお嬢様の事が、大好きでたら



ない気持ち。本当は前と同じ関係に戻りたいけど、傷つくのが嫌で逃げている気持ち。本当はお嬢様に迎えに来てほしい気持ち。できる事なら自分の気持ちを伝えたいけど、拒絶されるのを怖がっている気持ち。何より今すぐお嬢様に会いたい気持ち。どう、何か違う？」

「ちが！……違うない」

卓巳は一瞬だけ「違う！」と言いそうになる。それでも数秒だけ間を置き、本音を言った。それは明海の瞳が真剣で、はぐらかそうとする自分が情けなく思えたからだ。

「そう、ならお嬢様のところに行きなさい」

そしてもう一度卓巳の背中を押す。

卓巳は今にも消えて無くなりそうな声で、「ありがとう」と呟いた。返事の代わりに、明海は笑顔で返した。

もし明海が傍観者となっていたのなら、愛華に会っても卓巳は意地でも自分の気持ちを伝える事はなかったのかもしれない。そうなれば、また違った未来　卓巳と明海のよりが戻った未来もあったのだろう。それでも明海は背中を押した。それは同じあやまちをさせないために。

そして卓巳は黒服達と一緒に商店街の入り口に向かって歩き出す。カナメだけはその場に残っている。明海に話があるためだ。

「ありがとうございます。私一人では卓巳さんを、無理やり邸に連れて行くしかありませんでした。卓巳さんは私達について何か言っていましたか？」

「いえ、特には何も。ただ、すごく楽しそうに話していましたよ」

「そうですか。いい事を聞きました。ありがとうございます」  
「そう言って一例をする。」

「最後に一つだけいいでしょうか？」

「何ですか？」

「卓巳さんとお嬢様がお付き合いをする事になった場合、狩野様はどうなさりますか？　応援するのか、しないのかって意味です」

「両方です。卓巳には幸せになってほしいと思いますけど、やっぱり私の気持ちもあります。私は今でも卓巳の事を好きです。正直に言えば、私の元に帰ってきてほしいですよ。ですが、こればかりは私がどうこうできる問題ではないので、応援をしたいですし、逆に応援もできません。こんな答え方は正しいですか？」

「卓巳さんの思いを受け止められて、狩野様は優しいですね」

「逆に聞きますが、カナメさんはどう思っているのですか？」

「と、いいいますと？」

「卓巳の事です。何とも思っていないのですか？」

「私と卓巳さんは職場の同僚です。確かに卓巳さんは優しい方です。きっと卓巳さんもそう思っていると思います」

「違います。私はカナメさんの事を聞いているの。卓巳の思いは関係ありません」

カナメにとつて、どうして明海がそんな事を聞くのが理解できなかった。カメにとつて卓巳は人として好きな部類に入っている。それはカナメ自身も認めている。それでも恋愛感情に発展するのは分からない。恋愛感情というよりか、世話のかかる弟のような気持だった。

現段階での思い。今のところはそうだった。だが、明海の次に発した言葉で心が揺れた。

「ならどうして卓巳を必要以上に求めているのですか？ お嬢様のためですか？ 心のどこかでは、お嬢様を口実にしていたのではないのですか？ もっと卓巳と一緒にいたかった。もう少し卓巳にお菓子和紅茶を出して、何気ない一時を味わいたいと思った。できるなら、いつまでも三人でいたかった。……生意気な事を言ってます」

明海は頭を下げ、最後に「私はこれで」そう簡単に告げ、カナメの返事を聞かず逃げるようにその場を後にした。

残されたカナメは何も言う事ができず、数秒だけ明海の背中を追ったが、それも数秒。すぐに来た道を歩き出す。カナメが無表情な

のはいつも通りだが、心だけは酷く揺れていた。

邸に戻る車内は実に重たい空気だった。

無表情なのだが、色々な思いがあるカナメ。まるで人形のようにピクリとも動かない黒服。そしてその黒服に挟まれながら座っている卓巳。この状態で居心地がいい人は、数えるほどしかないだろう。

それなら大人しくと、卓巳はこれからの事を考える。手っ取り早く、「お嬢様と一緒にいたい」それだけを告げれば、問題は解決するだろう。だが、それを言えれば、今まで苦労はしなかったはずだからこそ考えた。どうやって話を切り出そうか、最初に何を言えばいいのか、邸につく短時間はその事を考えていた。

カナメはカナメで、先ほど言われた事を引きずっていた。卓巳との関係についてだ。明海に言われた事はあながち間違っではないのかもしれない。そう思うと、自分の中にある荒んだ心がどうにも嫌になり、カナメは卓巳の表情をまともに見る事ができなかった。そして何より、自分の事なのに、今の気持ちが分からなかった。はつきりしなかった。それがもどかしく、切ない気持ちになる。今までに一度も恋愛をした事のないカナメにとって、今の気持ちが何からくるものか分からないのは当たり前である。

取り敢えずは、卓巳さんとお嬢様の仲を以前に戻そうとカナメは結論を出したのだった。

## 28 パシリ 自分の思い

卓巳とカナメは二人並んで、愛華の部屋の前に立っている。

もちろんだが、愛華は卓巳が来ている事を知らないし、カナメが外出していた事も知らなかった。部屋から見える外の風景をずっと見ていたからだ。

「カナメさん。今回は俺一人でもいいですか？」

車内で考えた結果がそれだった。カナメは特に何も言わずに、そつとその場を後にした。残された卓巳は深呼吸を一つし、決意を決めてから軽くノックをする。

直後に部屋の中から「どうぞ」と愛華の声が響く。

ゆつくりとドアを開け、ドアの向こうにいる愛華を卓巳は見据える。

愛華は豪華な椅子に座り、外を眺めていた。そのため卓巳の存在にまだ気づかないでいる。卓巳が部屋に一歩足を踏み入れ、その場で立っていると、ゆつくりと愛華の視線が外からドアの方に移った。ありえない物を見たかのように、愛華の表情は驚き一色だったが、すぐにその表情が消える。その代わりにどこか嬉しいような、怒ったような、それでいていじけているような不思議な表情を一瞬だけした。

それもまた一瞬。すぐに視線を外に移したのだった。あたかも卓巳に表情を見られまいとする乙女のように。

「……どうしてここに？」

「色々な人に背中を押してもらったから」

色々な人。カナメに明海に梨乃の事だ。あくまで名前は出さない。

「そう」

そこで会話が終了してしまった。

このままでは何の解決にもならないと、卓巳は一步、また一步と歩き出す。向かった先は未だに豪華な部屋に不釣り合いな小汚い椅

子だった。その椅子に腰を下ろす。

「カナメさんから聞いた。部屋に引きこもっているらしいな」

「……またカナメですか」

嘆息に似たため息を一つ愛華はする。

彼女にとってカナメとは実に大きな障害物になっている。卓巳はカナメに恋心を抱き、自分が入る隙間がないのだと勘違いしているため、卓巳の口からカナメの名前が出される度に胸に突き刺さるのだった。そうとは知らず、卓巳は何気なく話題を振ったのだが、それが失敗する。その事に卓巳は全く気づかないでいた。

その返事の答えを探すように、卓巳は外を眺めている愛華の横顔を凝視する。当たり前だが、その横顔には答えなどない。あるのはカナメと少し似ている無表情の横顔だけだった。

「あのさ、カナメさんが心配しているぞ」

「そう。それは嬉しいわ」

「嬉しいって……。もう少しカナメさんの気持ちを考えてやれよ」

「うるさい」

ボソツと呟くその声は、これ以上何も聞きたくない訴えだった。

「あのな」

「うるさいって言っているの！ さっきからカナメ、カナメって！ 卓巳は私の気持ちを考えた事ある！？ 適当な事言わないで！ それに卓巳はカナメの何なのよ！」

我慢の限界がきたのか、乱暴に椅子から立ち上がり愛華は大声を出して卓巳を責める。

そんな愛華に圧倒されて卓巳は数秒フリーズする。

「……何って言われても」

「二人は付き合っているの！？ そうならそうって言えばいいじゃない！」

「いや、俺たちは付き合っていない。カナメさんもだと思っけど、別にお互い異性として見てないと思う」

「それじゃあ何よ！？」

「……俺の中でカナメさんは優しい姉さんみたいな感じ。ここにくるまで俺は、何をするにしても冷めていたと思う。家庭環境が悪いって事もあって、どこもなく人より愛情っていうのかな……。それが現実になかったのかもしれない。だから俺はその全てを持ってるカナメさんに甘えている。これからそのつもり」

「意味が分らない！」

そして乱暴に椅子に座ったかと思うと、再び視線を外に移した。部屋から出て行かないのは、とっさに椅子に座ったため、出るに出られない状況になったからだ。

「なあ、お嬢。一つ頼みがある。聞いてくれないか？」

「カナメと一緒に居たいって？」

「いや、それもあるけど……」

「それじゃあ、何？」

「あんな、俺はお嬢とも一緒に居たい。……いや、お嬢と一緒に居たい」

はつきりと言い放つ。

日本語とは実に不思議な言語で、一見同じような意味に思える言葉でも、一文字違うだけで全く違う意味にもなる。この場合もそうだ。「とも」と「と」これが違うだけで意味が変わってくる。簡単にいうならば、「とも」なら複数で、「と」なら単数となる。

あくまで卓巳の思いは愛華にあり、カナメではない。卓巳はカナメの事も好きであるが、それは恋愛感情とは違う好きだからだ。その言葉は不意打ちだった。愛華は驚き、卓巳の顔に視線を移した。

「どういうこと？」

「だから俺はお嬢と一緒に居たい。お嬢の側に居たい」

「からかっているの？」

「いや、これが俺の本音。だって、お嬢の事が好きだから……」

その言葉を口にする抵抗は、今の卓巳に持ち合わせていなかった。はつきりと言い、そして驚き一色の愛華の目を見据える。

その目はとても真剣で、冗談といった類は全く感じとれない。愛華もその事に気がつき、一瞬で耳まで真っ赤になる。

愛華にとって卓巳の告白は人生で初めての物だった。テレビドラマでそういった場面は今までに何度も見てきたが、まさか自分がその場面に立ち会うとは思ってもせず、頭の中が真っ白になり上手く言葉を発する事ができなかった。

とても簡単な一言。それでも、とても難しい一言。その矛盾する言葉が今の卓巳と愛華の関係を修復する一番大切な言葉だった。

どちらかが自分の思いを相手に伝えれば、それだけで済む簡単な問題でもあり、自分の思いを言いだせない二人にとっては難しい問題。

ただ一つ言える事は、この魔法の言葉によって二人はハッピーエンドを迎える事だけだった。

それでも二人の関係は特に進展はしなかった。それでも以前の関係には戻れた。もしかしたらそれが一番の進展なのかもしれない。あくまで雇い側と雇われる側の関係が。

## 29 パシリ 平日の放課後

お嬢様との問題が解決してから数日後。

卓巳の気持ちもが天気にも反映されたかのように、雲ひとつない青い空が広がっていた。

平日の放課後。明海は友だちの梨乃と一緒に下校していた。

二人とも部活には入部しておらず、他愛もない話をしながら歩いている。

「それでね、今日は欲しい本の発売日なの。だから本屋によらない？」

少し前、といってもそれほど長い月日が経った訳ではない。梨乃がメールで明海を呼び出し、卓巳と二人きりにした翌日。卓巳との出来事を聞こうとしたが、明海が落ち込んでいたようだったので、何も聞けるはずがなかった。その日から話題に卓巳を出さないように、梨乃は心がけている。そして明海がどうして落ち込んでいたのかは、卓巳の背中を押した事によって、よみが戻らない可能性の方が高くなったためだ。

「別にいいけど、試験近いよ？」

「それもそうだけど、やっぱり続きが気になるじゃない？ そのままだったら勉強にも集中できないって」

「……それもそうだね。あれ？ 校門の方が騒がしいけど、何かあったのかな？」

明海の視線の先、校門では下校途中の生徒で人だかりができていた。

「ん？ 本当だ。ちょっと見に行こう！」

野次馬精神にのっとり、梨乃は駆け足で校門に向かう。その後を「もう」と、呆れたように呟きながらも明海も後を追う。

あまり人だかりのない左右から、何事かと明海と梨乃は視線を送



る。

そこには三人の男性がいた。一人は明海がよく知っている人で、その後ろに黒服の大男が二人立っている。さらに後ろには、いかにも高級と言わんばかりの外車が二台停まっている。

「お迎えにあがりました。明海お嬢様」

明海の顔を見るや否や、綺麗な一例をし、明海がよく知っている人 卓巳が言う。

一瞬辺りがざわめく。それもそのはずである。少し前までは一緒にのクラスで勉学に励んでいた人が、突然学校に現れたかと思ったら、黒服二人を引き連れてやってきたのだから。

「ちょ、ちよつと！」

明海は大声をあげて、突然の出来事に不満を言おうとする。

「西沢様。そろそろお時間の方が」

「ん。俺は病院に行くから、お嬢のところに案内してやってくれ」

「分かりました」

「ちよつと！ 私の話を聞いてください！」

「ん？ あつ……。それでは明海お嬢様。こちらに」

黒服の一人が車のドアを開ける。

「どうして私が車に乗らないといけないの！？」

「愛華お嬢様からお話があります。どうか話し相手になっていただけないでしょうか？」

「……わかった。梨乃ごめんね。また今度付き合うから」

数秒だけ考えると、そう結論を出した。愛華とは一度も面識はないものの、それでも明海には思ふ事がある。特に今後の卓巳と愛華の関係についてだ。この機会を逃すと今後こういった機会がないと考えが至ったのだ。

もう一度だけ梨乃に簡単な謝罪をしてから明海は車内に乗り込む。

「おつ、何どうした？ コスプレ？」

そんな中、さっそうとはいかないが、軽いノリで卓巳の友だちである高松良助が現れた。そして卓巳を見ると盛大に笑いだす。

「お前な……」

卓巳は友人の軽さに呆れる。

「西沢様。お時間の方が」

「西沢様だって！？ うわっ、超にあわね。……もう無理、笑いすぎて腹が痛い」

その軽薄な態度が気に入らなかったのか、それとも上司を侮辱された事に対する怒りなのか、黒服は良助の前に立つ。

一瞬にして辺りが緊迫する。

「あー、別にそいつの事はほっといいていいので」  
「ですが」

「上官の命令は絶対だったよな？」

「……分かりました。お嬢様がお待ちしておりますので、私達は一足先に行かせていただきます」

「ん。後は頼みました」

やれやれと言わんばかりに、卓巳は少し表情が蒼い良助に向き直る。

「あのなー。もう少し周りと相手を見ようよ」

「えっ、これってネタとかじゃなくて……」

「当たり前だろ。ネタで高級車ひっぱるかって」

「西沢様！ もうお時間がありませんので、早くお乗りください！！」

黒服だけではなく、運転手からも声がかかり、卓巳は少しバツが悪そうな表情をする。

「分かった。すぐ行く。……まっ、そういう訳だ。またな良助」

「ちょっと待ちなさい！ 明海をどこに連れて行ったわけ！？」

もう一台の車に乗り込もうとした卓巳にストップの声がかかる。

相手は言うまでもなく梨乃だった。

梨乃の表情は焦っていた。それもそのはずである。大切な友人が黒服に連れて行かれ、しかも車が車である。きつとそっちの道の人に連れて行かれたかと思っっているのかもしれない。

「あー、心配しなくても大丈夫だと思う」

「ふざけないでよ！ それに西沢くんは大男に命令をしたり、高級車で学校にきたり、いったい何をやっているの！？」

「何って……。ねえ、運転手さん？ 俺の立場って何？」

「大変説明しがたいですね。一般の会社の役職だと……。副社長といったところではないのですか？」

「らしいです。今は副社長をやっています」

言うまでもないが、ボスは愛華である。そしてその下、愛華の元で働いている方々をランキング順にすると、卓巳が一番上になる事になる。そうなれば、ボスの次である卓巳がその役職につく事になる。愛華が会長なら、卓巳は社長となる。まあ、そこら辺はあくまで例である。

「訳の分からない事を言わないで！ 証拠を見せなさい、証拠を！」  
「なら一緒に来るか？ それが一番手っ取り早いし。それに早く病院に行かないと、面会時間が終わってしまう。今説明する時間もない」

「……分かった。私も一緒に行く」

ざわめく生徒達を気にせず、二人は車に乗り込んだ。

ゆつくりと車は発進し、目的地である病院に向かって走り出す。

車内の中では特に会話がなく、二人して流れる景色を見ていた。

目的の病院についた頃には、すっかり辺りが暗くなっていた。

そろそろ面会時間が終わる時間が迫り、卓巳は急いで亜里沙の病室に向かう。その後ろを梨乃は追いかけていた。別に車の中で待っていてもよかったのだが、運転手と二人きりは気まずいと、卓巳について行く事を選んだのだった。

素早くエレベーターに乗り込み、走るわけではないがそれでも早歩きで亜里沙の病室に行く。今日は平日であり、いつもお見舞いに行く日曜日ではないため、卓巳の脳裏には驚く亜里沙の顔が浮かんでいた。そのせいか、つつい頬が緩んでいた。

病室の前にある殺菌用のジェルを手になじませ、軽くノックをしてからドアをスライドさせる。亜里沙の場所はカーテンがかかって中は見られなかったものの、何か面白い物でも見ているのか、クスクスと笑い声が漏れていた。

そつとカーテンを開き、卓巳は何食わぬ顔で近くの椅子に腰を下ろす。

「どうも、こんばんは」

ちなみに梨乃は気を利かせたのか、それとも気まずいのが嫌なのか、病室の前にある壁によしかかって卓巳を待っていた。

そして亜里沙といえば、漫画本を片手に驚きを隠せないようだった。今にも「わー！　わー！」と叫びそうである。それを我慢し、深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。そんな亜里沙の姿をニヤニヤと、卓巳は面白そうに見ていた。

「……もう。ビックリしたじゃない。それで、今日はどうしたの？」

「用がないと見舞いにきちやまずいか？」

「それは嬉しいけど……。何か裏があるようで」

「もしかして俺って信用なかったりする？」

「うん！　……うそうそ！　冗談だって冗談」

「あのなー、……まあいいや。それより調子どうだ？」

「調子いいってお医者さんが言っていたよ。それでね、今度外出してもいいって言っていたから、ちよつと遊びに行こうと思うの」

「そうか。それなら俺からデートのお誘いしてもよろしいでしょうか？　東郷お嬢様」

「えっ？　ちよつと待って……。心の準備が」

「冗談だ」

「冗談？　……もう、バカバカ！」

「ははっ。ごめん、ごめん。さてと、俺はそろそろ帰るよ。もうご飯の時間だろ？」

「あつ、本当だ。またいつでも遊びにきてね」

「ああ、またな」

来客者用のパイプ椅子を元の場所に戻し、最後に「また来るな」と軽く告げて、卓巳はその場を後にする。

病室の前で壁によしかかっている梨乃は、ボーっと向かいにある変わった要素のない壁を見つめていた。

「かなり早かったわね」

「面会終了の時間。それより一緒にくればよかったのに」

「だって恥ずかしいじゃない。こう見えても私って人見知り激しいの」

「そう。それは失礼しました」

そう他愛もない話をしながら、二人並んで車の方に歩き出した。

### 30 パシリ レディと呼ばせて

お見舞いが終わり、卓巳と梨乃は特別急ぐ必要もないため、ゆっくりと邸の中を歩いていった。梨乃は無駄に広い邸や、本物のメイドを見て驚き続けた。今も興味津々といった感じに、邸をキヨロキヨロと見ながら歩いている。さながらその姿は、田舎から都会に初めて足を運んだ少年少女のようだった。

メイドが卓巳に向かって必ず一礼する光景を見て、卓巳の言っていた事を思い出し実感する。そんな自分と同じ年の少年の横顔を梨乃は盗み見る。

その何も考えていなさそうに前を見て歩いている横顔からは、何も得る事がなかった。実際のところ、特に卓巳は何かを思っている訳ではない。この生活にも慣れたため、驚きや戸惑いといった感情はどこかに置き忘れたようである。

「家の中を土足って落ち着かないわね」

「そうか？ 少女Aの家は土足じゃないのか？」

一般家庭の常識までもどこかに置き忘れたようである。

「あのね、ここは日本なのよ。普通の家で土足って方がおかしいでしょ」

「そう言えばそうだったな。お嬢のところに行く前に、ちょっと寄り道してもいいか？」

「私は明海のところに行くから早く行きたい」

「お嬢の話は長いから、まだ時間かかると思うぞ？」

「……どこに連れてくつもり？」

「んー、メイドさんのところに行くつもり」

行先はカナメのところだった。

梨乃は早く明海のところに行きたがっているようだが、愛華は大切な話があると明海を呼び出した。そのため部屋に入れてはくれないだろう。そうなればどこかで時間を潰す必要があり、この邸を隅

々まで知っている訳でもない卓巳にとってはカナメの部屋しか居場所はなかった。

二人が歩いている場所からカナメの部屋までは遠くはなく、すぐにカナメの部屋についた。

二度ノックをすると「はい」と、落ち着いた声と共に部屋が開く。カナメの表情は特に驚く事はなく、いつもと同じ無表情でその場に立っている。それからすぐに部屋に招き入れるように一歩横にずれる。

その横を卓巳は「おじゃまします」と軽く言ってから通り過ぎる。梨乃も唯一の知り合いから離れる訳にはいかないと、少しためらいながらも「お邪魔します」と言って部屋に入った。

それほど広くない部屋とは不釣り合いなダブルベッドに卓巳、一つだけ置かれた椅子に梨乃が座る。そしてカナメはお茶菓子の用意をしていた。

「ねえ、他人のベッドって少し失礼じゃない？」

「ん？ そうか？」

「そうよ。だから西沢くんは立っていなさい」

「さらっと酷い事いうな。それに俺はここが特等席だから問題ない」  
勝手に特等席にされてもカナメは文句を言わず、三つのティーカップとクッキーを持って椅子とセットの机に置く。そして無表情で卓巳の隣に腰を下ろした。

「本日は紅茶とクッキーにしてみました。お口に合うか分かりませんが、召し上がってください」

「い、いただきます。……お、美味しい」

「喜んでいただけたのなら幸いです」

「ねえ、カナメさん。お嬢達の話が終わるまでここに居てもいいですか？」

「はい。何もない部屋ですが、ゆっくりして言って下さい」

「ありがとうございます」

ベッドから少し離れた机に手を伸ばし、二つのティーカップを手  
に取ると一つをカナメに渡し、もう一つのティーカップに口をつけ  
て飲み始める。梨乃の言った通り紅茶が美味しく、卓巳の頬は自然  
に緩む。

「ところでさ、どうしてお嬢は狩野を呼び出したんだ？」

「はっ？ あんた分かんないの？」

「そのつもりだけど、何かおかしいか？」

「当たり前よ！ 二人はあんたの事で話し合っているのよ」

「どうしてだ？」

「どうしてって……。二人とも西沢くんが好きだからじゃない  
の。私は詳しく分からないけど、それ以外思いつかないわ」

「……なるほど。理解できました」

大きなため息を梨乃はつく。

「ところでさ、西沢くんはお嬢様と付き合っているわけ？」

「それは」

卓巳が答えようとしたところで、カナメの部屋に置かれた電話が  
鳴る。そこでいったん会話は途絶える。

そこで会話が中断し、カナメがゆつくりと受話器を手にとって耳  
に当てる。「……かしこまりました」相手の愛華は用件を簡潔に伝  
えられ、すぐに受話器を元の場所にカナメは戻す。

「お話が終わったようです。家までお送りいたしますので、こちら  
に」

「あつ、はい。紅茶とクッキーごちそうさまでした」

まだティーカップに残っている紅茶を一気に飲み干し、梨乃は慌  
てて椅子から立ち上がる。

カナメは来客者二人を車まで案内し、再び卓巳と一緒に部屋に戻  
ってきた。時間も時間なため、もう愛華からの命令がないと思っ  
ての行為だった。

今日も一日疲れたと呟き、卓巳は勝手にカナメのベッドに寝転が



る。その身勝手な行為を目の前にしても、カナメは表情一つ変える事はなかった。

「……今日はもう疲れました。このまま寝ちゃってもいいですか？」

「よろしいですが、私は寝相が悪いですよ」

「……ちよつと想像つきませんね」

「よく言われます。卓巳さん、少し邸の中を歩きながらお話しませんか？」

「俺はもう立ち上がれません。おんぶしてください」

どこまでも失礼でカナメに甘える卓巳であった。ちなみに相手がカナメだからこそ言え、相手が愛華や明海だところはいかない。こんな姿も見せないだろう。

「……それではこの部屋でお話をしましょう。卓巳さんはお嬢様の事が好きですか？」

「大好きですよ」

「狩野明海様は？」

「好きですよ」

「東郷亜里沙様は？」

「好きですよ」

「本庄梨乃様は？」

「……よくわからないので、普通です」

「では私は？」

「大好きです。ちなみに聞きますが、どうしてそんな事を聞くのですか？」

「特に深い意味はありません。お気になさらないで下さい」

ちらりとカナメの表情を見ても普段通りで、何を考えているかわからず卓巳は少しだけ首をかしげる。といつても、ベッドに寝そべっているため自分以外はわからないほどささやかだった。

「結局のところ、どうしてお嬢は見知らぬ俺を執事にしようと思ったのでしょうか」

「私にも分かりません。お嬢様に直接聞いてみてはどうでしょうか」

？」

「はぐらかされました」

「そうですか。……突然ですが、一言いいですか？」

「どうぞ、どうぞ」

「私に恋愛を教えてくださいただけないでしょうか？」

本当に突然だった。

卓巳は目を丸くしてカナメを凝視した。

「と、いいますと？」

「私とお付き合いをしましょう。そうすれば恋愛がどういったものなのか分かるような気がします」

「なるほど。……えらく唐突ですね」

そしてクスツと卓巳は笑う。

「ええ、唐突でした」

カナメも珍しく笑みを見せた。

「やっぱりカナメさんは笑顔が似合いますね。とっても可愛いです」

「私は笑顔なんて見せていません。それで返事はどうなのでしょう  
か？」

「そうですね」

卓巳が返事を言い終える前に、部屋の電話が鳴る。愛華がご立腹だと悟った二人は「お嬢が呼んでいますね」「お嬢様がお呼びになつておりますね」と、似たような事をそろえて言った。

突然執事になったぶっきらぼうの卓巳。

嫉妬深く意地っ張りな愛華。

無表情のカナメ。

どこにでもある平凡な生活とは言い難いが、それでも少し平凡で少し変わった三人の非日常的なお話。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4080c/>

---

レディと呼ばせて

2010年10月8日13時37分発行